

---

# **魔王はハンバーガーがお好き**

28号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王はハンバーガーがお好き

### 【NZコード】

N7736S

### 【作者名】

28号

### 【あらすじ】

異世界で死したはずの魔王。

勇者に剣によつて絶命したはずの彼はなぜか、現代の地球、それもアメリカの荒野に建つ一軒のハンバーガーダイナーの前に立つていた。

今は廃線となつたアメリカで有名な国道ルート66。

その国道沿いにひつそり建つハンバーガーダイナーを嘗む少女と、死に損なつた魔王の奇妙な日常と恋。（『6倍数の御題様』よりお借りした御題を使用した作品です） 本編完結しました

## はじめに

この連載は、文章力とやる気の足りない己を鍛えるための、修行企画です。

『6倍数の御題様』 <http://www3.t0/6title>  
よりお借りした『60の創作の御題2』と『6つのセリフの御題4』  
を合計した66のお題を使って小説を書いていくという物です。（  
あえて66にしたり、舞台がアレなのは、完全に私の趣味です）  
小説は短編連作で、66で一つのシリーズが完結する作りにしよう  
と思っています。

目標は1週間で3話（その分1話1話は短めでいきます）

勝手にやれよって感じですが、ほら、見られてると思つと、さぼり癖も強制されるかもしれないし・・・ということで、こちで掲載させて頂くことにしました。勝手に。

もしお時間があれば、のぞいて頂けますと幸いです。  
つつこみ、感想等もお待ちしておりますので、何かあればコメント  
等お待ちしております。

あらすじ

異世界で死したはずの魔王。

勇者に剣によつて絶命したはずの彼はなぜか、現代の地球、それも  
アメリカの荒野に建つ一軒のハンバーガーダイナーの前に立つてい  
た。

今は廃線となつたアメリカで有名な国道ルート66。  
その国道沿いにひつそり建つハンバーガーダイナーを嘗む少女と、  
死に損なつた魔王の奇妙な日常と恋。

60の創作の御題2

はじめて

日課

メイク

甘える

少年の心

苦手なもの

ギター

毒舌

樂屋

笑い方

寝たふり

タイミング

リラックス

対決

美男子

バナナ

集合

アイコンタクト

お祝い

メンバー

ツボ

ちびっ子ギャング

28

27

26

25

24

23

22

21

20

19

18

17

16

15

14

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

得意料理

5 8	5 7	5 6	5 5	5 4	5 3	5 2	5 1	5 0	4 9	4 8	4 7	4 6	4 5	4 4	4 1	4 0	3 9	3 8	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	3 1	3 0	2 9
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
見せ所	睡眠	グルメ	我慢	うるさい	いつの間にか	協力	オフショット	仲間入り	愛犬	ドライブ	気合	ケーキ	ハスキーボイス	フォロー	応援	人見知り	食事	大切に	とぼける	いたずらっ子	掛け声	センス	ワイングラス	変身	バランス	打ち合わせ

59・絆

60・またね

6つのセリフの御題4（10話」と「1題挑戦します）

- 1・「あなたが言つと冗談に聞こえません」
- 2・「今は非常時だよー非常時だからきつと何をしても許されるよー」
- 3・「可哀想な子、みたいな田で見られるから話したくありません」
- 4・「えー、この人と一緒にされると迷惑なんですけど」
- 5・「これって正当防衛だから罪にならないよね？」
- 6・「あーーアホらしい。わざわざ帰るわ」

お題配布もと『6倍数の御題様』  
<http://www3.toto/6title>

## Episode 01　はじめて

すべてが終わる。

それを望んでいたはずなのに、なぜか私はこんな所にいる。

ハンバーガーダイナー『ROUTE 66』。

見覚えのない文字だが、なぜだか私は目の前に建つその店の名前をはつきりと読むことができた。

その店の周りに、他の建物は何もない。

どこまでも広がる荒野と岩山、店の側を走る灰色の道だけが地平線の彼方と伸びている。

「いつまでそんなトコいんの？入るなら入りなよ」

店の前に立ちつくしていた私に声をかけたのは、1人の少女だった。年は10代後半くらいで、長い髪をひとつに結わえている。

「ほら、早く」

屈託のない笑顔につられ、私は少女とともに店の中に入った。店には少女の他に人影はなかった。

「何にする？ つつてもハンバーガーしかないんだけど」

「じゃあ、それで」

「飲み物は？」

「ワインを」

「そんなしゃれた物ないよ。 あるのは炭酸、コーラかスプライト。

炭酸抜きならオレンジジュースかコーヒー」

「コーヒーならわかる」

「ホット？ アイス？」

「ホットで」

「ポテトは？」

「いや、コーヒーに芋は入れない」

「ちがう、サイドオーダーきてんの」

「よくわからないが、それはどのような芋なのだ？」

「・・・細く切つてあげてある芋。ケチャップにつける」

「ケチャップとは？」

「あんた本当にアメリカ人？」

「いや、メルトキオ人だ」

「トキオ？ つてことは、日本人観光客か。でも日本人つてそんな赤い目だけ？」

「いや、私の瞳は特別らしい。人が殺せるからな」

「もうアメリカンジョーク体得してんの？ 笑えないけどまあいいや、観光客ならサービスしてあげる」

少女はそう言つて笑うと店の奥へと引っ込んでしまつた。

1人窓際の席に座り、私はこの状況について考える。

つい先ほどまで、私は自分の城にいたはずだった。そこで待ちこがれた勇者と対峙し、己の運命と命の終わりをようやく迎えたはずだった。

なのに・・・。

「はーい、特製ハンバーガーとポテトとコーヒーお待ちー」

目の前に置かれたのは、香ばしいにおいの牛肉が挟まつたサンドイッチであった。サンドイッチにしては見てくれがよくないが。

「これがケチャップ。ハンバーガーにもつけるといいよ」

いうなり、少女は無骨なサンドイッチの上部のパンをばがし、そこに瓶詰めにされた真つ赤な血液をぶちまけた。

この少女、見かけによらず、豪傑である。

「よし、食べな！」

はがしたパンを最初よりも3センチほど傾いた状態で上にのせ、少女は笑う。

「では・・・」

言いながら、私はナップキンとナイフとフォークを探す。

しかし、ない。

「もしかして、箸とかさがしてる？ ハンバーガーはね手で食べるの、手で」

「ではナプキンは？」

「汚れたらトイレで洗えばいいよ」

「いいのだろうか、それで。

「いいからたべてよ、マジでおいしいから」「

言いながら、少女は私の向かいの席に腰を下ろす。許可無く魔王と相席とは、この少女、やはり豪傑である。

少女の視線が気になりつつも、私は無骨なサンドイッチを手でつかみ、口にした。

「・・・・・・・」

「どう?」「

美味である。

非常に、美味であった。

「ね、おいしいでしょ?」

否定しようがない。美味だ、生きていてよかつたと涙が出るほど美味であった。

「泣くほどおいしいか、そうかそうかー。さっすが私」「

肉を包むパンはほどよい加減にトーストされ、間にはさまつた肉厚な牛肉からは肉汁が絶えずしたたる。

そしてなにより、このケチャップという血液！

今まで飲んだ人や妖魔の物とも違う、芳醇な香りと甘美なる舌触りである。

そしてこれが、パンと肉に非常に合つのだ。

「こんなに美味な食べ物は、はじめてだ」

「そ、そんなに褒めなくとも・・・」

「私は嘘はつかぬ」

気がつけば、私は手元のハンバーガーとやらをすべて食べてしまつていた。付け合わせの芋とピクルスと呼ばれる酢の物も平らげていた。

もちろん、コーヒーもおいしく頂いた。ただし、コーヒーの味だけは最悪だったがハンバーガーのおいしさの前ではそれも氣にならなかった。

ない。

「\$4・79でセレ」まで満足してもうたるとせ、我ながらいい仕事をしたもんだ」

「うむ、誇つてよいぞ」

それより・・・

「よんじるななじゅうきゅうせんと、とはいつたい何のことだ?」

私がそう訪ねたとたん、なぜだか少女の顔から血の気が引いた。

この世界にきてから、私の日課はダイナー『ROUTE 66』の掃除となつた。

未だにこうして生きていることはもちろん信じられないが、一番信じられないのはこの私が、魔王であるこの私がたつた1人の少女に虐げられていることである。

「モップがけ終わつたら、トイレ掃除もお願ひねー」

納得いかない。たつた一回の無銭飲食でもう1週間もこき使われている。

その上私の素性を話したというのに全く信じるそぶりもない。これは近々、ダイナーの看板を私の邪眼ビームか魔剣で粉碎してみせねばなるまい。そうすればさすがの少女も私の恐ろしさを知るであろう。

そう考えたとたん、私は思わず魔王的な不適笑いを浮かべてしまう。虐げられ続けた所為かドススイッチが入つてしまつたようだ。がしかし、それを少女は鋭い洞察力見どがめた。見どがめた上に、舌打ちました。

「ほら魔王！ はやくしないと、バーガーにチーズ挟んであげないからね！」

それは困る。私はハンバーガー、それもチーズが挟んである物が大好物なのだ。虐げられるのは不快だが、チーズバーガーと等価交換なら致し方ない気もする。

そもそも、私には行くところもないのだし、掃除だけで衣食住がまかなえるのなら安い氣もする。

と納得のための言い訳を自分に繰り返し、私はドススイッチを切つた。

## Episode 03 メイク

「この世界にきてすでに2週間がたつた。家がない私を、少女はダイナーに住まわせてくれている。

いまだ、なぜこの場所に自分がいるのかはわからない。もちろんもとの世界への帰り方もわからない。帰ると言われて帰るかどうかは別として。

正直、私はこの場所を気に入り始めている。

理由は二つ。一つ目はここにいれば毎食ハンバーガーが食べられる事。

二つ目は、少女と暮らすの日々がそれなりに充実している事だ。少女はとにかく感情が豊かで、毎日一緒にいても飽きることがない。

そしてもう一つ、時折聞くことができる少女の歌声。これが何よりもぱらししい。

といつても、歌う状況はもう少し考えて頂きたいところだが・・・。

田頃は魔王であるこの私を虜げるほどの豪傑でありながら、時折どうしようもない間違いを起こすことが少女には多々ある。そしてそう言うとき、彼女は歌うのだ。

ちなみに彼女の間違いのほとんどは、異性との交友関係だ。

この少女、男らしいわりに、交際している男にこなつとだまされるのである。

一股をかけられるのは日常茶飯事。最高で20又をかけられたこともあるらしい。そして売り上げをそう言う男に貢いでしまうため、店もボロこままなのだという。

男にだまされた次の日はたいてい、少女はメイクもせず素顔のままで店に来る。その顔には泣きはらしたあとがくつきりで、そう言う日は店を開けず、テラス席に腰を下ろし一日中ギターという楽器

を弾きながら失恋の歌を歌うのだ。

これが、非常に上手い。ただ聞いていると妙に切なくなるが。

「あたし、本当はカントリー歌手になりたかったの」  
歌の合間に、彼女がそうこぼしたことがある。

この世界の歌い手にどのような物がいるかはわからないが、少なくとも私は彼女が夢をかなえるだけの声と素質があると私は思っている。

ハンバーガーと同じくらい、彼女の歌声は私をこの世界に縛り付けるだけの魅力があつたからだ。

しかしいくら褒めても、彼女はそれを本気にはらない。

ハンバーガーが好きな魔王の言葉は当てにならないと笑い、また  
続きを歌い出すのだ。

仕方なく、私は彼女の側で彼女の歌を黙つて聞き続ける。

地平線に沈む夕日が荒野を赤く染め、失恋から少しだけ回復した  
彼女が、私のためにハンバーガーを作ってくれるまで、私は彼女の  
側で彼女の歌を聞き続ける。

## Episode 03 メイク（後書き）

9 / 4 誤字修正しました（「」指摘ありがとうございます）

「はい、あーん」

「あーん」

と、窓際の席にかけているカップルがポテトを食べさせあつていいのをじっと見つめていたら、少女に殴られた。

「じろじろ見ないの」

「見ようと思っているわけではない。なぜか目に入つてしまふのだが私がいた世界では、男女は慎ましやかな交際をする物だった。とくに婚儀を終えるまでは。

ふれ合いといえばせいぜい手に触れたり、軽いキスをするくらい。しかしこちらでは、一つのポテトを両端から食べ合つたり、食事をしながら男性が女性を膝の上にのせたり、鼻についたケチャップを嘗めあつたりするのだ。

破廉恥である。しかし、なぜだか、見ていると目がそらせなくなるのである。

それを素直に言つと、

「たまつてるんじゃないの？」

と少女に言われた。

どういう意味かと返したら殴られた。

「あんたさ、恋人とかいないわけ？」

「魔王を愛してくれる者がいると思うか」

「あんた、性格はともかく顔はいいし」

「この世界では、顔がよいと異性にもてるのか？魔王でもか？」

「ちなみに体は？鍛えたりしてる？」

「一応鍛錬は欠かしていない」

「腹筋とか割れてれば、問題ないんじゃない？」

割れているとはじつことだらうか。私の腹は当てはまるのだろうか。

そう思い、「確認してくれ」と服をめくらあげたら、少女が真っ赤になつて私を殴り飛ばした。

今日はよく殴られる日だ。

殴られた勢いで床にひっくり返ると、逆さまの世界で男女が微笑みあつてゐるのが見えた。

今日もこの世界は平和だと、思わせてくれる暖かな微笑みだった。けれどそれを眺めていた私の脳裏には、暗闇と恐怖に囲まれていた私の日常が思い出させた。

同時に、今見ているすべては夢で、私はまだあの暗い世界の住人なのではないかという考えに支配される。

・・・がしかし。

「ほり、おきな！」

少女に蹴られた腹には鈍い痛み。そうか、やはりこれは夢ではない。

「なに一ヤ一ヤしてんのよ、やっぱり欲求不満なわけ？」

「いや、私は満たされてるよ」

私が笑うと、少女は意味がわからないとつぶやきながら、起きあがる私に手をさしのべてくれた。

## Episode 05 少年の心

「あんたさ、ハンバーガー作ってみる?」  
少女の言葉に、私は1も2もなく頷いた。客のいない、真夏の  
昼下がりのことである。

まあ実際やつてみたら少女のようにつまといかず、パテを5枚も  
焦がしてしまったのだが。

「私はハンバーガーを作る才能がないのだろうか?」

「あんたでも、凹むことあるんだ」

うなだれた私を、少女は笑う。

「安心しなよ、私も最初はこんなだつたから」

「今の君からは想像できないが」

「死んだ父さんにつきつきりで教えてもらつてさ、それでも一人前  
つて言われるまで1年もかかつた」

「そうか、武術の鍛錬と同じなのだな。何事も精進が必要というわ  
けだ」

「・・・もしも、だけど」

私のこがしたパテを鉄板からはがしながら、少女はがらにもない  
か細い声で続ける。

「あんたが、ずっとここにいるつて言うなら、教えてあげてもいい  
よ」

いやじゃなければ。と少女が続けた。

もちろん嫌なわけがない。むしろ、非常に喜ばしい事だ。

「君のような職人に私もなりたい。ハンバーガーは今や私の命だ  
「なにそれ」

「教えてほしい。なにもかもを」

私が少女の手を取ると、彼女は笑つた。

「そんな子供みたいなキラキラした目でみられたら、教えないわけ  
にはいかないか」

「では、今日からあなたは私の師匠だな」

「なにそれ、マスター・オビワンみたいな？あんたスター・ウォーズオ

タク？ますます子供っぽいよ」

「子供っぽいという敬称ははじめてだ」

「いいんじゃないの？少年の心を持つた魔王つてのも」

師匠はそう言つと、早速私にハンバーガーの作り方の手ほどきを

してくれた。

## Episode 06 カメラ

魔王の舌をつなげさせただけあって、『ROUTE 66』はそれなりにお客が来る店である。

店と同じ名の側を通る道路はほとんど使われていらないらしいが、それでもマニアックな観光客や、近隣の街に物資を運ぶトラックという機械仕掛けの乗り物が時折通りかかる。

そう言う人たちの中に足繁くこの店に通う物も多いのだ。

「いやあ、それにしてもわれらの歌姫にもついにコレができるとはなかでも、この男。私に向かって小指を突き立てている『ステイーブ』自称43歳独身は常連中の常連で、やたらと私や師匠にかまつてくる。

「で、歌姫との仲はどうくらい進展したんだ?」

「歌姫とは師匠のことか? 师匠とは、一緒に肉を焼く仲だ」

「お前変な奴だな。ジョークは笑えないが」

そう言いながら、ステイーブは唐突に私を側へと引き寄せる。

「ま、冗談はこれくらいにして」

言つなり、ステイーブは私に黒い小さな箱を押しつけてきた。

「お前みたいのが歌姫の好みとは思えん。何か訳ありだろ?」

「うむ」

「よかつたら、俺がいろいろと協力してやる」

「本當か?」

「ただし」

言つと、男は小さな箱を私の手にしっかりと握らせる。

「歌姫ちゃんの写真をフィルムいっぱいにとれ。もちろん気づかれないように、着替え中だとなおよし」

「写真? それは何だ」

「しらないのか?」

「うむ」

「とにかく歌姫ちゃんに気づかれないように」、このレンズから歌姫ちゃんをみろ！そしてこのボタンを押せ

「それだけで私に協力するといつのか？この世界に住人は皆人がよいのだな」

「俺は来週また来る。それまでにカメラとフィルムを預けるから、取りきれよ」

「承知した」

ステイーブが帰ったあと、私は早速カメラとやらで師匠の写真とやらをとつてみた。

・・・が。

「それで、あんた隠れているつもりなの？」

「うむ、隠れてとれとの指令だ」

「柱から、体の半分丸出しで？」

「全部隠れたらこの窓に師匠が入らない」

「魔王つて盗撮もできないのね」

「どうさつとはなんだ？」

「まあいいや、そのカメラ貸して」

「いや、コレは私の仕事で」

「私が写つてればいいんでしょ」

言つなり師匠は私の腕からカメラをひつたぐると、唐突に私の肩を抱き寄せる。

それからカメラの表面を私たちの方に向け、微笑んだ。

「魔王、あんたが好きなバーガーは？」

「チーズ」

そして師匠はボタンを押した。

## Episode 07 苦手なもの

「いや-----」

深夜。店の片づけをしていると突然師匠の叫び声が聞こえた。  
あわてて師匠のいる厨房に向かうと、彼女は黒い魔物と対峙して  
いた。

黒い魔物とは私の城のメイド達が、そう称していたゴキブリと呼  
ばれる小さな昆虫だ。

「おお、こいつはこちらの世界にもいるのだな」

「のんきにしてないで、退治して！」

といわれても手元に武器はない。

しかたなく、私は久しぶりに我が相棒を呼び出すことにした。

我が相棒の名は、魔剣アンティベラム。一振りで山をも切り崩す  
魔力を秘めた剣である。

「我が誓約により、出でよ！」

久しぶり過ぎて危うく忘れかけていた召喚の魔法を口にすれば、  
意外なほどあっけなく相棒は現れた。

『久方ぶりです。我が主殿』

「うむ。悪いが、お前の力を使つぞ」

『なんなり……』

言いながら、我が相棒は唐突に黙り込む。

『主よ、私はいったい何に使われるのか確認してもよろしいでしょ  
うか』

「あれを、たたきつぶそつと思つ」

『……せめて、切つてください』

『了解した』

長年の相棒の意見は尊重せねばなるまい。

私は相棒を鞘から抜き放つとほぼ同時に黒い魔物を切り捨てた。

『あと、可能なら洗つて頂けるとありがたい』

相棒の言葉に頷き、私は師匠に目を向けてた。

「黒い悪魔は無事葬り去つたぞ」

私が微笑んだとたん、彼女は突然白目をむいて気絶した。

「うむ、それほどまでに黒い悪魔が苦手だったのか」

『いえ、そう言うわけではないのでは?』

相棒の言葉を、私は理解できずにいた。

黒い悪魔を葬り去つてから、師匠は私と距離を置くようになった。それを柄にもなく寂しく思つていた4日目の夜、師匠に話があるといわれた。

「あんたさ、本当にこの世界の人じゃないの？」

これ以上嫌われるのは嫌なので、私は素直に頷いた。

「魔王って何か、グーグルで調べたんだけど、結構悪い奴だつたのよね。人の生き血をするとか、マジなの？」

「かつての主食は人の血であった。それこそが、私の力の源ゆえ」「もしかして、今も？」

「いや、ケチャップがあれば問題ないよつだ」

「そういうもんなの？」

「うむ、3食ハンバーガーだが問題ないぞ」

「でも隠れて人の魂を食らつてるとか」

「それはない。食らうよつた高貴な魂を持つ客がこの店には来ないからな」

「嫌み？」

「事実を述べたままでだ」

答えると、師匠は少しほつとした顔をした。どうやら、私は知らず知らずのうちに彼女に不安を与えていたらしい。そう言えども、魔王という肩書きはそう言つ物だったと、今更ながらに思い出す。

ここで暮らすうちに忘れていたが、そもそも私は人に恐怖を与える存在なのだ。

「師匠は、私が恐ろしいか？」  
「よくわからない。剣とか出したときは、さすがに少し怖かつたけど」

「もしも、師匠が私を不快だと思つならいっててくれ。そのときは、潔くここを立ち去るつもりだ」

「行く場所、あるの？」

「ない。しかし師匠は私にハンバー ガーのおいしさを教えてくれた人だ、そんな師匠を苦しめたくはない」

「ほんと、あんた魔王っぽくないわね」

「まあ、できたらここに居たいといつのも素直な気持ちだ。師匠の

ハンバー ガーとは、離れがたい」

「そこ、私と離れがたいとか言おうよ」

「師匠とも離れがたい」

「いや、今更だし」

「本当だ。師匠のハンバー ガーと同じくらい、師匠の歌も好きなんだ。あのギターとか言う楽器を奏でている姿は、美しいと思つ「ほ、褒めても何も出ないよ」

「事実を述べたままで」

師匠は突然赤くなると、私の方を乱暴に突き飛ばした。

「そ、そこまで言つならここに置いてあげてもいい」

「本當か！ ハンバー ガーをまた食べてもいいのか！」

「あんた、ホントそればかりね」

「師匠とも離れがたいぞ」

私が言つと、師匠はようやく私に笑顔を向けてくれた。

「まあそこまで言つなら、たまには歌つてあげようかな。失恋ソング以外も」

「なら、ロッカーからギターをひとつひつよつ」

「壊さないでよ」

「安心しろ、師匠と師匠の大切な物は何があつても傷つけない」

私の言葉に、なぜだか師匠は少しきすぐつたそうに笑つた。

## Episode 09 毒舌

常日頃からこの店を取り巻く荒野は暑いが、その暑さがさらに増し始めた頃、師匠の友人という少女が訪ねてきた。少女とは違いこぎれいと言うか見目麗しいタイプの令嬢である。

厨房にいた少女の変わりに応接をしたところ、師匠とはハイスクールという学校でともに勉強をいそしんでいる仲らしい。日頃から常に店にいるので学校に通つていないとばかり思つていたが、どうやら夏休みという休暇中故に一日中店を開けていたようだ。

普段は学校が終わる6時過ぎから夜中の2時までが営業時間らしい。

そこまでの説明を聞いて、また一つ師匠について詳しくなった気でいたとき、師匠がこちらに気づいて厨房から出てきた。

「もしかしてまた例の件できたの？」

師匠の登場に、少女は師匠の方へと駆け寄つた。うむ、走り方も師匠より女性らしく可憐だ。

「おねがいよ。あなたの歌があれば盛り上гарること間違いなしなの」「仕事が忙しいの」

「とにかくもう一回考えて、ね？」

師匠の友人はそう言つと、慌ただしく店を出て行つた。

残されたのは師匠と私の一人のみ。もちろん私は、師匠にこの展開の解説を求めるべく熱い視線を向けたが、師匠は見事なまでに無視を決め込んだ。

だがその夜、いつもはさつさと車に乗つて帰つてしまふ師匠が、どういう訳か深夜の3時までコーヒーを飲んでいた。

「あんたさ……」

「コーヒーを入れて30分もたつたところで、師匠は苦虫をかみつ

ぶしたような顔でようやく口を開く。

「私の先生とか、やってみない？」

「唐突だな。ちなみに、どういう意味だ？」

尋ねると、いつもより霸氣がない声で師匠は続ける。

「昼間来てたあたしの友達いたでしょ？あの子がパーティの企画やつてるんだけど、そのテーマが今年はカントリーでさ」

「カントリーというのは、師匠の歌うあの歌か

「そう。で、そこで歌わないかつて言われたのね」

それはすゞい事だ。

「だがなぜ、私が先生なのだ」

「私つて結構鈍りもキツイし口も悪いでしょ。前に舞台で歌つたとき、トークで大失敗してさ……」

異邦人故あまり気にしなかつたが、確かに師匠の言葉遣いは悪い。そして発音も、どことなく他者と違う気もする。

「魔王のくせにさ、あんたの英語完璧なのよ。だから教えてくれないかなって」

「私自身は英語を喋つているつもりはないのだが」

「一緒にセリフ考えて、普通に読んでくれればいいから」

「それで師匠の役に立つのなら」

でも、と私は師匠に笑いかけた。

「私は師匠のしゃべり方は好きだぞ。鈍りとやらも心地良い。…まあ、たしかに多少毒舌だが私はそれも心地良いと思う」

「…褒めてるの？ それとも、マゾをアピールしてんの？」

「褒めたつもりだが、間違えただろうか」

私が笑うと、師匠はようやくほつとした顔で椅子にもたれる。いつもは豪傑な師匠にも、それなりに悩みはあるようだ。

そしてそれを告白してくれたこと。その相談役に私を選んでくれたことが嬉しくて微笑むと、師匠に頭をこづかれた。でもそれが何故か心地よかつた。どうやら師匠が言つように、私はマゾであるようだ。

師匠に喋り方のレクチャーをした翌日、私は生まれて初めての体験を沢山した。

一つ目は車という鉄のドラゴンに始めて乗った。運転は師匠だ。正直乱暴で気分が悪くなった。

次に、この世界の人間達が暮らす街という所に始めて行った。そこで始めて服というのも買って貰った。

今まで師匠の死んだ父親の服を着ていたのだが、若干丈が合わず不格好だった。それではパーティに連れて行けないと言うことで私のサイズにあつた服を買ってくれたのだ。

そしてそう、何よりも初めてで驚いたのはパーティという宴である。

師匠の高校の体育館で開かれたそれは、若い男女だけでなく街中の男女が詰めかけるとても賑やかな物であつた。

狭い街故、こういう催し物はたくさんの人々が来るのだという。そしてそれに、私が出ることを師匠は許可してくれたのだ。

「でも、絶対私の側を離れないでよ」

「あと、ハンバーガーは絶対食べちゃ駄目。私のより上手いハンバーガーなんてないし、口が腐る。でもまあ、ピザなら許す」

「あとそう、絶対知らない女の子について行っちゃ駄目だからね。ダンスとか絶対駄目」

そういうって、師匠は楽屋として用意されたステージ裏で、私にたくさん約束事を取り付けた。

師匠は怖いので全部メモした。

「私は殆ど舞台の上だから、何かあつたらステイ一軒に聞いて。いつも來てるから」

「了解した。でもその心配はない」

「大丈夫?」

「私はつねに、師匠の側にいる。舞台袖から一步も動かないつもりだ」

「いや、でもさすがにそれはつまらないでしょ」

「今日は、師匠の歌う姿を見に来たのだ。だからずつと見ていく」

私がいつと、師匠は何故だか真っ赤になつて私をじづいた。

最近師匠は私の言葉でよく赤くなる。たぶん、私の言葉のどこかに師匠を赤くなるほど怒らせる言葉があるので。」

気を付けねば

## Another Episode 1 「あんたが言つと[冗談に聞こえない]」（前編）

Episode 10話 別視点です。

## Another Episode 1 「あなたが言つと『冗談に聞こえない』」

パーティに魔王を連れてきたのは間違いかも知れないと、私は思い始めていた。

入り口から楽屋に入る僅かな間だつたが、その間にも多くの女子達が彼をうつとりした顔で見つめていたのだ。

ついつい忘れがちだが、魔王は顔だけは良いのだ。顔だけは。とはいえ、別に嫉妬しているとかそう言うことは断じてない。別に魔王とはなにもない。たまたま家の外にいたから拾つただけの赤の他人だ。

でも一応魔王だし、何か間違いがあるといけない。

だからついつい、彼に色々な約束を取り付けてしまつたのだ。そ

してそれを、魔王は律儀にメモなんか取つている。

ひとつくらい嫌だとか出来ないと言えばいいのに、魔王はいつも私のいうことを全て真に受ける。まるで犬だ。

「私は殆ど舞台の上だから、何かあつたらステイープに聞いて。あいつも來てるから」

「了解した。でもその心配はない」

「大丈夫？」

「私はつねに、師匠の側にいる。舞台袖から一步も動かないつもりだ」

「いや、でもさすがにそれはつまらないでしょ」

「今日は、師匠の歌う姿を見に来たのだ。だからずつと見ている」  
犬。それも忠犬過ぎる魔王は、そんなことをさらりと言つてのける。

犬だからわからないのだ。そんな真面目な顔で、甘い声音で言わ  
れたら世の中の女子がどう思うか。

「そう言つセリフ、あんまり言つちゃ駄目よ」

「セリフ？」

「あんたが言うと冗談に聞こえない」  
私の言葉を、魔王はちつとも理解していない表情で頷く。  
頭の悪さも、犬並みだ。

## Another Episode 「あなたが言つと[冗談に聞け]えない」（後書き）

11／5誤字修正致しました（「報告ありがとう」「やれこます」）

## Episode 11 笑い方

パーティーの翌日は、店にたくさんのお客さんが詰めかけた。昨日の夜の師匠の歌は素晴らしく、一緒に考えたトークも良かつたようだ。

「店の宣伝を入れたのはあたりだつたわね」

厨房で忙しく働くながら、師匠は嬉しそうに笑っていた。だがふと、客入りを見て師匠は僅かに表情を暗くする。

「なんか、女子も多くない?」

そうだろうかとカウンターから顔を出すと、何故だか女子達から歓声が上がった。なんなんだこれは。

「…ステイーブあたりがバラしたな

「何をだ?」

「…あんた、今日厨房

「しかしハンバーガーは

「今いる分は全部焼いてあるから、後はひたすら挟め! とにかくあんたは、そこから出るな!」

そう言つと、師匠は私を置いて厨房から出て行つてしまつた。言われるがまま、ハンバーガーを作りながら師匠の方を伺つと、師匠は先ほどの女子達の所にいた。

心なしか、師匠の笑い方が怖い。今日は言われたとおり、厨房からでない方が良さそうだった。

## Episode 1-2 リラックス

「あなたさ、ずっと店のソファーじゃつらくない？」  
ある晩、店の片づけを終えた師匠がそう言った。

「多少かたいが、睡眠には問題ない」

「でも、ちゃんとしたベッドで寝たいとか思わない？　」  
「ラックスも出来ないでしょ」

「屋根と寝床があるので私は幸せだ」

それは本心だったが、どういつ訳かその日、師匠は私を無理矢理車に乗せた。

何もない荒野を1時間ほど走り、以前服を買った街へ入って更に15分ほど走ると、そこは閑静な住宅街だった。

店の周りとは違ひ緑も多く、師匠が車を止めたのも芝生の敷き詰められた広い庭がある家だった。

「いい家だな」

「私の家よ」

「そうか。一人暮らしなのに広いな」

「昔は両親と暮らしていたから」

「そうか」

会話が途切れた。師匠は真剣な顔で何かを考えている。

そう言つときに声をかけると怒られるので、私は窓の外から景色を眺めてのんびり待つた。

「…誤解はしないでよね」

きつかり5分たつた後、師匠は何故か睨むような表情で私に行つた。

「あなたよく働いてくれてるから、だからこれは『褒美』

「ご褒美？」

「親父の部屋、使わせてあげる」

「それは、同棲という奴か」

「だから誤解しない！」

事実を述べたつもりだったが、何故か師匠に殴られた。

「あんたが何かしたら、すぐに追い出すから」

「大丈夫だ。皿やグラスは割らない」

「いや、そう言う事じゃない」

「食料を勝手に食べたりもしない」

「…犬か、あんたは」

「あと、寝室も綺麗に使う」

私の言葉に、師匠は呆れたように笑い、車のドアを開けた。

「何か馬鹿らしくなつてきたわ」

そして彼女は、私の座る助手席のドアを開けてくれた。

「食べ物も好きに食べて良いし、部屋は好きに使って良い」

「しかし手持ちがない」

「学校が始まつたら掃除とか家事をお願いするから、それでチャラ」

「それだけで良いのか？」

「あんたが言つたとおり、一人じゃこの家広いのよ」

そう言つて差し出された師匠の手を、私は取つた。

## Episode 13 寝たふり

その日は朝から体調があまり良くなかった。

こちらの世界に来てからずっとハンバーガーだけで生活していたが、やはりそれだけでは良くなかったようだ。

だが血を拝借出来るような相手はない。墓場も近くにはない。

「あんた、顔色悪いけどどうしたの？」

そして運が悪いことに師匠に体調不良がばれた。

「きっと食あたりだろう」

だから大丈夫だと笑って店の掃除に戻ろうとしていたとき、唐突に体が傾いだ。気がついたときには頭からテーブルに突っ込んでいた。

その後数時間の記憶が私にはない。ただ気がつけば白い布で囲まれた寝台の上に横になっていた。

「原因がわからないうつてどういう事ですか！」

聞こえてきたのは師匠の怒声だった。

「ですから異常は見あたらないのです。ただ血圧と脈が低下して」

「あんた医者でしょ！いいから、こいつを直してよー」

師匠の声がまるで泣いているように震えていた。だから私は寝たふりをしている事も出来ず、側のカーテンを開けた。

起きあがった私に医者は信じられないという顔をし、師匠は涙で潤んだ目で私を見ていた。

「元気になつた。だから、帰ろう」

本当は元気ではなかつた。でも、ここにいても何も解決しないことは明かで、多分師匠もそれに気付いたのだ。

泣きながら抱きついてきた師匠を抱え、私は医者に礼を言って病

院を出た。

師匠の運転する車が町を出ると、既に日は傾きかけている。

本当は家に帰るはずだったが、夕日に染まる荒野が見たいといつ私の言葉に、師匠が車を走らしてくれたのだ。

「窓を、開けても良いか？」

私が尋ねると、師匠は頷いた。

窓を開け、そこから私は頭と肩を出す。

私はこの、荒野の乾いた風と土の香りが好きだ。

私がもといた世界に比べるとここは縁もなく、生物の影もありませんい過酷な地だ。

だが地平線の向こうから太陽が登る朝や。鮮やかな赤い世界が闇に包まれてゆく黄昏時。そして宝石をちりばめたような荒野の夜空。時間によって移り変わるこの世界の輝きは、私を虜にしてやまない。

「魔王……」

ガラにもなくセンチメンタルとやらに浸っていた所為だろう。師匠が心配そうな顔で私を見つめていた。

「ん？」

「死んだりしないよね」

風にかき消えてしまいそうなほどか細い声で、師匠は言つ。

だから私は笑つた。

「安心しろ。だから窓を開けたのだ」

そういうと、私は病院から拝借してきた物をポケットから取り出す。

直後、師匠が思い切りブレーキを踏んだ。危ないとは思つたが、どうせ口クに車も来ないので問題はないだろ？

「あんた、それ！」

「魔法で盗んだのだ。沢山置いてあつたから」

「だからって、取つて来ちゃ駄目だろー！」

そう言つて師匠が指さすのは、私が持つてゐるパックに入つた血

液だ。

「安心しろ、師匠から頂きたお小遣いを置いてきた」

「いくら」

「10ドル」

師匠が、力無くハンドルに体をもたれた。

「ああそうだ、後ろの窓も開けた方が良いぞ。血のにおいがついてしまう」

「そんなことより、そんな少なくて良いわけ？」

「これでも多すぎる位だ。ワイングラス半分で、十分だからな」

私がいうと、師匠はようやく車を走らせた。

「それだけで良いなら、欲しくなつたら私にいなさいよ

「買つてくれるのか？」

ちがうわよ馬鹿！と私を殴つた後、師匠は苛立ちを抑えた声で続けた。

「私、血の氣が多いからけつこう献血とかするし。別にあんたになら、多少くれてやっても良いかなつて」

「よいのか？」

「し、死んだりはしないわよね！」

「安心しろ、吸血行為で人を殺したことはない」

「あんた、本当に魔王？」

「人が死ぬほどの血液だぞ、こちらの腹がはち切れてしまう」

私がいうと、師匠はおかしそうに笑つた。

## Episode 14 気心の知れた仲

朝起きると、師匠が私にメモを押しつけてきた。

「今日から私学校なの。授業はないからお昼過ぎにはもどつてくるから」

「ということは、店の方は午後からか?」

「うん。学校が始まつたら夕方からになるとおもう」

「なんなら、先に行つて開店の準備をしていようか?」

「でも車運転出来ないでしよう」

「安心しろ。こういう時のために、色々と教わったのだ」

得意げに言うと、私は我が相棒魔剣アンティベラムを呼び出す。

『例の奴ですか』

「たのむ」

私はいつと、我が相棒を床に突き立てた。

その直後、相棒は一台のバイクへと変化する。

「これは・・・」

「運転の仕方はステイーブに教えて貰つた」

「あんた達、いつの間にそんな仲に」

「師匠の寝顔の写真を渡したら、私の事情を全て受け入れてくれたぞ」

なぜか、そこで殴られた。

「変な奴と心を通わせおつて・・・」

「そうなのだ! ステイーブは良い友人なのだ! 私に、これほど良くしてくれる友人は未だかつていなかつたのだ」

私がいうと、何故だか師匠は拗ねたような顔で私を見上げてきた。

「私は、友達じゃないわけ?」

「うむ」

頷くと殴られた。しかし嘘はないのだから仕方ない。

「師匠は友人よりももっと特別だ。どう形容してよいのかはわから

ないが、ステイーブよりももつと気心が知れた間柄だと思っている。私が答えると、やはり師匠は真っ赤になつてそのまま家を出て行った。

『主よ、発言してもよろしいでしょうか?』

「なんだ?』

『私はあなたを少し見直しました。破壊行為以外は何の取り柄もないと思っていましたが、まさか女性の心を掴む才能があつたとは』

『女性の心とは手でつかめるものなのかな?』

『その上天然でいらっしゃる。どうやら跡継ぎの心配はいりませんね』

『そのような者を作るつもりはない』

『ですがせつかく新天地を見付けられたのです。この世界を我が物になさりたいとは思わないのですか?』

『不思議な話だが、こちらに来てからはそのような感情とは縁がない』

『ふむ』

『ただあるのは、ハンバーガーがたまらなく愛しいという感情だ』

『私には理解しがたい』

『お前にもそのうち分かるだ。私とお前は破壊のために作られた物同士、その片割れがハンバーガーをこんなにも愛せるならば、お前にもその素質があるはずだ』

『お言葉ですが、私は物を食せません』

『ならばあの造形を愛でればよい』

『たしかに、あのふくらみは女性の胸のようだ愛らしいとは思います』

『す』

『おまえ、ヒッチだな』

『覚え立ての言葉をすぐ使いたがる所は、直した方がよいかと思います』

魔王の相棒は、そう言つてエンジンを吹かした。



## Episode 15 タイミング

「いい？肉をひっくり返すタイミングは香りと音で計るの」  
鉄板の前でパテをひっくり返しながら、師匠は額の汗を拭う。  
「目で肉の焼き加減を見るのももちろん大事、だけど中までは見えないでしょ」

「师匠の言葉に、私も自分の前のパテをひっくり返す。

「今は、なにを基準にひっくり返した？」

「香りだ。肉の焼ける香りがこちらまで香ってきたので返した。少し早い気もしたが、师匠はいつもはやめだから」

「何でだと想う？」

「焼きすぎるよりは生焼けの方が後で調整がきくかと」  
师匠が笑顔で頷いた。

「私だって毎回完璧じゃない。だから最後まで気を抜かないで、失敗したと思っても慌てないのが大事」

「慌てない事は得意だ。昔から、良い意味でも悪い意味でも動搖しない魔王だと言われてきた。

「でもホント、あんた随分上手くなつた」

「师匠に褒められると、なんだかむず痒いな」

「これは、私もそろそろお役ご免かな」

师匠の言葉に、何故だか突然喉のあたりがくつと詰まった。剣の师匠に免許皆伝を貰つたときは何の感動もなかつたが、ハンバーガーを前にすると私は涙もうくなるらしい。

「ちょっと、早いわよ泣くの！」

「自分でも驚いている。私は涙という物に縁がないと思っていたのだが」

「つていうか、無表情のまま泣くのやめて。なんか怖い」

「一応、多分これは感動の涙だと思つ」

「ならそう言う顔しなさい」

「そう言つ顔とはどういう顔だ」

「そういえば、感動したときの顔つて説明しづらいわね」  
それから彼女は私の顔を見上げて少し考え込む。

「とりあえず笑つておけば?」

言われるがまま笑つた。

「だめだ、泣いたままだと今度は気持ち悪い」

そう言つと師匠は焼いていたパテを持ち上げ、それから置いてあつたバンズにそれを挟んだ。

「とりあえず、これ食べて」

言われるがまま、今度はハンバーガーにかぶりついた。

「うん、あんたはハンバーガー食べてるときが一番いい顔してる」  
師匠はそう言つと、私の涙と口に付いたケチャップをぬぐい取つた。

## Episode 16 プラモデル

師匠の家に住むようになつてから、私は「買い物」という手伝いをするようになった。

家で使う生活用品、食料などをスーパーと呼ばれる道具屋で購入するのだ。

師匠は学業とハンバーガーで忙しい。なので、家のことくらいはこなしたいと考えていた私に、師匠が与えてくれた仕事が「買い物」である。

しかし、これが非常に難しい。

今でこそだいぶ慣れたが、最初は牛乳と洗濯用洗剤をよく間違えた。

そのたびに師匠に怒られた。

でも、似たような容器に入っているのが悪いと思う。

私の国では牛乳と言えば紙の容器か瓶に入っていたのに、この街の牛乳は洗濯用洗剤そっくりの大きなプラスチックボトルに入っているのだ。とても良い迷惑である。

しかし私は魔王と呼ばれた男。どんな強敵を前にしても、降参するわけにはいかない。

毎日師匠に殴られているうちに、私は買い物でも免許皆伝を貰えるようになつた。

牛乳と洗剤はもう間違えない。シリアルと犬の餌を取り違えたりはもうしない。

だが、余裕が出てくると今度は新しい問題が私を悩ませた。

買う物を間違えないことだけに目がいっていた頃は気付かなかつたが、このスーパーという道具屋には面白い物が沢山売っているのだ。

人が10人は入れるテント。

エンジンの着いていないバイク。

妖精が入っているのかと思つほど良く弾むボール。

それらはとても興味深く、そして購入欲を誘うのである。

その中でも、私が一番気になつてるのは掌に載るくらいの車の模型だ。

「プラモ『モデル』と書つらしいそれは、とても細かいパーツを自分で組み立て遊ぶ玩具らしい。非常に興味がある。だが、小さい割にこれはとても根が張るのだ

計算したところ、私のお小遣い半年分である。  
半年。

かつての世界ではあつという間だつたが、この世界に着てからは時間の流れが穏やかなので、短いとはもう思えなかつた。

とはいえ欲しい。あれはどうしても欲しい。

なので、私は自分の部屋に貯金箱という奴を置いた。師匠の部屋に転がつていた子豚さんの貯金箱だ。

「あんた、貯金なんてして何かうつもり？」

ナイフ？銃？と師匠は失礼な事を言つ。魔王だからと言つて、武器マニアというわけではない。それに、銃やナイフであれば我が相棒に頼めば変形してくれる。

「プラモ『モデル』だ」

「そんなの、ガレージに沢山あるわよ」

いきなり、子豚さんがお役ご免になつた。

「親父が好きだつたの。馬鹿みたいに沢山買つて、作り終わるより先に死んじやつた」

だから好きな作りなさいと師匠は笑う。

言われるままガレージに行けば、確かにそこはプラモ『モデル』の山がある。

「師匠」

「あん？」

「あなたの父上は、まさに神だな」

子豚さんの中のお金は、今度師匠が墓参りに行くときの花代にし

よつ。

そう決意し、私はプラモデルの山に飛び込んだ。

## Episode 17 対決

「彼女をかけて、俺と勝負だ！」

かつては勇者と名乗る人間達と戦いを繰り返してきた私だが、この世界で決闘を申し込まれたのはそれがはじめてだった。

そのうえ対決の場所は暗黒の谷にそびえ立つ城でも、魔物の森の奥の神殿でもなく、師匠の家の玄関先である。

「師匠！ 対決を申し込まれたのだが、受けるべきだろうか！」

師匠は部屋の中でエクササイズという奴に興じていたが、私の言葉に面倒くさそうに顔を上げる。

「誰がきたの？」

「君は誰だ？」

「チャーリーだ！」

「チャーリーだそうだ」

「ああ、クラスメイトなの」

「師匠の友人が、それは対決すべきではないな。さあ中に入り給え、『一ヒー』と『一ラ』があるがどちらが良い？」

「……あんた、俺の話を聞いてたか？」

「師匠の友人なのだろう。ああそうだ、昨日私が焼いたクッキーがあるんだ、どうぞ食べていいってくれ」

「いや、だから俺はあんたと勝負を……」

「師匠の友人は私の友人だ！ そうだ、私のプラモodelコレクションを見せよう！ 友達に見せるのが夢だつたんだ！」

「俺を馬鹿にしているのか？」

「馬鹿にされることははあるが、人を馬鹿にしたことはないぞ」

それからもう一度飲み物のオーダーを聞くと、チャーリーという若者は小声で「『一ラ』」と返してくれた。

## Episode 18 バナナ

兼ねてから、私はこの店の飲み物に関しては懸念を抱いてきた。

「コーラ。これはとても薄い。

オレンジジュース。これも薄い。

スプライト。薄い

飲料水。実は水道水。

コーヒー。これはもはやコーヒーの味がしない。

と言った具合に、ハンバーガーがあれほど美味であるのに、飲み物がどれも酷い味なのだ。

どこのハンバーガーダイナーもこういう物だとしつが、私がこつそり書店で読んだ本には飲み物も売りにしている店も多いと書いてあつた。

それを指摘したら師匠は不満そうな顔だが、やはりハンバーガーを引き立てる飲み物も大事だと私は思う。

そこで私は師匠が寝静まつた深夜、こつそり店に通り、店の売りになるドリンクの開発を始めた。

とりあえず先日知り合つたチャーリーという若者とその仲間の話を聞いたところ、スマージーやシェイクと言つた甘い飲み物もあると良いとの話だった。

そこで私は手頃な値段の果実を用いて、シェイクという奴を作つてみた。

アイスと牛乳と果物をミキサーという拷問器具で混ぜればすぐに出来るお手頃商品である。

とはいえる配分は、勘。飲んだことがないのだから仕方がない。

しかしこれが意外と良くてできた。特にバナナを使った物は大変美味であった。

開発から約一週間後、恐る恐る師匠に試飲をお願いしてみた。

「どうだろうか？」

「いくらで売るつもり?」

「25セント?」

「安すぎて元取れない」

そう言つた後、師匠は私の前に3ドルを置いた。

「これくらいでも、私は飲む」

そして私のバナナシェイクは3ドルで売られることになり、店の

人気商品のひとつになった。

## Episode 18 バナナ（後書き）

9/4 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございます）

最近師匠の機嫌が悪い。

毎日私の顔を見ると舌打ちをするのだ。  
正直傷つく、とても傷つく。

今日も朝から3回も舌打ちをされた事に落ち込んでいると、女性客達が慰めの声をくれた。

そう言えば師匠に舌打ちされる一方、店の客には優しくされる事が多くなった。特に女性の客に。

今日も20回ほど週末の予定を聞かれた。

週末は、師匠とビデオを見る予定だと告げると何故だかとても残念がられた。

やはり、休日の夜に恐怖映画を見るなんて、今時の若者は好まないのだろうか……。

最近疲れている師匠を癒やす為に、無い知恵を絞つて企画したイベントなのだが、実は良い迷惑だったのかも知れない。

もしかしたら、舌打ちも原因なのかも知れない。

「師匠、師匠はジョイソンさんはお嫌いか？」

厨房に飛び込むと同時に尋ねれば、またアホなことを言つ出した、と言う顔で師匠が私を見る。

「順序立てて話せ」

言われるがまま、舌打ちで傷ついていた事から厨房へ駆け込むまでの心情を伝えれば、師匠は少しだけぱつが悪そうな顔をする。

「別に、映画は嫌じゃない」

「じゃあ、何が嫌なんだ？」

「……あなたは、本当にそれでいいの？」

何がだと尋ねると、師匠はパテを焼きながらひりひりとこりを伺う。

「今週の日曜日、またうちの高校でパーティがある。店に来てる子

達は、みんなそれに魔王と行きたいのよ

「師匠はまた歌うのか？」

「今回は歌わない」

「なら行かない」

即答すれば師匠は驚いた顔で私を見た。

「日曜日は師匠と映画を見る。そう約束した」

「約束なんて律儀に守らなくて良いよ。もし行きたきや、行けばいい」

「でも、私は師匠との約束は守る」

何故と尋ねられた。

何故と言われても、守りたいから守る以外に理由はない。

それを素直に告げれば、師匠はホッとした顔で私から顔を背けた。

「……舌打ちとかして、『ごめん』

「そうだ、なぜ師匠は舌打ちをしたのだ？ 映画が嫌ではないのだ

るつ？」

「あんたがもう少し不細工ならつて、思つたの」

「なら、その包丁で顔をぐちゃぐちゃにするか？」

「そう言つのは映画の中だけで十分」

それについの街一の美男子の顔をグチャグチャにしたら、街中の女の子達が泣くだろうと、師匠は笑う。

「師匠も泣くのか？」

むしろ清々する。

そう言つ師匠の笑顔は、確かに清々しかった。

## Episode 20 リーダー

私は恐怖映画というのを甘く見ていた。  
すさまじく甘く見ていた。

「次どれにする? 今の奴の続き? それともエルム街の悪夢いつてみる?」

楽しそうにビデオを選ぶ師匠に、私はもはや息も絶え絶えである。「恐怖映画というのは、なんだか、胃と胸に来るのだな……」

「なに、怖いの?」

「ジョイソンさんを甘く見ていた。我が魔剣でも、あのチーンソーに太刀打ちするのは難しいだろ?」

「じゃあ、続編行こうか」

人の話を全く聞いていない。

と言つて聞く気もなかつたのだろ? 尋ねる前から、師匠はジョイソンさんに顔がかかれだビデオを持っていた。

「師匠は恐怖映画が好きなのか?」

「スカッとするじゃない、いけ好かないイケメンやチアリーダーがズタズタにされるのつて」

「ちありーだー?」

「高校で幅をきかせている女の子達よ」

「強いのか?」

「ある意味ね。高校では、胸が大きくて、ポンポン振りながらスポーツ部の連中とエッチしてると最強になれるの」

「それだけでいい顔ができるのか? 高校とは変わっているな」「でも、あんただつて胸が大きくて可愛い子が好きでしょう? とんでもない。」

「そう言つ女子と一緒にいるジョイソンさんに狙われるのだろ? ? 絶対に嫌だ」

私が真面目に力説すれば、師匠は笑いながら私の横に座る。

それから師匠はリモコンとつ遠隔操作装置で恐怖映画をスタートさせる。

恐怖の再来である。

「師匠」

「ん？」

「手、握っても良いか？」

「あんた、本当に魔王なの？」

「魔王だつて、勝てないものはある」

「伝説の勇者とジョイソンさん。

この一人の前では、魔王なんてただのゴミだ。

特にジョイソンさん、彼は本当に怖い。

## Another Episode 2

「今は非常時なのよー・非常時だからさあ」と

Episode 20・5話 別視点です。

気がつけば、手を握られるどころか抱え込まれていた。  
画面の中では殺人鬼と対峙した女子が悲鳴を上げているが、悲鳴  
を上げたいのはこちらである。

ホラー映画が苦手という馬鹿っぽい魔王は、クッショーンの変わり  
に私を抱え、私の肩から皿だけを出して映画を凝視している。  
怖いなら見なればいいのに、やはり興味はあるらしい。  
でもこの体勢は、この体勢は違う意味で心臓に悪い。

「子どもじゃないんだから」

「こうしていいと怖い」

そう言つて、魔王は後ろから私の体をギュッと抱きしめる。  
それどころか、回された手に魔剣なんぞを持つている。  
本当に子どもだ。でも密着している魔王の体は無駄にたくましく、  
嫌でも彼が年上の男であることを感じさせる。  
殴り倒したい。

殴り倒したいが、ほんの少しだけ、ほんの少しだけこのままでも  
良いと思つてしまつたのも事実だ。

「師匠は怖くないのか？」

耳元でささやかれた言葉を甘く感じてしまうのも、きっと部屋を  
暗くして映画なんて物を見ている所為だ。

そして魔王ほどではないが、映画のシーンは殺人鬼の恐怖を、こ  
れでもかと言つほどに演出している。

「そんな訳ないでしょう」

いつもの調子で言つてしまつた直後、画面一杯に殺人鬼の姿が映  
つた。

殺人鬼は怖くない。でも驚かせる演出に私は弱いのだ。  
思わず魔王の腕の中で、彼の胸に縋り付いてしまつた。そんな自  
分の行動に気付いて、私はパニックになる。

今は非常時なのよ！非常時だからきっと何をしても許されるわよー！

例え相手が赤の他人でも、魔王でも、殺人鬼が飛び出してきたら

普通は飛びつくはず。

今更のように自分に言い訳を重ねて、私は魔王の腕をギュッと掴んだ。

『非常時、確かに非常時ですなこれは』

いつの間にか、考えが口に出していたらしい。

側の魔剣がそう言って、にたりと笑つた……気がした。

## Another episode 2

「今は非常時なのよー・非常時だからいつでも

11／5誤字修正致しました（「JR報告ありがとう」「JRやれこねや」）

前々から気になっていたことがひとつある。

それは、店のカウンターの上に飾られた一枚の「写真」という絵画だ。今日もそれをじっと眺めていると、師匠が私の横に並んだ。

「あんた、これよく見てるわよね」

「師匠が、師匠に見えないから不思議なのだ」

写真には大人の男達に囲まれて笑っている師匠が写っている。その笑顔は今よりもずっと明るくて、何故だかそれを見ているとドキドキする。

「これ、父さんが生きてたときに撮った集合写真なの。周りにいるのは、当時の従業員よ」

「前は人が沢山いたのだな」

「まあね」

そう言つ師匠は凄く寂しそうで、それを見て「こりゃうちまで何故だか切なくなってきた。

「父さんが死んでからお姫さんも減っちゃって……だからみんな、やめちゃつたの」

「師匠は、みんなに戻ってきて欲しいのか？」

「寂しいのは確かだけど、みんなの生活を支えるほどの稼ぎはないもの。だから無責任に帰つてきて何て言えない」

写真を見上げる師匠の顔は、写真の中の師匠より辛そうに見えた。師匠は年頃の娘にもかかわらず、责任感が強い。

だからこそこうしてディナーを経営出来ているのだろうけどそれは、何かとても大切な物と引き替えに得た物なのかも知れない。

例えば私が、死と引き替えにここに来たように。

「師匠はもう少し素直になつても良いと思つ」

「何よ突然」

「私は、写真の中の師匠の方が好きだ」

苦労や我慢で笑顔を曇らせるには、師匠はまだ若い。

「だからまた、いつやって笑ってくれ。辛い時や苦しい時は、私が側にいるから」

私の言葉に、師匠は突然手で顔を覆つと、トイレに駆け込んでしまった。

また何か失礼なことを言つたのかと思い、慌てて女子トイレの扉に縋り付けば、師匠がドア越しに五月蠅いと怒鳴る。

「もしかして腹が痛いのか？ 下しているのか？」

尋ねた次の瞬間、内側から思い切り開かれた扉が鼻に激突した。あまりの痛みにしゃがみ込むと、トイレから出てきた師匠に殴られた。3回も。

「もう少しデリカシーを持って！」

「デリバリーが何かよくわからないが、努力する」

鼻を押さえる私の横を、師匠が早足で通り過ぎていく。その日が赤くはれていたので私は慌てて師匠に縋り付いたが、結局その場でもう一度殴られ、それ以上の言葉は重ねられなかつた。

けれどその日から、ほんの少しだけ師匠の笑顔が写真の中の笑顔に近くなつた気がする。

## Episode 22 アイコンタクト

「最近、お前さん達息が合つてきたよな  
ある夜、ダイナーを訪れたステイーブが私を呼び止めそんなことを言った。

「でもまだ、よく怒られる」

それに最近、仕事中はあまり言葉を交わさなくなつた。  
「それはな、言葉が無くともお互いが繋がつてるからだ」

「どういう意味だ?」

「言葉だけじゃなく、人間つてのは目線でも会話が出来るんだぜ」「  
言われてみれば、言葉数は少なくとも師匠と目が合つ事が多い気がする。」

確かに、目が合つことで師匠の考えが読めることも沢山あつた。  
皿を片づける、水を運べ、床にモップをかける、トイレ掃除に行つてこい等々、師匠の言いたいことは確かに目を見ればわかる。  
そして師匠も、助けを求める視線を送ればすぐに飛んできてくれる。

私にとつて、人と目を合わせることは人を殺す事と同意義だった  
が、こちらの世界ではそうとも限らないらしい。

「目で会話をするのか、人間は本当に器用だな」

「安心しな、お前さんもちゃんと出来ている」

特に師匠との間ではそれが出来ているらしい。

それが嬉しくて、私はカウンターの向こうの師匠に目を向けた。  
すると師匠も、こちらに気付いて顔を上げた。  
たしかに、目が合つとともに幸せだ。

幸せすぎてちょっと感動していると、ついつっこミッターが外れてしまつた。

物凄い爆音がして、師匠の前のカウンターから突然火の手が上がつた。

「すまない、久しぶりに目に力を入れたら邪眼ビームが出てしまった」

それから1週間ほど、師匠は私と田を合わせてくれなくなつた。

## Episode 23 お祝い

夏が終わりにさしかかり、ほんの少しだけ気温が下がった秋の初めのある日、店にはたくさんの客が押し寄せていた。

突然の大混雑に私が慌てている横で、師匠は少しだけ機嫌が良かつた。

見れば、客達は皆師匠に綺麗な包装紙で包まれた箱を渡している。箱の大きさは様々だが、それを貰つた師匠はとても嬉しそうだった。

そして皆いついつつのだ、「はっぴばすでー」と。

客が帰り、師匠と共に箱を車に積みながら、私は「はっぴばすでー」について尋ねてみた。

「誕生日なの、今日」

「誕生、と言つことは師匠が生まれた日か?」

本当に無知なのねと笑つ師匠に、私はようやく事の重大さに気付いた。

今日は師匠が生まれた日なのだ。確かにそれはめでたい。祝うほどめでたい。

「そうか、これは師匠が生まれたことに感謝する人々からの贈り物か」

「誕生日にはプレゼントを贈つたり、ケーキを食べたりして祝うのよ。パーティとかを開いて盛大に祝う人もいるわね」

だと言うのに、私は今日配膳しかしていない。贈り物もない。

「そんな、この世の終わりみたいな顔しないでよ。教えてなかつたし、期待もしてなかつたから」

「師匠には世話になつていいのに、本当に申し訳ない」

そう思つてポケット漁るが、勿論何もない。

家に帰つたところで、プラモデル以外に私の私物はないし、そもそもあれは師匠の父親の物だ。

「心臓とか眼球なら取り出せるが、年頃の女性はそういう物を貰つて嬉しいか？」

「いや、激しくいらない」

「食べたら不老不死だと言われてこゐるが」

「いや、激しくいらない」

困つた。完全に手詰まりである。

そのとき、贈り物に撒かれたりボンに目が行つた。やはり「うつこう物を私も上げたい。

師匠の生まれた日を、私はどうしてもお祝いしたい。

「やはり、これしかあるまい」

私はリボンを抜き取ると、それを自分の頭に結んで師匠の手を取る。

「…もしかして、プレゼントは自分とかアホな」と言おうとしてない？」

「師匠はエスパーか」

「いらない」

「眼球も臓物も脳みそも好きにして良いのだが」

かつて多くの勇者が奪おうとした魔力の結晶詰め合わせである。

大盤振る舞いである。

「我が相棒を貸す。だから好きなところを持つて行つてくれ」

「だから、激しくいらない」

「背骨なんてどうだらう。お肌にも良いぞ、きっと」

「……もういい。想像してた展開とも違いますから」

「想像？」

尋ねると、師匠は何故か少し赤くなつて私を殴り飛ばす。

「好きにして良いって、内臓取り出して良いとかそう言つ事じやないでしよう普通！」

「じゃあどうすればいい？ 師匠のためだつたら何だつて差し出すぞ」

私が引き下がる気配を見せないと、師匠は私の頭からリボ

ンを外した。

「好きにして良いって言ひなら、五体満足で私の側にいなさい」

「それで良いのか?」

「あとそうね、家に帰つたら私のためにバナナシェイク作つてよ

「何杯でも作る! 100杯でも1000杯でも」

「そんないらない

即答だつた。

けれど否定しながらも、バナナシェイクは楽しみにしていゆと言  
われた。

「師匠、はっぴばすでー」

それを言つなら、ハッピーバースディ。そう告げた師匠に、私は  
ハッピーバースディと繰り返した。

## Episode 24 癒し系

「お前みたいな癒し系の方が、あの子は好きなのかな」「ある日、店に来たチャーリーがそんなことを私に言った。「いやしけい?どちらかと言えば私は破壊系だと思つが?」意味がわからないと一蹴された。

「なあ、彼氏じゃないならあの子の好み聞いてきてよ」「別に構わないぞ」

頷くと、チャーリーはペーパーナフキンに師匠に聞く質問事項を書いた。

早速客が少ない時間に、私は師匠の所へと赴いた。「師匠、いくつか質問がある」「なに?」

「好きな男のタイプは」「魔王以外」「好みの顔は」「魔王以外」「行きたいデートスポットは?」「デートとか興味ない」「アメフトとバスケはどうちが好き?」「私野球ファン」「欲しい贈り物は?」「頭にリボンを巻いた魔王だけはゼッタイに嫌」「以上だ」「参考になつた?」「なつたんじゃない?」

翌日、質問の答えを書いたナップキンをチャーリーに渡すと、彼はそれを読み、無言のまま「ミニ箱に捨てた。

## Episode 25 メンバー

いつかはこんな日が来る気がしていた。

「おい、お前！ お前本当は人間じゃないだろ？！」

私の正体が、ばれたのである。

それも私の正体を見破った相手は、正義の心を持つ勇者だった。  
「白状しろ！ さもないと、お前の正体をボクのママにバラしちゃうからな！」

ただ、勇者としては少し幼い。見たところ、10歳に届くか届かないかくらいの少年だ。

「何故私が人でないと気付いた？」

「お前、変な剣にしゃべりかけてるだろ？！ あと手も使わずに掃除機とかモップを動かしているのを見た！」

たしかに、私には手をふれずに物を動かす力がある。

かつては、跳んできた矢や弾丸を止めるとか、無数の剣を操り勇者達を細切れにするために使用していた力だが、最近では広い家を効率的に掃除するために使用している。

ちなみに、手を使わるのは急け心があるからではない。全ては、手を動かすよりも効率的で早いからである。大事なことだからもう一度繰り返すが、急け心から力を乱用しているわけではない。

だがまさか、それを見られていたとは思わなかつた。これからは、掃除の前にはカーテンを閉めねばなるまい。

「わかつた認めよう。君のママとやらがどれほどの猛者かはわからぬが、師匠に迷惑をかけるわけにはいかないからな」

「じゃあやつぱり人間じやないのか」

「さよう、私は魔王だ」

別の世界から來たと告げると、小さな勇者は恐れるどころか感動の眼差しを私へと向ける。

「すげえ、ゲームの登場人物みたいだ」

「gee~む？」

「魔王なのにゲームもしたことないのかよ」

ないとこたえると、小さな勇者は私の姿をまじまじと見る。

「今日は暇なんだ、何だつたらお前俺の家に来るか？」

一瞬黙かとも思ったが、ゲームとやらには非常に心引かれる物がある。

それにもしかしたら、私がこの世界に来た理由がわかるかも知れない。

運良く今日はダイナーも休み。私は師匠に置き手紙を残すと、小さな勇者の家にむかうこととした。

小さな勇者の家は、師匠の家の正面だった。

なるほど、たしかにここからなら、師匠の家のリビングが丸見えである。

だが小さな勇者の親は仕事で帰りが毎晩遅いらしく、私の正体を知っているのは彼だけのようだ。

それに胸をホツとなで下ろしていると、小さな勇者がゲームとやらをテレビに繋いだ。

映画に似ているが、ゲームとやらを使うとテレビの中の人を自在に操作ができるらしい。

なるほど、確かに画面の中に広がる世界は私の世界に近いようだ。だが残念ながら似ているだけで同じではない。どうやら私の求める情報は得られそうもなかった。

「このゲーム、自分で好きなように勇者が作れるんだぜ」

とはいえた小さな勇者が見せてくれたゲームとやらは非常に興味深い。

それに感動していると小さな勇者は私に似た勇者を作ってくれた。

「私は魔王だが、勇者になれるのか？」

「闇の魔法使いだったけど、改心して勇者の仲間になつたことにするよ」

外見まで私に似せて作られた闇の魔法使いは、小さな勇者の手に

よつて正義の心を植え付けられていく。

「なかなか格好良くできたな。俺のパーティメンバーにいれよう」

「勇者の仲間になる日がこようとはな」

「さあ、こりからは魔王が自分で操作するんだぞ。アクションRPGだからな！」

アクションRPGについて理解出来ないうちに、私の分身は小さな魔物にタコ殴りにされていた。

「…強そうなのは見た目だけだな」

まあレベルが低いから仕方がないかと小さな勇者に言われ、私はちょっと悔しかった。

悔しさのあまり適当にボタンを押していたら、物凄く強い魔法が出てた。

「やれば出来るじやん」

「一応魔王だからな」

でもその後、私の分身は魔物に倒され、最後は小さな勇者に足を引っ張るなど怒られた。

現実の世界と同じく、テレビの中の世界でも修行は必要なようだ。

## Episode 26 ツボ

「いらっしゃりなつて言つてるでしょ、うー！」

師匠の怒鳴り声で目が覚めたのは、とある休日の朝だつた。

驚いて玄関に向かえば、見ず知らずの男が玄関先でツボを片手に師匠と口論をしている。

「いまならたつた100ドルですよ！　100ドルであなたの家に幸運が舞い込むんですよ！」

「訪問販売お断りつてステッカー見えなかつたわけ！」

「お願いです、一個でも売らないとクビになつてしまふんです！」

ツボの男が師匠に抱きつきなにやら懇願している。危険な男には見えなかつたが、執拗に師匠にふれる男になにやら不快感を覚え、気がつけば、私は師匠と男の間に割つていた。

「師匠はいらないと言つてゐる。男なら、こゝは引き下がるべきだ」「しかし！」

往生際の悪いツボの男、仕方なく私は男からツボを奪つ。

見れば、確かにそのツボは男が言つように幸運を呼び寄せる力があるようだ。

「金が必要なら、こゝのツボを持つてメインストリートで大道芸でもしろ！」

幸運を引き寄せる効果をほんの少し大きくし、ツボを突き返せば男は渋々家を出て行く。

「あんた、意外とキツイのね」

でも助かつたわと師匠は私に礼を言つ。

「アレがあの男のためだ。あんな高価な物を100ドルで手放すなんて、大金をじぶん捨てるようなものだからな」

「どういう意味…」

「あのツボはどうやら私同様異世界から來た代物のようだつた。幸運を呼ぶといつのはあながち間違つていないのだ」

「…ちなみに、どれくらいの幸運?」

「億万長者くらいにはなれるんじゃないかな?」

そんなまさかと笑う師匠。

だがそれから一週間後、ツボ男と意外な所で再会することになつた。

『この方が、宝くじで2億3千ドルを引き当たったマイクさんです。ツボ男がいたのはTVの中。

『なんと、マイクさんはこれを買ったのではなく貰ったとのことです!』

そのときの話を伺いましたとTVの中のリポーターに向けると、ツボ男は笑顔を向ける。

『僕は壺を売る訪問販売の営業だつたんですけど、その日は一個も売れなかつたんです。人目につく大通りで大道芸でもやれば客が来るかなつて思つて……、それでやけっぱちでジャグリングをしてたら25セントと一緒にこの宝くじを誰かがツボの中に入れてくれたんですよ!』

結局壺は売れなかつたんですけど、まさかこんな幸運に巡り会えるなんて。

そう言つてTVでピースをするツボ男。

『この人、あのときの…』

横で一緒にTVを見ていた師匠の言葉に私は頷いた。

『だから言つただろう。幸運を呼ぶツボだと』

私が得意げに言つた直後、師匠は何故だか私を殴り飛ばした。

その上、私が億万長者になれるところだつたこと悔しがつている。

『だつて師匠がいらないって……』

『どう考へても普通は偽物でしょう。』

『ここまで馬鹿なんだと怒鳴られた。』

訪問販売には注意すること。

私はまたひとつ、こちらの世界での教訓を得た。

## Episode 27 ひひっギヤング

「師匠見てくれ！」

そう言つて私が胸のバッジを誇らしげに指さしたところに、師匠はちらりと目を向けただけだった。

「なんで瓶の蓋なんて胸につけてんの」

「違う、これはギャング団の証だ！」

私が言えば、師匠は虚空を見つめ、やる気のない声で「ああ」と答える。

「そう言えば近所の悪ガキ達が付けてるわね」

そう言つて師匠がバッジを指で弾くと、バッジは小気味いい音を立てて床へと落ちる。

凄く格好いいのだが、蓋の裏にセロテープで安全ピンを貼り付けているため落ちやすいのが難点だ。

「ってかあんた、いつの間にガキンチョ達と仲良くなったの？」

「仲が良いとのとはちょっと違うな。私はリーダーのアルファに脅迫されているのだ」

「脅迫って、あの子10歳くらいでしょう」

「魔王であることが先日ばれてしまつてな。それをアルファのママに黙つていて貰う変わりに、彼らの仕事に付き合つてているのだ」

「情けない……ってか仕事つて？」

「近所の犬の首輪を外したり、意地悪おじさんの家の玄関マットを隠したり、みんなでお菓子を食べたり、ゲームをしたりすることだ」「それ、仕事じゃなくて遊びつていわない？」

「でもみんな真剣だぞ」

もちろん私もだと告げると、師匠は床に落ちたバッジを拾い上げる。

「あなたは良いわね、楽しそうで」

「私も、脅迫される事がこんなに楽しいとは思わなかつた」

私が笑顔を向けると、師匠は壊れたバッジからセロテープをはが

し、粘着力の強いテープで貼り直してくれた。

あまりに手際が良いので驚いていると、師匠は私に苦笑をむけた。

「私も昔は、ギャング団の一員だったの」

その後師匠は、ガレージの奥から大量のバッジを持つてくれた。古いが格好いいデザインのバッジに私が感動していると、師匠はその中から私好みのバッジを取り上げ、胸に付けてくれた。

これを見せたら、人気者になれるわよ。

師匠に言われるがまま、翌日アルファにバッジを見せると彼は大層感動していた。

「これどうしたんだ！」

「うちの師匠に貰つたんだ」

「そうか、どこかで見覚えがあると思ったらあの姉ちゃん伝説のボスだ！」

「ぼす？」

「俺達がやつてるイタズラの殆どは、ボスが考えた物なんだぜ」

前々から大物だとは思っていたが、やはり師匠はただ者ではないようだ。

「ボスの彼氏なら、これからは脅迫なんて出来ないな」

「彼氏ではないぞ」

「とか言つていいつもくつついてるじゃん」

確かにホラー映画を見るときはくつついている。

あと見た後は一人では眠れないので師匠と一緒に寝ている。

「くつづくのが彼氏なら、確かに彼氏なのかも知れない」

「じゃあ今日からは対等の仲間だ」

差し出された手を握り、私は思わず笑みをこぼした。

脅迫されるのも悪くないが、対等になるのはもっと悪くないと思つた。

## Episode 28 得意料理

今日もハンバーガーを食べていると、師匠が哀れむような目を私に向けた。

「あんたさ、毎日毎日ハンバーガーばかり食べててあきない?」「ポテトも食べているぞ」

それに師匠から貰った血も飲んでいると答えれば、師匠は呆れた顔をする。

「売れ残ったハンバーガー食べてくれるのは嬉しいけど、やっぱり体に良くないわよ。肥満になるし」

「ひまん?」

「太るって事?」

「大丈夫だ、最近は家から店まで走っているしな」

「何キロあると思つてんのよ…」

「魔王の脚力にかかれば、あつという間だ」

だから肥満も問題ないと言つたが、やはり師匠は不満そうだった。「あんたがもし、他のものも食べたいって言つなら作つてあげてもいいのよ。一応ハンバーガー以外にも、得意料理あるし」

「ポテト?」

「ジャンクフード以外も作れるわよ!」

叩かれた頭をさすりながら、私はハンバーガー以外の料理について考える。

「ピザとホットドッグもジャンクフードか?」

「そうよ」

「ポテトチップは?」

「アレはお菓子」

即答され、私は困ってしまった。

実を言つと、私はあまり料理を名を知らない。

この世界に来る前は食事を取る習慣がなかった上に、こちらに来

てからはハンバーガーに夢中になりすぎて、他の物に興味がわかつたのだ。

それを素直に告げると、先ほどは叩いた頭を、師匠が優しく撫でてくれる。

「じゃあこれから見付けていきましょう」

得意料理は多いのよと微笑まれると、何故だか胸の奥がツンと痛くなる。

「師匠は優しいな」

「料理するのが好きだけよ」

「たしかに、師匠は厨房に立っていると幸せそうだ」  
私が微笑むと、何故だか師匠は私から顔をそらす。

「最近は、他にも楽しいことがあるし……」

「歌っているときか?」

「餌付けしている時よ」

家畜でも飼っているのかと聞いたら、大きな犬がいるという。  
魔王の田にも映らない犬とは、魔獸かなにかだろつか?

## Episode28 得意料理（後書き）

お題の提供は『6倍数の御題様』  
<http://www3.t0/6title>

## Episode 29 打ち合わせ

「明日、一人で留守番しててくれる?」「構わないが、どこかに行くのか?」

「来週また高校でパーティがあつて、そこで歌うことになったの」「だから明日は打ち合わせだという師匠はとても嬉しそうで、私はすぐに頷いた。

翌日は店の休業日だったので、師匠が出かけた後、私は師匠が作ってくれたハンバーガーを食べながら夜を過ごしていた。前に師匠はこの家のことを無駄に広いと言つていたが、確かに夜一人でいるとその言葉の意味がわかる。

家中は酷く暗く、そして静かだった。

もちろん私が住んでいた城の方が更に闇が深く、無音になるときも多かつたが、あのころはそれを気にしたことはなかつた。

なのに今、一人であることが何故だか落ち着かない。

ホラー映画を見たわけでもないのに、沈黙と闇が恐ろしいとまで思つてしまふ。

ジェイソンさんがでてくるならまだいい。

だがこの闇が私の世界の闇と繋がり、来たときのように突然元の世界に戻されたらと思うと、たまらなく恐ろしくなつたのだ。人々に闇と恐怖を植え付ける為生み出された私が、逆に闇を恐れるなどかつては考えられなかつた。

けれどハンバーガーも師匠もない生活に、今の私はきっと耐えられない。

そう思つうちに恐怖は広がり続けたが、もちろん回避の仕方など知るよしもなかつた。

そんな時、私の脳裏によぎつたのは師匠の言葉だった。  
『子どもの頃、暗闇が怖くなる度クローゼットに隠れてたの。毛布と懐中電灯を持って』

残念ながら懐中電灯は見あたらなかつたので、私はハンバーガーを片手に階段下にあるクローゼットの中に転がり込んだ。だがしかし、クローゼットは想像以上に狭かつた。そしてやつぱり暗い。

逃げ込んだはずが逆に追いつめられたような錯覚に陥り、それがホラー映画を連想させ、むしろ非常に恐怖感を煽られる。

出よう。

すぐに出よう。

そう思つて扉に手をかけると、何故だかノブが回らなかつた。どうやら慌てて駆け込んだ拍子に扉が壊れてしまつたらしい。

叩いても蹴つてもドアはびくともしなかつた。

仕方なく我が魔剣で叩ききらうかと思つたが、狭いクローゼットの中では上手く身動きが取れない。これは確實に扉以外の物を破壊してしまう氣がする。

そうしたら師匠は絶対に怒る。そして暗闇と師匠の怒りを比べた場合、後者の方が正直恐ろしい。

仕方なく、私は師匠が帰つてくるまでクローゼットの中で膝を抱えることになつた。

「……あんた、何でそんなに馬鹿なの？」

帰宅した師匠が放つた問いには、答えられなかつた。

## Episode29 打ち合わせ（後書き）

お題の提供は『6倍数の御題様』  
<http://www3.t0/6title>

## Episode 30 バランス

田の前に出された本日の夕食を、私は直視出来なかつた。

「師匠…」

「なに?」

「今日も、サラダなのか」

「そうよ」

「……師匠を怒らせるような事を何かしただろつか?」

「……3日ほど、私は師匠からハンバーガー禁止令を言い渡されて  
いる。

「やっぱり、栄養のバランスが偏るのは良くないと思つて」

「サラダばかりでも偏るのでは?」

「でもあんた、長い間ハンバーガー漬けだつたでしょ? だから

バランス取ろうと思つて」

「健康に異常はない」

「私はあんたのこと心配してるのよ。もし何かあつたら、嫌だし…」

…

背けられた顔に、私は慌ててサラダを引き寄せた。

ハンバーガーは食べたい。食べたいが、師匠が私の身を気遣つてくれているのに、我が儘を言えるはずがない。

「確かに師匠の言つとおりだ。もう少し、我慢する」

レタスが山盛りのボールにフォークを突き立てて、私はそれを食していく。

「おかわりも、あるわよ」

いつの間にか、私の前に置かれたサラダが5つに増えていた。

「これも体のためだ、貰おう」

「うん、どんどん食べてね」

「でもさすがに同じ味だと飽きてくるな」

「塩かければいいじゃない、塩」

そう言つて師匠は、サラダに大量の塩をふりかける。

「師匠、塩分の取り過ぎも体に悪いのではないか？」

「その分葉っぱ食べればチャラよ」

「そう言つ物か」

「そう言つ物よ。だからもつと食べて」

気がつけば、サラダが5つから9つに増えていた。

「しかし師匠、こんなにレタスを消費してしまったら、店に出す分が無くなってしまわないか？」

「そこは気にしないで」

そう言えば、冷蔵庫の中のレタスの量がいつもより多かつた気がする。

いつもの倍かそれ以上の量に発注ミスかと思ったが、どうやら師匠は私のためを思つて、いつもより多く頼んでくれていたらしい。

「師匠は、本当に優しいな」

「良いから黙つて食べて、何か胸が痛い」

「私も感動で胸が痛い」

「黙つて」

「うむ」

この日だけで、私は一生分のサラダを食べた気がする。

## Episode30 バランス（後書き）

お題の提供は『6倍数の御題様』  
<http://www3.t0/6title>

Another Episodes

「可哀想な子、みたいな目で見られるか？」

Episode 30・5話 別視点です。

「今日、ため息多いよね」

そう指摘されたのは、化学の時間のことだった。

指摘してきたのは、実験のパートナーになっている友人のチャーリーだ。

「何でもない」

「今日だけで38回だよ」

「何で分かるのよ。っていうか、いつから見てたわけ？」

「……可哀想な子、みたいな目で見られるから話したくない」

既に私の中での彼は魔王と同じ可哀想で頭の弱い子ポジションだが、それを言うと更に可哀想な顔をするので私は黙っていた。

「それで、どうしたの？」

「魔王のことだね」

「喧嘩もした？」

「……あいつに、ひどい事してるの」

「俺だつたら話、聞くけど」

思わず告白すると、実験もそっちのけで彼は私に顔を向けた。

「実はあいつに、ここ5日間レタスしか食べさせてないの」

「……予想外な上に予想以上に酷いな」

「私、先週発注ミスしちゃって……。いつもの3倍の量のレタスが届いたやつで……」

「……」

「処理しきれなくて、体のためとか言って、魔王を毎日レタス漬けにしちゃったの」

今朝もパンにレタスだけ挟んだサンドイッチ置いて来たと告白すれば、チャーリーはさすがに苦笑いである。

「私、凄く酷い事してるわよね」

「俺だつたら発狂してるかな……」

「普通そうよね。つてこうか気付くわよね！　大量のレタスを實際見ているわけだし」

「…あり得ないけど、あいつ抜けてるからなあ」

「それどこのか、自分の体の心配してくれてるなんて！　とか感動までしてゐる」

「むしろこっちの心臓が痛いなそれは」

「やつぱり打ち明けるべきかな。けじさすがに今回は怒ると想つたのよ、怒つて見放されると想うのよ」

思わずじぼせば、チャーリーは唸る。

「言つべきだと想つよ。もし見放されても、君には俺が……」

チャーリーの言葉の途中だつたが、先生がこれ見よがしな咳をしたので話を中断させることにした。

「ごめん、こんな話して」

私の言葉に、やつぱりチャーリーは可哀想な顔をした。

その日の店が終わったあと、私は6日ぶりに魔王にハンバーガーを作つてあげた。

ポテトも付けてあげたら、泣かれた。

「やつぱり、サラダだけつてのもね…」

最初はそう言つて誤魔化したが、心の底から美味そうにハンバーガーを食べる魔王を見ていると、たゞがに罪悪感がわいてくる。「魔王、あのね…」

意を決して告白しようとしたとき、魔王がはつと顔を上げた。

思わず身構えた私とは対照的に、彼はいつも調子である。

「そういうえば、さつき業者から電話があつた事を伝え忘れていた。先週、レタスを多く納品してしまつたらしい」

「私のミスじゃなかつたのか、よかつた…」

「え？」

「いや、何でもない」

ミスは私の所為でなくとも、魔王をレタス漬けにした事実は変わらないので、手放しでは喜べない。

「余つてはいるなら回収すると言われたが、断つてしまつたのだ。殆ど残つていなかつたから

「うつ」

「も、もしかして回収するべきだつたか？　すまない、もつと早く確認すべきだつた……」

そう言つて惱む魔王に、もう一度私は覚悟を決める。  
だがとことん間が悪い魔王は、またしてもハツと顔を上げた。  
なぜか、その顔は先ほどよりも輝いてゐる。

「そうだ！　もし残つてはいるなら私が食すぞ、余らせては勿体ないし」

もう、限界だつた。

「ごめん！」

ついに、私は洗いざらい打ち明けた。

今度こそさすがの魔王も激怒するだらうが、あまりに純粋な彼に、  
これ以上嘘は付けなかつた。

「……本当にごめん、あなたの発注ミスには文句言つてたクセに、  
自分の時は隠すなんて最低だよね」

その上レタスの処理は、全て彼にさせていたのである。

「……ごめん」

私も、今回ばかりは深く頭を下げる。

だがそんな私の頬に、突然魔王の手が伸びた。

「師匠の役に立てたなら、むしろ私は嬉しいぞ」  
顎にふれた魔王の指が、私の顔を上へと持ち上げる。

「だから謝らないでくれ。今の私は師匠の物だ、師匠の好きなよう  
に使えばいい」

「あ、あんたは物じやないよ」

私が言つと、魔王は不思議な物を見るような顔で、小首をかしげ  
ている。

「本当に物扱いしてたら、問答無用でレタスかじらせてたって言うか…。嘘ついたのは、後ろめたかったのもあるけど、あんたに嫌われたら嫌だつてのもあって…」

師匠は凄い凄いと言われるのが嬉しくて、だから下手な部分を見せたくなかつた。

そうこぼせば、魔王はまるで子どもをあやすように私の頭を軽く撫でた。

「師匠にも、可愛い所があるのだな」

思わず絶句するが、魔王は笑うばかりだ。

きっと他意はない。他意はないが、そんな優しげな声と笑みで言われると、嫌でも顔が火照る。

「無理矢理、褒めなくともいいわよ」

「本音だぞ」

多分その通りなのだろう。私とは違い、彼は嘘をつかない。

「……ごめんね」

「もう良い」と言つてゐる。それに、謝罪よりも欲しい物があるんだが

そう言つて僅かに近づいた顔に胸が跳ね上がる。  
まさかそんなと体を硬くして、私は深く深く、後悔することになる。

「ハンバーガーがもう一個食べたい」

「……ですよね」

「やっぱりだめか？ もう一個は欲張りすぎか？」  
私の落胆に、魔王は何を勘違いしたか慌て出す。  
「欲しいなら2個でも3個でも焼いてあげるわよ  
「し、師匠が優しい」

「今のがだりの後で、良くそんなこと言えるわね

「だつて3個だぞ」

その言葉と魔王の真顔を見ていると、3個どころか5個くらい作つてあげたくなる。

「すぐ作るから待つて」「ならサラダを食べながら待っている。レタスがまだ残っていたし」嫌味でも皮肉でもなく、そう言える魔王がほんの少しだけ羨ましかった。

## Episode 31 変身

朝日が覚めると、師匠が猫に変身していた。

「そんなに凝視されると、恥ずかしいんですけど」「正確には変身しかけていた、と言つべきだろ。」

顔や体はいつもの師匠だが、ネコの耳と尻尾が生えていたのである。

「知らず知らずのうちに、獣化の魔法を使つてしまつたのかと考えていたのだ」

「そんな便利な魔法があるなら言ひなさこよ。わざわざ買わなくて良かつたじやない」

そう言つて師匠がネコの耳に手をかけると、それは一とも簡単に取れてしまう。

啞然とする私の前で、師匠は楽しそうに笑っていた。

「これ、ハロウイン用の仮装衣装なの」

「はるういん?」

「一年に一度、死者が家を訪ねる日をそう呼ぶの。そして尋ねてくる死者から身を守るために、自分たちもお化けとか怪物とか、怖い仮装をするの」

「死者と書つことは、ジョンソンさんも来るのだろうか」

「そうね、今日は街にたくさんいるんじゃないから」

意地悪く笑う師匠に、今日は一日家にこようと決意する。

だがそんな私の決意は、師匠の一言の前に崩壊した。

「ちなみに、今夜は高校のパーティで歌うの。だから、家いるなら留守番ね、一人で」

「じえ、ジョンソンさんが尋ねてきたら困る…」

思わず縋り付いた私に、師匠は安心しなさいと笑つた。

「由来は怖いけど、ハロウインって楽しい物よ。みんなで仮装して騒いだり、子どもは菓子をもらったり家々を練り歩くの」

「お菓子が貰えるのか」

「あなたはそつちに反応するかと師匠に呆れられたが、何だかんだ言いながら、師匠はお菓子を貰うための呪文を教えてくれた。

「あんた顔が良いから、それ言えば絶対みんなくれるわよ」「でも仮装していいない」

「今からでも買いに行く?」

せつかくだと財布を持ち出した師匠に、私は妙案を思いつく。「師匠にこれ以上の借りは作れない。それに、恐ろしい格好ならばあてがある」

師匠の財布を棚に戻しながら、私は久しぶりに、封じていた魔力を解放する。

「本当はあまり見せたくないが、お菓子のためなら仕方がない」

魔力を使い、私は人の姿を取り払う。

赤き眼は血の如く、鋭い牙は獸の如く、長き尾は蛇の如く、黒き翼は竜の如く。

吟遊詩人達がそう称した私のもう一つの姿、それを私はこの世界で始めて解放した。

この姿を見た者は例外なく、恐怖におののき私を嫌悪した。

だから師匠にも本当は見せたくないが、お菓子のためなので仕方がない。

「これで、いいだろうか」

恐る恐る師匠を伺うと、彼女は言葉を失った顔で私を見上げ、そして……。

「……悪くないけど、洋服はどのようにかしないと駄目ね」

そう言つて、私の着ていたパジャマを引っ張つた。

「しまつた……、翼と尻尾の所為で穴が空いてしまつた」

「やっぱり貫通するんだ……。格好いいけど、不便ねコレ」

「かつこいい、か?」

「うん。パジャママじやなきや」

「怖くはないのか？」

「パジャマだし」

「でも、パジャマを脱いだから怖いだろ！」

「初登場でパジャマだから、脱いだどころで笑っちゃうと思つわ」

その言葉に、私は安心した。

「でもそうね、これだけ派手だと普通の服じゃあわないわよね」

そう言つて、師匠は倉庫から亡き父上の仮装衣装を色々と引っ張り出してくれた。

「これだつたら荣えるかも。角とか翼とかある意味宇宙人っぽいし」  
そう言つて師匠が着せてくれたのは、先日見た宇宙活劇映画に出てきた騎士が纏う衣装である。

「ジェダイつて言つより、シスっぽいけどまあいいか」

翼用に穴を開けるときは渋つていたが、衣装を纏つた私の格好に師匠はご満悦だった。

その時点すでに驚いたが、もつと驚いたのは街に出てからだ。  
師匠だけでなく、アルファやチャーリーなどの友人達。そして街を行く人々までもが、私の姿を恐れるどころか喜んでくれたのだ。  
写真をせがまれたり、お菓子の呪文を言つただけなのにキスまでされた。主に年配のご婦人達からだが。

向けられた笑顔と腕いっぱいのお菓子は夢のようで、私は生まれて初めて、この姿を持つことに喜びを感じた。

こんな素敵な気分になれるならハロウインも悪くない。

「あ、魔王見て！ ジエイソンに仮装した子どもが5人もいる！」  
前言撤回だ。やっぱりハロウインは恐ろしい。

## Episode 32 ワイングラス

「そう言えば、あんたってお酒飲めるの？」

ハロウインの翌日、師匠がそう言いだしたのには訳がある。

昨日お菓子の呪文を使った際、お菓子の変わりにお酒や食べ物を持つててくれた人がいたのである。

隣に住む、美しき老婦人ミシユルさんである。

「これ、高いのよーでもいつも庭のお手入れをしてくれるお礼に、今日は奮発しちゃう」

と私にくれた古いワイン。それを師匠は昨日からやけに気にしていた。

「酒をたしなんだことはないな」

「でもあんた、最初にワイン注文してたじゃない」

「我が城にあつたワインは酒ではないのだ。赤い色は同じだが、中身は別物だ」

「もしかしてそのワイン、吸血鬼映画に出でてくるようなワインだつたりするわけ？」

「うむ、人間の血液だ」

「あんたって、ジョンソン怖がるくせに結構ホラーな事ぽろつと言うわね」

「ワインは怖くないだろ？。チーノソーも振りまわたりしない」

私の言葉に師匠は何かを諦めた顔をした。

「怖くないなら、せつかだし飲んでみたら？」「

「ちなみにどんな味なのだ？」

「未成年にそう言うこと聞くわけ？」

「酒癖が悪いとアルファが言っていたので、良くなしなんでいるのかと」

「あのガキ、いつかしめる」

そう言いつつ、ちやっかりワイン用のグラスを一つ持ってくる辺

リアルファは嘘つきではないらしい。

「一口だけだもん」

と言いつつ二つのグラスに同量のワインを注ぎ、私達はグラスを打ち合わせた。

渋く、そして穏やかな熱をもたらすその飲み物は、美味と不快の間を行き来する不思議な物だった。

同じブドウから作られた物なら、ブドウジュースの方が好みだが残すのも失礼なので、私は残りのワインを一気にあおる。そしてその直後、私の意識は暗転した。

田が覚めると、そこは荒野の真ん中だった。

師匠の家にいたはずなのに、田の前にはROUTE66と書かれた看板が夕日をバックに佇んでいる。

何が起きたのかと辺りを見回せば、私の横では師匠が膝を抱えて座り込んでいた。

「師匠、なぜ私達は家を出ているのだ？ 時間も、かなりたつているようだが…」

「…自分で思い出せ、このどすけべ魔王」

なぜか、師匠は耳を夕日色に染めながら静かに怒っていた。

それ以上声をかけると殴られそうだったので、どすけべとは何だろうかと考えつつ、私は腕の時計を眺める。

そろそろ店の開店時間だったが、店に行くための乗り物は側にな  
い。

仕方なく、先日見た映画を真似て、道に向けて親指を突き出してみると。

けれど道を走る車のヘッドライトは見えず、結局そのあと3時間ほど私達はその場に座っていた。

その翌日、師匠が家中の酒を「ゴリ」と出した。

酒は体に悪いらしいので、良い心がけだと師匠を褒めたら酷く殴られた。

どすべきの意味は、未だ教えてもらっていない。

## Episode33 センス

私はよく、師匠に服装が酷いと怒られる。

と言つても元々は全て、師匠の亡き父親の服なのだが。

「あんたって本当に服のセンス最悪よね。何でよりもよつてそれを選ぶわけ?」

そう言つて、太陽とヤシの木とイルカが笑つてゐるTシャツを師匠はなじる。

割と気に入つていたのだが、それを言つと更に怒りそうなので、ビリビリにされる前に私はそれを脱いだ。

「今度の週末、お金上げるからチャーリーと買い物でも行つてきたら? あいつ、服のセンスだけは良いから」

師匠に迫られ、私は早速チャーリーに電話をした。

「師匠に、服のセンスだけは良いチャーリーと買い物に行けと言われたのだが、週末はあいているだろうか」

長く拘束するのは悪いと思つたので要点だけを伝えた所、電話は一方的にきられた。

返事がなかつたのが不安だったので、次の日曜日、私はチャーリーを家まで迎えに行くことにした。

待ち合わせの時間を決めていなかつたので、仕方なく玄関前で3時間ほど待つてゐると、物凄く不機嫌な顔のチャーリーが家から出でてくる。

「お前はストーカーか!」

「違う、チャーリーが出てくるのを待つていただけだ」

「……約束はしていない」

「でも電話をした」

「アレが人に者を頼む態度か!」

「駄目なのか?」

それは大変だと思い、私の至らぬ点を聞こうとしたが、チャーリ

一の眉間の皺が更に深くなつただけだった。

「服のセンスだけじゃなく、言葉選びのセンスもどつにかしり」

「やはり、私は言葉選びのセンスも悪いのか？」

「自覚のないところがまた腹立つ！」

といいつつも、やつぱりチャーリーは親友だ。

その日一日かけて買い物に付き合つてくれた上に、長いまま放置していた私の髪をカットまでしてくれたのだ。お陰で、師匠の反応は上々である、これで当分は叱られまい。

「やだ、凄く良いじゃない！」

そう言って私をなで回す師匠に、何故だかチャーリーが落ち込んだ。

「逆にダサダサにしてやれば良かつた」

「ださださ？」

「見るにもたえない格好つて事だよ」

「チャーリーはそっちの方が良いのか？ それならば、角とか尻尾を出すが」

「せっかく買つた服に穴が空くからやめり」

そう言つとチャーリーがあまりに落ち込んでいたので、私は師匠に内緒で、彼にタダでシェイクを作つた。

「チャーリーが好きな物だけで作つたんだ、飲んでくれ

「把握してるのでよ」

「バナナとバニラアイスとハチミツとバイナップルだ。さすがにピザとドクターペッパーは入れられなかつたが、どれも好物だろ？」「…」

「…」

口調はまだ落ち込んでいたが、上目遣いに美味しいと言つてくれチャーリーの顔は笑顔だつた。

その笑顔があんまり爽やかだったので、私は思わず嬉しくなる

「やっぱり私は、笑つていいチャーリーが好きだな」

そしてそのうれしさを言葉にした所、なぜかチャーリーはシェイクを吹き出した。

その上顎まで赤らめている。

「そう言つのは男に言つな！」

「どうしてだ？ チャーリーのことが好きなのは事実なのに」嘘をつくのはあまり好きではないので、私はそう主張した。だがなぜか、今度は側に来ていた師匠が驚いていた。

そんな師匠を見て、チャーリーも驚いていた。

見つめ合つ二人。重い沈黙。

その後、最初に泣き出したのは師匠だった。

「あんた達なんて大つきらい」

何故だか持っていたお盆で私の頭を殴り飛ばし、師匠は厨房へと駆け込んだ。

「きらいつて言われた……きらいつて……」

なにやらブツブツ呟くチャーリーの口は死者のようになつてゐた。

しかし魔王である私は復活の魔法を使えないのに、その後しばらくチャーリーの口は死んだままだつた。

## Episode 34 掛け声

「はけよーいのこたー、とはどりいう意味だ?」

「とりあえず人間の言葉で話して」

師匠はそう指摘するが、これは歴とした人間の言葉である。

「テレビで見たのだ、太った男達がそう掛け声をかけながらタックルしているのを」

「太った男…」

「スポーツだとアンソニーが言つていたな」

「誰よアンソニーって」

「テレビの中にいる眼鏡の男だ」

「ああ、今朝のニュース番組の奴ね。アレは日本つて国の相撲つてスポーツよ」

「すもう? にほん?」

「相撲は私も良く知らない。日本つて言つのは地球の反対側にある島国よ」

「ちきゅう?」

「仕事の合間に、色々教えてあげる」

その日の夜、客が途絶えたダイナーのボックス席に師匠は大きな地図を広げた。

「私達がいるのは」こ、アメリカ。相撲があるのはこの小さな島国、「日本か」

「この地図は平らだけど、私達が住んでいるのは大きな球体の上なのだ。これを地球って呼ぶのよ」

「丸の上と言うことは、この世界は繋がっているのか」

「そうよ。海や陸で繋がった大きな世界にたくさんのがあって、たくさんの人人が住んでいるの」

「それは凄いな」

「でも本当に大きな球体だから、場所によって言葉や文化、住む人

の姿は全然違う

「私みたいな物もいるのか？」

「それはいないわね」

わかりきつていたことなのに、何故だか落胆してしまう。

そもそもこの世界は命ある者の世界。私のような存在があるわけがない。

むしろ、私のような者が存在すべきではないのかも知れない。

「でも多種多様な人間が集まってる星だから、あんたみたいのがいても全然平気よ」

落胆した私を救ってくれたのは、師匠の微笑みだった。

まるで私の考えを見透かしたように、大丈夫だと彼女は言つてくれた。

「あんたが思う以上に、色々な人や生き物がいるんだから

「例えばどんな人がいるのだろうか」

「相撲がある日本では、刀つて武器をさした侍とか忍者つて言つ暗殺者がいるらしいわ」

「怖いな」

「あと、この前見たホラー映画の……テレビから出てくる女的人は

「ここ出身」

「……私は、日本には行きたくない

「あと中国はね……」

そこで言葉を切り師匠は少しばかり考え方込む。

「……キヨンシーがいるわ」

「キヨンシーは人間か？」

元人間だから似たような者だと師匠は言う。

「あとルーマニアにはドラキュラ伯爵でしょ。フランスはオペラ座の怪人、切り裂きジャックはイギリス人で、エジプトにはミイラ、

ブラジルには大アマゾンの半魚人がいるわ」

「……世界は、モンスターだらけだな」

「私世界史とか地理の授業サボってたから、この手の有名人しかわ

かんないのよね」

といいつつ師匠は何気なく、我々が住む場所からほど近い州を指さした。

「あと、テキサスにはレザーフェイスかしら」

「彼のローンソーも怖い……。アメリカはすごく危険だな」

「たしかに、モンスターは凄く多いわね。だからほら、あんたがいても全然大丈夫よ」

師匠は私を元気づけようとしたようだが、その後も立て続けにモンスターの名前を列挙する師匠に、私は恐怖で身動きが取れなくなつた。

結局この日、あまりの恐怖に私は仕事がままならなくなり、翌朝まで師匠の腕を放せなくなつた。

## Episode 35 いたずらっ子

11月に入つてから、師匠が店にやつてくるのが少しだけ遅くなるようになった。

仕込みや準備は私の担当だし、ハンバーガーも一人前のお墨付きを貰つたので問題はないのだが、一人でダイナーに立つのは本当は少し寂しい。

「あれ、今日は一人か？」

ホールにぽつんと立つてゐる私に、そう声をかけたのは久方ぶりに店に来たステイーブだ。

相も変わらず薄汚くて幸が薄そうなトラック運転手は、無精髭をなぞりながら、おきまりのカウンター席に腰を下ろす。

「ようやく店に来れたのに、歌姫ちゃんがいないなんてついてねえな」

「もうすぐ来ると思うぞ」

「あれか？まさか彼氏が出来たとか？」

そんなわけはないと言おうとしたが、何故だか持つていた皿を取り落としてしまった。

「まあ最近目に見えて綺麗になつたあらなあ。小さい頃は、どっちかつて言うと男の子みたいだつたのに」

「今もお淑やかではないぞ」

「アレでもある方なんだよ！昔はイタズラばっかりして、オヤジさんにぶん殴られてた」

たしかにいたずらっ子の元締めアルファが尊敬するくらいだから、彼の言葉に偽りはないのだろう。

けれど今の彼女は、どちらかと言えば子どもを殴つて叱る方である。

「あれだな、ガキが出来てしまふりする母親みたいなもんだな「ガキ」と言いつつ指をさされ、私は少しだけ落ち込んだ。

「師匠は私の母親なのか」

「恋人になるかと思ったが、他にいるみたいだしな」

「家族になれるのは嬉しいが、母親と子どもという関係は何故だかあまり嬉しくなかつた。」

「恋人が出来たら、子どもはどうすればいいのだろうか」

「まあ難しいよなあ。俺も母親が再婚してからは、実家に顔出さなくなつたしなあ」

「側においては、いけないのだろうか」

「それぞれだろう。まああの子は、お前を放り出したりやしねえよ」「でも邪魔になつたら出て行くと、私は師匠と約束した。」

「ステイーブ、もし師匠が結婚したら君の家に泊めて貰うことは可能だらうか」

「この年で野郎と同居とかしたくねえよ」

「男であることが問題なら、魔法で容姿を女に変えるぞ」

「…胸が大きいなら考えても言い」

「希望のサイズを言いたまえ」

「つていうか、こついう女になれるか?」

「そう言つてステイーブは、いかがわしい格好の女性が写つてている雑誌をつきだしてきた。」

「こついう女性が好みなのか?」

「おう、一度で良いからこついう女に膝枕して貰いたい」

「良いだろう、このくびれはなかなか難しそうだが魔王の魔力にかかればこれくらい…」

早速変身しようと力んだ直後、馴染みの衝撃が頭部を駆け抜ける。気がつくと、師匠がお盆を片手に私の背後に立つていた。

「さつきから聞いてりや、あんた達本当に馬鹿なんだから」「デートはいいのかい?」

ステイーブが尋ねると、私に喰らわせたのと同じお盆チョップを師匠は繰り出す。

もはや密と従業員のやり取りではないが、ステイーブが嬉しそう

なので良いのだろう。

「彼氏なんていないし、もうすぐテストだから勉強してただけよ」

「じゃあ師匠は結婚しないのか？」

思わず縋り付けば、また馬鹿なことをと師匠が呆れた。

「私は結婚しません。ずっと一人でこの店をやつしていくって決めてるんだから」

「一人……」

「あ、あんたはいても良いけど」

その一言に、私は思わず師匠をギュッと抱き寄せた。お陰でお盆チョップを3回も喰らったが、それでも放せぬほど嬉しかった。

「なんだよ、上手くいってるんじゃないか」

俺の巨乳がと残念がるステイプ。

「巨乳が見たいなら、変身しても良いぞ。私は今最高に機嫌が良い」「やつたら追い出すわよ」

師匠はそう言って、ステイプの雑誌をゴミ箱に捨てた。久しぶりに変身魔法を使つ氣でいた私は、少しだけ残念だった。

## Episode 36 とぼける

割れた。

割れてしまった。  
よりもよつて、師匠が大切にしているコーヒー カップを粉々にしてしまった。

師匠がいなきで良かつたと思いながら破片を集めて、私はすぐさま魔法で元に戻そうと試みる。

だが元に戻り欠けたコップが、突然破裂した。

破片が突き刺さった痛みで私はようやく思い出す。

このカップを割つたのが、もつ100回目であることを。  
最近あまり使っていないので忘れていたが、私の魔法には回数制限がある。

同じモノを直せるのは99回まで。それ以上は何をどう頑張っても復元は不可能なのだ。

よりもよつて、なぜかこのカップばかりとうなだれていると、私の特異な聴覚が師匠の足音を聞き取つた。

友達の家で勉強をすると言つていたのにいつもより帰りが早い。自分の間の悪さを悔やみながら、私は急いで割れた破片を植木鉢の中に隠した。

師匠が帰つてきたのは、植木鉢から飛び退いたのとほぼ同時だった。

「今日は寒いね、すっかり冷えちゃつた」

帰つてきた師匠は機嫌が良さそうだ。

だからこそ怒らせたくないと思い、私は喉までかかつた謝罪の言葉を飲み込む。

もう少し時間をおいて、完璧な嘘を考えよう。

完全なアリバイをつくり、絶対ばれない計画を考えるのだ。

いくら馬鹿だアホだと周りから言われているとは言え、私は魔王

だ。犯罪ならお手の物である。

「そうだ魔王」

「どうした師匠」

「寒いからコーヒー入れて」

早速計画が破綻した。

師匠は「コーヒーを飲むときあのカップを必ず使う。違うカップを出せば確実に怪しまれる、といいつかばれる。

忙しいなら自分で入れるけど…」

「問題ない！」

キッチンへの進路を塞ぎ、私は慌てて食器棚の前に立つ。ダメだ。妙案が全く思いつかない。

使える魔法があるとしたら、師匠に幻覚を見せるとかくらいのものだ。しかし師匠にだけは魔法をかけないと私は決めていた。これだけはやりたくない。

「…魔王、どうしたの？」

唐突にすぐ後ろで声がした。パニックで師匠の気配を読み間違えていたのだ。

「も、問題…ない」

「つてあんた、手の平血だらけじゃない!」

しまった。破片を片づけるのに必死で、全く気付かなかつた。

「手当てしなきや」

「だ、大丈夫だ」

「でも滝のように血が出てるわよ」

「これくらいで死ぬような魔王ではない」

「でも痛いでしょ?」

痛いのは、割れてしまつたカップの方だらう。

「…とりあえず治療を」

「そのまえに、あの、謝りたいのだが」

「別に良いわよ、気付いてるから」

「え？」

「とぼけたつて無駄よ。割つたんでしょう、私のコップ」  
ばれていた。

「言つておくけど、あんた全部顔に出るから  
か、隠して置いてすまない」

「それにいつか絶対割ると思つてたし」

「師匠は未来が見えるのか？」

師匠は私の血を拭いながら、何故か吹き出した。

「だつてあんた、私のコップだけやたら慎重に扱うじゃない。割ら  
ないよう気を遣いすぎて、いつも手が震えてるんだもの」

「大切な物だと聞いていたから…」

「だからってそんな腫れ物触るようこじななくても良いのよ。割れた  
らまた買えばいい」

「でも同じモノは売つてないのだつ」

「同じのはないけど、前よりもっと可愛い奴をかうからいいの」

「次も割つてしまつたらどうしちよつ」

「そしたらまた、もつと可愛い奴を買つわ」

「でも、出来る限り割らないでよと苦笑され、私はごめんなさい」と  
頭を下げた。

## Episode 37 マッサージ

朝日を覚ますと、なんと師匠が花を飾っていた。

「似合はないのはわかるけど、その顔失礼すぎるわよ」

「いや、その、花は似合つたが、自ら買つてくるのは初めてだつたから」「

「これはもらい物よ。ファンだつて言う人から

宅配で言いながら師匠が差し出した紙には、見てるこちらが恥ずかしくなるような、恋の台詞が並んでいた。

「どことなくチャーリーの字に似ているような気がしたが、差出人の名前は無い。

「まあ柄じゃないけど、いつの貰えるとやつぱり嬉しい

」そう言って花の香りを嗅ぐ師匠は、いつもより何倍も綺麗にみて、何故だか私は焦つてしまつた。

焦つた上にとても不安で、それは師匠が学校に出かけたあとも消えてくれない。

その所為でことあるごとにガラスを割つたり、物を壊していたら、向かいの家からギヤング団の頼れるリーダー、アルファがやってきた。

「遊ぶ約束を、していただろうか？」

「心配できたんだよ。魔王の挙動不審な動き、俺の家からバツチリ見えるんだよね」

何があつたのかと尋ねられ、事の次第を話す。

するとアルファは、私の焦りと不安を取る素晴らしい解決法をみつけてくれた。

「花何がより、もつと凄いプレゼントをあげればいいんだよ

「…でも私は何も持っていないし」

「じゃあチケットにしなよ。お金もいらないプレゼントだけど、うちのママは凄い喜んでくれる」「

掃除を変わりにやるチケット、庭の草むしりをするチケットなど、仕事を肩代わりするチケットを渡すと、彼のママはとても喜んでくれるらしい。

「しかし、掃除も洗濯も草むしりも私の仕事だ」

「じゃあマッサージは？ 年頃の女は、エステとかマッサージのチケットが好きらしいよ」

「なるほど、じゃあ早速作つてみるー。」

「一枚とかケチなコトしちゃだめだ。10枚綴りにして大人の魅力をアピールするんだ」

アルファの助言通りに早速チケットを作り、私はそれをこつそりとポストに入れた。

しかしその夜、私がチケットを見つけたのはゴミ箱の中だった。ショックのあまり、仕事から帰った服のままゴミ箱の側で1時間ほど佇んでいると、師匠がばつの悪そう顔で私の横に立つ。

「もしかしてそれ、あんたがポストに入れた？」

「……」

「か、書いてある文字が読めなかつたから、だからてつきり子どものイタズラかと思つて……」

「……」

「そんな悲しそうな顔しないでよ！ ちょっと生ゴミ臭いし、正直なんだかよくわからないけど、あんたから貰つた物は大事にするからー！」

師匠はそう言つてチケットを取り上げたが、私はそれを奪うとゴミ箱に戻した。

「もういいんだ。忘れてくれ」

「…………ごめんね」

「…………」

「本当にごめん」

「……」

「……お詫びに、ハンバーガーにパテ3枚挟んであげる」

「……」

「チーズも2枚」

「じゃあ3枚」

「……」

「…マッサージの券だつたんだ」

「口ミ箱を覗きながら言えれば、師匠が謝罪の言葉を口にしてながら私の手を握った。

「花何かより、ずっと嬉しい」

「本當か？」

「最近肩こり酷いし、マッサージされたいなあつておもつてたの」  
師匠の言葉と笑顔に、ようやく沈んでいた気持ちが浮上した。

「今からでも使うか？　10枚もついてるんだ」

「じゃあ食後にお願い」

そう言つて師匠は笑ってくれた。

ずっと不安だったのは、この笑顔が花を贈つた誰かに向いていた  
からかも知れない。

花を愛でている時よりも美しいその笑顔に、ようやく私はホッと  
して、それから師匠の手を握りかえした。

「師匠のためなら私は何でもする。マッサージも掃除もするし、花  
だって摘んでくる」

「どうしたのよ突然」

「ただ師匠が望む物を贈りたいと、そう思つただけだ」

「…そういう台詞は、恥ずかしいからやめて」

「どうして恥ずかしがるのかと尋ねたが、師匠はこたえてくれなか  
つた。

それどころか、もう一度言つたらチーズを2枚に減らすと脅されたので、私は仕方なく黙つた。

## Episode 38 大切に

「師匠、今日は私に付き合つて欲しい」  
私がそう言つて頭を下げるが、師匠は何故だか拳動不審になり、  
持つていた「コーヒー」を派手にブチまけた。

「つ、付き合つて…」  
「うちのガレージでギャング団の集会があるから、一緒に出て欲しいのだ」

「……遊びか」

師匠はなにやらがっかりした顔で「コーヒー」を拭いている。  
てっきり用事があるのかと私までがっかりすると、師匠が慌てて  
行くと言つてくれた。丁度今日は午後から休校らしい。

「それで、今日はどんなイタズラの会なの？」

「今日はイタズラではなく、宝物を見せ合つ会なのだ」

「宝物？」

「一番の宝物を持ち寄つて、それがいかに凄くて素敵かを自慢しあうのだ」

「え、あの、それ…」

「私は高価な物は持つていないし、それに宝と言つたら師匠しかな  
いから」

だから来てくれないとお願いすると、師匠はなぜだか戸惑つて  
いた。

「…けれど、プラモモデルとかハンバーガーとかもあるじゃない」  
「でも宝物とは一番大切にしている物だらう?」

ハンバーガーは好きだけど食べてしまって、プラモモデルは遊ぶと  
きに振りまわして傷つけてしまう。

だから傷も付けたくないほど大切で、ずっと側にありたいと思つ  
物は師匠しかないのだ。

「……だから、私と一緒に来て欲しい」

大事なお願いをするときは、紳士的な態度でお願いをする物だとテレビで言っていたので、私は師匠の前に片膝を突き、その手を取つた。

途端に師匠は真っ赤になつて私の腕をふりほどく。

「やはり駄目か…」

「そうじやない、そうじやないけど…」

「ならいいのか?」

「……あんまりドキドキさせないで、お願ひだから」

「別に怖いことは言つていらない」

「うん、わかんないならいいや。つていうかそうよね、無意識よね  
どうせ」

何故だか師匠はちょっと残念そうだったが、集会にはちゃんと来てくれた。

そう言つ優しいところがやつぱり凄く好きで、それをふまえて師匠がいかに素晴らしい宝物かを熱弁したところ、本日の一等賞を貰うことなどが出来た。

やはり師匠は最高の宝物である。

## Episode 39 食事

最近師匠の営むダイナーに客が増えてきた。

師匠の話では、ホリデーシーズンというのに突入したかららしい。このホリデーシーズンになると、この国の人々は家から遠く離れた場所まで旅行に出かけるのだそうだ。

ダイナーの側の道、ルート66を車やバイクで走る旅行が流行っている事もあり、今年はいつもより客が多いのだろうと師匠は話していた。

ホリデーシーズン以外でも、田新しい客が来ることは珍しいことではない。

だから最初の頃はさほど躊躇つこともなく、客入りの良い店に私も喜んでいた。

けれど、それは間違いだった。  
その日店を訪れていたのは、バイクを乗つて旅をする若者達の一団だった。

彼らはみな若く、何かにつけて師匠を呼びつけるところが何故だか少し気に入らなかつた。

お客様は神様だと教えられているので勿論何も言えないが、師匠が彼らに微笑んでいるのも本当は少しいやだった。

「ねえ、明日もこの街にいるから良かつたら食事しようよ」

若者達の中でも、ひときわ背が高くて顔が整つていてる男がそう言えば、師匠は笑顔でどうしようかと悩んでいる。

途端に、何故だか心の内にどす黒い感情がわき上がりてきて、私は慌てて店を飛び出した。

そのまま店の裏手に回り、黒い感情に支配されないよう気を付けながら魔法で深い穴を掘り、その穴へと飛び込んだ。

どれくらいじつとしていたかはわからない。だがふと上を見ると、師匠がこちらをのぞき込んでいた。

「……何してゐる」

「悪い魔王が出来やつたから、JUNDたえていた」

「悪い魔王?」

「昔の私だ。人を見ると、その、殺したくなる感じだ」

「…ねえ、そつち行つてもいい?」

言ひやいなや穴に飛び込んできた師匠を、私は慌てて抱きとめる。

「お密は良いのか?」

「もう帰つたから」

その言葉に、私はまたさつきの光景を思い出してしまつた。  
途端に悪い魔王が出来やつになつたので、慌てて膝を抱えて座り込む。

「いかないよ、食事」

「まつまだ何も聞いていない」

「出でるから、顔に」

慌てて顔を手で押さえれば、師匠が笑いながら隣に座つた。  
「嫉妬はしてくれようになつたんだ」

「嫉妬ではなく、これは殺意だ」

「同じよ。私もあんたが女の子に誘われているところを見ると、相手の子を殺したくなるし」

「し、師匠も悪い魔王になるのか?」

「みんななるのよ、宝を取られそうになるとね」

「…私は、師匠の宝か?」

「嫌なの?」

「嫌なわけがない。

「だから、もう穴掘らなくて良いわよ。埋めるの大変だし」

「…すまない」

「あと、私はあんたがいやだつて思つ」とほしないから、ちゃんと

言葉にしてくれると嬉しいかな」

「チャーリーやスティーブは良い、でもさつきの男と食事に行かれいでくれ。一人にされたら、私はきっと悪い魔王になる」

「じゃあ行かない。私良い魔王が好きだもの」  
そう言つて微笑む師匠を見ていたら、何故だか突然体が無意識に動いた。

「な……んで……」

師匠は真っ赤になつて口を押さえている。

「どうしてだろう、何故だか突然こうしたくなつた」

「ひつ人にキスしておいて、何なのよその言い草は！」

そうなのだ、気がついたら私は師匠にキスという奴をしていたのだ。

「私も困つてゐるのだ、自分の体が無意識に動くなんて初めてだから

どこか壊れてしまつたのかと悩む私の頭を、師匠が叩く。

「む、無意識で許されるの、一回だけだから……」

「じゃあ2回目は黙目か？ なんだか、凄く気持ちが良かつたんだが

「やう言つことをしれつと言つな！」

「口づけがこんなに素晴らしい物だとは知らなかつたのだ。可能ならもう一回したい

「だめ！」

「わかつた、じゃあ今度チャーリーかステイーブにお願いする

「それも駄目。絶対駄目」

「なら師匠にして欲しい」

私がお願いすれば師匠は呆れ顔でもう一度私の頭を叩く。

「子どもが親にねだると同じか

「駄目か？」

「……おでこだつたらしてあげてもいい」

それでも良いと頷けば、師匠が優しい口づけをくれる。

「うん、やつぱり唇が良いな」

我が家言つなど、口づけの変わりに張り手を送られた。4回も。

## Episode 40 人見知り

「あんた、ついにあの子とできたのかい？」

鼻歌交じりで庭の芝刈りをしていた私に、そう声をかけたのは隣の家の老婦人だ。

彼女はとても変わった女性で、家の前を通る子どもを大声で怒鳴つたり、家に大量のゴミをため込んだりする癖がある。

あまりに異臭が酷い日があつたので、こつそり消臭の魔法をかけてくれと頼みに行つたのが縁でときたまこうして話すようになつたが、人見知りなのがいつも話しかけるのは私の方からだつた。なのに今日は彼女の方から声をかけてくれた。言つている意味はよくわからなかつたが。

「別に師匠とは何も作つていないぞ」

「恋人同士になつたのかつてきいてんだよ」

「それはない。前に師匠に、魔王とだけは恋人にならないと宣言されたからな」

「笑顔で言うことかい」

「恋人ではないが師匠は良くしてくれる。それに最近、キスというのをしてくれるようになつたのだ」

「あれはとても良い。されると胸がとても温かくなる。

「あんた、相変わらず頭のねじが緩いねえ」

「私は機械ではないぞ」

「そう言つところが馬鹿だつていつてんだよ」

老婦人はそう言つと、こちらへ来いと私を招き寄せた。

言われるがママ彼女の家の前に立てば、老婦人は家中から小さな本を持つてくる。

「昔からね、女はこれに弱いんだよ」

「これは、詩の本か」

「愛にまつわる詩をよめば、女はみんな喜ぶ」

「師匠もか！」

「あれも女だからねえ、いちおつ」

「ありがとう！ 早速今夜師匠の前で読んでみる」

そう言って頭を下げて、それから私は老婆の腕を取り手の甲に口づけをした。

感謝の変わりに、キスをしてもよいと師匠に教えて貰ったのを思い出したからだ。

「……酔狂だねえ。こんな汚い婆の手に」

「何処が汚いんだ？ 細くて綺麗じゃないか」

私が言つと老婆は驚いたように目を見開き、それから呆れた顔で笑つた。

「本当に変わり者だよあんたは」

「ならあなたは、とてもいい人だな」

「褒めても何も出ないよ」

「事実だ。私の話しだ相手になつてくれるし」

「だがみんなはキチガイだといつよ」

「怒鳴つているのは子ども達の為だらう？」

怒鳴りはするが、老婆の言葉は「車に気を付ける」とか「遅刻するな」という内容の物ばかりだ。

言い方が悪いので誤解されがちだが、子どもの身を案じての言葉であるのは、ちゃんと聞けばすぐにわかる。

「不器用だがあなたはいい人だ。詩集もくれたし」

「あんたがあんまりアホな顔してるから、心配になつただけや」

「そう言つところがやさしい」

勝手に言つていろとつげて、老婆は家へと戻つていく。

「お詫びに家の片づけなら手伝つぞ！」

「いらん世話だ」

相変わらず乱暴だが、やつぱり悪い人ではないと思つ。

## Another Episode 4

「えー、この人と一緒にされると迷惑なく

Episode 40・5 師匠視点

「あんた、ついにあの子とできたのかい？」

学校から帰った私に、そう声をかけたのは隣のケリーお婆ちゃんだ。

「あの子って？」

「お前の所の、あの若い男だよ」

「無いわよ。あいつ、そう言う感情欠落してるし」

「でもキスしてるんだろう」

そう言うことを表で言うなど、きつく叱らねばと心に決めた。魔王は人の誤解を生むのが上手すぎる。

「恋人は無いわ。キスも、親子でするような物ばかりだし」「でもそれが残念なんだろ？」

聰いケリーに、私は唸るほかない。

近所の大人達は、彼女を痴呆の始まつた老人だと馬鹿にしているが、それは大きな間違いだ。  
なにせこちらの秘めたる想いを的確に言い当てる、勘の鋭さは未だ健在。

ことあるごとに魔王とのことを尋ねてくる彼女は、高校の同級生よりその手の話題に敏感だ。

「ま、否定はしないわ」

「大人な反応が出来るようになつたじゃないか。昔は違うと喚ぐだけだったのに」

「大人になるわよ。あんな大きな子どもが出来れば」

そう呆れた直後、ケリーの家から派手な倒壊音がした。

「もしかして、魔王がいる？」

「さすが」

さすがもなにも、この手の派手な音を立てるのは魔王の十八番である。

「迷惑かける?」

「…家の掃除をしたいときかなくてね。仕方がないから好きにさせてる」

「手伝うわよ。今日はお店お休みなの」

「こんな汚い家、私だったら死んでも入りたくないよ」

自分のことを棚に上げて笑うケリーお婆ちゃんは、どこか自嘲的だった。

「昔はよく遊びに来ただじゃない。お爺ちゃんの作ったクッキーも、良くなっちゃうになつたし」

でもそのお爺ちゃんが死んで、ケリーお婆ちゃんは変わってしまった。

同じ頃に私も父を亡くし、私達はそれぞれ、悲しみを言い訳に家からでなくなつた。

そして、気がついたときにはケリーの家は荒れ果て、私は彼女との付き合い方がわからなくなつてしまつたのだ。

「もうあの人はないよ」

「私は好きよ、ケリーが焼くクッキーも」

でも本当は、付き合い方なんてわからなくてもいいのだ。

だつてケリーとは赤の他人だった魔王が、こうして家で好きかつてやつてているのだ。彼が家に入れているのに、私が入れないわけがない。

「だからまず、キッチンから綺麗にしましよう」

鞄をデッキにおき、私はケリーの家の扉を開ける。

数年ぶりに足を踏み入れたその家は、何もかもが変わってしまっている。

けれど立ちすくんだ私の背中を、派手な倒壊音と情けない悲鳴が押してくれる。

「あんた達、本当におかしなカップルだ」

「えー、この人と一緒にされると迷惑なんんですけど」

いつだつたか、ケリーに可愛いと褒められたおどけた笑顔を浮か

べれば、彼女は呆れたように笑う。

「綺麗になると思うかい？」

「あいつ掃除のプロだもん」

「破壊の間違いだらう？」

「それに私もいるし」

そう言つて微笑めば、ケリーがようやく私の隣に並んでくれた。

「じゃあ家が綺麗になつたら、久しぶりにクッキーを焼こうかね」

その言葉と、そして久しぶりに見た笑顔が嬉しくて、私は彼女の肩を軽く抱きしめる。

「ねえ、良かつたらうちの店にクッキー置かない？ 私甘い物作るのがどうも苦手で」

「考えておくよ。…ただし、売上げの9割は貰うから」

「その代わり、売れ残ったクッキー食べて良い？」

「私のクッキーが売れ残るわけがないだらう」

そう言つケリーは昔より偏屈になつたが、それもまた可愛らしくて素敵だと思つた。

出来ることならこのうちお婆ちゃんになりたい。

そう思い、そしてそれを言葉にすれば、ケリーはにやりと微笑んだ。

「私みたいになりたけりや、まずは素敵な男を捕まえな

「そんなのこの街にいる？」

「意外と近くに転がつてるもんさ」

「ミミの中とかに。」

そうつづて、ケリーおばちゃんは更に意地悪く笑つた。

「お前は俺の親友だよな」  
「もちろんだ。そんなことよりほり、ポテトが冷めてしまつわ」  
「親友だったら、どんなことでも応援できるよな」  
「むろんだ。そんなことよりポテトが…」  
「だったら俺と彼女の恋を応援してくれ」  
突き出されたポテトのさきにいたのは、カウンターの側で暇そつにしている師匠だった。  
驚きのあまり、私は片づけようとしていたコップを取り落とす。  
派手な音をたてたが、チャーリーを覗けば他に密はいなかつたので、急いで魔法で治した。  
「…あの、その、恋というのは、恋か？」  
「そうだ、2週間後のクリスマスまでに、告白するつもりだ」  
そう言つチャーリーの目は本氣で、そして私は真剣な顔で尋ねる。  
「師匠のことが好きなのか？」  
「気付いて無かつたのかよ！」  
「だつて、何も言わないし」  
「それはまあ、俺の勇気がなかつたんだけども」  
そう言つ赤くなるチャーリーは、確かに恋をする男の顔だつた。  
「応援、してくれるよな」  
もちろんだと言おうとした。チャーリーは親友だ。  
親友の恋は応援する物だとギヤング団の掟にも書いてある。  
なのになぜか、師匠とチャーリーが、テレビドラマの中の若い恋人たちのように、四六時中キスをしたり、抱き合つたり、裸になつたりするのを想像した途端、またしても悪い魔王が目を開けた。  
けれどチャーリーは親友だ。殺す事なんて出来はしない。  
「も、もんだいない…ぞ。応援、大丈夫…する…」

悪い魔王を押さえ込みながら、必死に言葉を重ねると、何故だか涙が止まらなくなつた。まるでダムが決壊したように目から涙が溢れてくるのだ。

お陰で悪い魔王は影を潜めたが、何故だかチャーリーが酷く慌てている。

「すまん、お前が本気だつたなんて思わなかつたんだ！ ホントごめん」

その上彼は、詫びる理由など無いのに「ごめん」と繰り返す。

「応援、大丈夫…問題…ない」

「いやいい、もう忘れる。お前の気持ちはお前以上にわかつたから」

「いや、恋は…大事だつて…師匠が…」

だから応援すると口にしそうとした瞬間、突然目の前の世界が歪んだ。

そしてその次の瞬間、私は3日後の師匠の家にいた。  
正確には3日間寝込んでいたのだといつ。高熱で。

「目がさめた？」

側にいたのは師匠で、彼女は私の手をギュッと握ってくれる。

「チャーリーは？」

「毎日お見舞いに来てたわよ。あと、応援はもういらなくつて」「どうして？」

「失恋したから」「うう」

私は驚いて師匠を見る。

「おかしかつたのよ。あいつ倒れたあんたを抱きながら、『俺を振つてくれー！』って大絶叫したんだから」

「でも、告白はまだだと…」

「うん。告白されてないけどつて驚いたら、好きだつていまさう言うのよ」

まあ知つてたけどと師匠は言った。どうやら何も知らないのは私

だけのようだつた。

「知つていたのに、振つてしまつたのか？」

「嬉しかつたけど、彼の事は友達にしか見えなくて」

だから言われたとおりにしたのだと、師匠は静かに言つた。

「私が応援したら、結果は変わつていたか？」

「こういうのは当人同士の問題。応援は関係ない」

むしろ大切なのはこれからだと、師匠が微笑む。

「成功したら一緒に喜ぶ。失敗したらなぐさめる。それが一番大事」「なぐさめられるだろうか」

「大丈夫よ、あんた人の心を暖かくする天才だから」

師匠に言われると、なんだか頑張れる気がしてきた。

「今すぐにでも、チャーリーの所に行きたい」

「熱が下がつたらね。それに、私も心配したんだから」

だからもう少し私と一緒にいて師匠が言うので、私は彼女の手を握つた。

「それにしても、どうして急に熱なんて出たんだろう」「

「知恵熱じゃないの？」

それはどんな物かと尋ねると、馬鹿が引く風邪のような物だと言われた。

私の頭がもう少し良かつたら、チャーリーを応援出来たのだろうか。

そんなことを思つていると、また熱が上がつてしまつた。

考えると熱が出るのに、どうやって頭を良くすればいいのだろう。

でも次こそは、ちゃんと彼の恋を応援したい。

そしてそのために、とりあえず解熱剤は持ち歩くことじょうと  
思った。

## Episode 42 フォロー

「俺は決めたんだ。恋が実らないなら、潔くあの子の恋を応援しようって」

先週まで死人のようだったチャーリーが、ある朝物凄く元気になつていた。

「それはとても良いと思うが、師匠は留守だぞ」

「いい、用があるのはお前だ」

そう言つと、チャーリーは勝手に家に上がり込む。

「俺気付いたんだ。原因はお前だつて」

「何の原因だ？」

「お前さ、恋したいとか思わないだろ」

「そんなことはないぞ。素敵な物だと聞くし、願望はある」

「それがもうダメだ。恋をして、そのあとはどうする？」

「恋のあとに何かあるのか？」

そういうと、チャーリーは「やつぱりそつか」と呟きながら、持つていた鞄の中身をリビングテーブルの上にぶちました。

それは大量のDVD。映画か何かのようだが、表紙に「写つて」いるのは裸の女性ばかりだった。

「お前は男として大事な物が欠落している！ 恋が出来ないのも、自覚が出来ないのもその所為だ」

「意味がわからない上に、そのDVDは物凄く目に悪いのだが」

「これを望んで直視できるようになれ！」

チャーリーが目の前に差し出したDVDには、雌豹を思わせるポーズを取る裸の女が写つていた。

「女性の裸を見るのは、失礼ではないか？」

「失礼じゃない。男はみんな、こういうDVDを持ってるもんだ」

「チャーリーもか？」

「これは全部俺のコレクションだ」

「沢山あるんだな」

「お前の趣味がわからなかつたから、色々持つてきた」

「よくわからんが、手間をかけさせたようだな」

「とりあえず礼を言つと、チャーリーはさつそくテレビを付ける。ちなみに、ホラー映画ではないだろ?」

「そう言つもあるが、普通のやつだ」

「怖くはないんだな」

「ムラムラするだけだ」

良いから画面を見ると言われ、チャーリーと共にソファーに座る」と5分。

唐突に、テレビの中で女性が服を脱ぎだした。

「あの、チャーリー?」

「なんだ?」

「これはどういうストーリーなのだ?」

「そここの女と、あつちの男がやるんだ」

「何を?」

「ホラー映画でもあるだろ? 裸で重なるあれだよ  
「でもあのシーンだけで映画が成立するのか?」

「そう言つ映画なんだよ、とりあえず見ろ!」

しかし正直何が面白いのかさっぱりわからなかつた。

台詞もほとんど無いし、怖くもないのに女は悲鳴を上げるし、非常に退屈だ。

その所為か、どうやら私は寝てしまつていていた。

ふと気がつくと一時間もたつており、テレビは消えていた。

「おはよっ」

顔を上げると、チャーリーの代わりに師匠が隣に座つていた。

「チャーリーがいなかつたか? 一緒に映画を見ていたんだが」「ドミ」と一緒に家の外に放り出したわ

「ドミとはDVDのことなのだろ? 山積みにされていたそれはなくなり、代わりに師匠が好きな映画がそこにはおいてある。

「もう、あの男ホント最低……」

「チャーリーはいい人だぞ。あの映画も、師匠の恋を応援するため  
に持つてきたらしい」

それがなぜ恋の応援に繋がるかはわからないが。

「そんなフォローが出る時点で、全く役に立つてないのは明白ね」「確かに、見るどころか寝てしまつた。チャーリーに悪いことを  
したな」

「気にしなくて良い。あと、ああ言う映画は絶対見ちゃダメだから  
ね」

そう言う師匠の目は、酷く冷たかった。

理由はわからなかつたが、とにかく怖かつたので私は一度と見な  
いと約束をした。

## Episode 43 ハスキーボイス

『私、おじさんと結婚するの』

テレビの中でもう言つて笑う少女は、幼い頃の師匠だった。

「懐かしいなあ」

私達が見ているのは、大掃除の最中に見つけた『思い出ビデオ』

だった。

昔の師匠が見られるというので無理矢理流して貰つたのだが、期待したとおり、幼い師匠は実に可愛い。見ていると、なぜかこちらがドキドキするくらい可愛い。

『ぜつたいぜつたい、おじさんと結婚する』

でもその笑顔は「おじさん」という男に向けられた物で、その事実は何故だか私を酷く動搖させた。

そのおじさんとやらが師匠を撮つているので、残念ながら姿はよく見えない。

ただ優しげなハスキーボイスは師匠が好きなカントリー歌手の声に似ていて、そう言つていつも大好きだとテレビの中の師匠は微笑んでいた。

それ見たとき、私は会つたこともないこの男に、なぜか敗北感を覚えた。

そもそも何かを競つている訳ではない。

けれど私は、テレビを見ながら「負けた」と強く感じたのだ。

「師匠はいつ、この人と結婚するんだ?」

考えると同時に口から零れた言葉に、師匠が飲んでいたコーヒーを吹き出した。

「何馬鹿な事言つてるのよ」

「だって結婚の約束をしたのだろう」

「何年前の話だと思つてんのよ…」

あほらしさと言つながらコーヒーを拭く師匠。けれど真実の愛は

永遠の物だと、前に見た映画で誰かが言っていた。

「でもこの人が約束を覚えていて、ある朝薔薇の花束を持って玄関に立つていたらどうする！」

「あなたのプロポーズのイメージって微妙すぎるわよ

「とつ、とにかく本当に訪ねてきたら…」

「ないない」

そう言いつつ、師匠の顔は少し寂しげだった。

このおじさんが今どこにいるのかはわからないが、もしかしたら師匠は彼に会いたいのかも知れない。

それきり師匠はおじさんについて何も言わなかつたが、きっと我慢をしているだけなのだ。

そしてそれに気付いた瞬間、私はたまらなく寂しさを感じてしまつた。

相変わらず理由はわからないが、寂しいと言つのは酷くつらい。そしてそのつらさを師匠が感じているかと思うと、私はいても立つてもいられなくなつた。

だから私は決意したのだ。師匠とおじさんを会わせてあげよう。しかし残念ながら、師匠はおじさんについては何も教えてくれなかつた。

仕方なく、深夜になつてから師匠に隠れてビデオやアルバムなどを片つ端から覗いたが、残念ながら彼の消息はつかめない。

なので私は、作戦を考えることにした。

おじさんの容姿と声、そして仕草を研究し、彼に変身する事にしたのだ。本人ではないが、寂しさはきっと紛れるはずだと思ったのである。

翌朝、薔薇を片手に師匠の家の玄関に立つた私は、どこからぞいつ見てもおじさんそのものだ。

「久しぶり

我ながら完璧な変身だ。これなら絶対師匠も気付くまい。

「……アホか」

なのに私を認識した師匠は、酷く呆れた顔をしていた。

「久しぶりの再会なのににつれないな」

「その小芝居辞めなさいよ」

「小芝居ではない」

「なら今すぐ、自分の名前をフルネームで言ってみなさい」「そこで私は、おじさんの名前を知らないことに気がついた。」

「…カ、カイルだったかな」

確かに名前はそうだったと思い出した直後、師匠が大げさなため息をつく。

「なんでそんな格好してるわけ?」

「…ばれているのか?」

「ばれないと思つてるの?」

思つていた。

「師匠が、おじさんに会いたそつな顔をしていたから」「してない」

「でも寂しそうだつた」

「懐かしんでただけよ」

それから師匠はじつと、私の顔を見上げる。

「似ているだろう?」

「おじさんはそんな間抜けな顔してない」

頑張つてきりつとした表情を作つてみたが、結局笑われただけだつた。

「十分楽しんだから、いつものあんたに戻りなさい」

「でも師匠はこの人が好きだったのだろう? もし望むなら、師匠が好きなこの人の姿のままでいても私は構わない」

「それ本気で言つてる?」

本気だけど、それを選んで欲しくないといつ気持ちもある。

「……師匠が望むなら」

我ながら情けない声しか出なかつた。

それに師匠は呆れたような、けれど嬉しそうにも見える笑顔を浮かべる。

「おじさんは私の初恋なの。素敵な思い出なんだから汚さないでよ」

「汚すつもりは…」

「おじさんのイメージぶちこわじじゃなー。おじさんはもつと格好良くて優しくて素敵だったわ」

だから戻りなさいと怒られて、私は仕方なくこいつもの姿をモザイクした。

「うん、その方が良い」

「…おじさんになれなくて申し訳ない」

「いいのよ。おじさんと同じくらい、あなたの」とも好きだし

「じゃあ結婚してくれるのか?」

「結婚の意味も知らない癖」

確かに映画やテレビではよく見るが、その詳細を把握してはいなかつた。

「勉強しておくれ」

「あなたには、多分理解できないうわよ」

どうやら結婚というのはとても難しい物らしい。それを理解する自信がなかった私は、師匠と共に渋々家へと入った。

## Episode 43 ハスキー・ボイス（後書き）

おじさんの名前に「あれ？」と思つた方へ。

彼と同名のキャラが出てくる小説に設置されている拍手内に、この話の続き（&おじさんの正体）的な小話を隠してみました。開くまで外伝といつかお遊び的なネタですが、気になつた方は探しめてください。

## Episode 44 変わらない

何故だかここ最近、師匠がサラダばかり食べている。いつもそやのようにレタスを発注しすぎたのかと思ったがその気配はない。

理由を聞いても「別に…」しか言つてくれない。

しかし甘い物が大好きな師匠がサラダしか食べないなんて異常だ。私の作ったシェイクを毎日3杯のみ、その上隣の家のケリーが焼いたクッキーを日に10枚は食べていた師匠が3食サラダ漬け。これは魔王であるこの私がレベル1の勇者に負けるのと同じくらいい、あり得ない事態である。

おかしい、絶対におかしい。

そう思つて今朝もじつと師匠を見つめているのだが、彼女はただ黙々とサラダを口に運んでいる。

「…師匠、そろそろ別のものを食べた方が良いのではないか？」

「いいのよ。これ好きなの」

「でも師匠は野菜嫌いではないか」

「好きになつたのよ」

「でも顔色も悪いし、ひどい汗をかいてるぞ」

「あんまり見ないで」

そう言つてサラダを口に運ぶ師匠の手は若干震えている。

これはまずい。絶対にまずい。

「師匠、やつぱり今日はサラダはやめよつ

「でもここで負けたら今までの努力が…」

「何かと争つてゐるなら私が代わる！ 戦いなら得意だ！」

師匠の腕を掴み、私はサラダを遠ざけた。

「誰に勝てばいいのか言つてくれ。師匠のためなら、我が魔力で敵を粉碎してみせる！」

「そういう事じゃなくて」

「遠慮しなくて言い。さあ、私は何を倒せばいい！」

そう言つて詰め寄れば、師匠は顔を赤らめながらうつむいた。

「…」J)れぱっかりは、あんたにも倒せないと思つ

「私は全てを破壊するために生み出された存在だ、レベル1-00の勇者ならともかく、どんな敵でもまけはしない」

「…」だつて、しほうだし

「死亡？」それはつまり、亡者が何かか？」「

じゃなくて、と師匠は自分の腹部を腕でギュウッと押される。

「…最近その、腹回りの脂肪がね」

「ああ、贅肉のことか！」

そこで師匠に殴られた。理由はわからなかつたが一応謝つておいた。

「しかしながらそんな物と戦つているのだ？」

「…私最近太つたでしょ？だからダイエッショウと思つたの」

「あまり変わつたようには見えないが」

「変わつたわよ！ズボンもきつくなつたし、顔もふつくらしてきました」

「でも別に良いと思うぞ。師匠は少し痩せすぎていたからな」

会つたときの師匠は腕も足も棒のように細く、ちゃんと食事を取つているのか心配だつたほどだ。

実際食事を抜くことは良くあつたようだ、3食ちゃんと食べるようになつたのは私と生活を始めてからだといつ。

「でも冬つてただでさえ太りやすいし、あんたスタイル良いくらい隣に立つと嫌でも目立つし」

「なら私が太るつか？」

「やめなさい」

勿体ないと惜しがる理由はわからなかつたが、とにかくダメだと

いつので巨漢に変身するのはやめておいた。

「ともかくあと2キロは落とさないと」

「でもサラダだけはダメだ。嫌いなものばかり食べていたら心まで

「痩せてしまつ」

「だけど嫌なんだもん。クリスマスにはパーティーもあるし、ドレ入らなかつたらまずいし」

「ならドレスを魔法で大きくする」

「でもあんただつて、デブの女より痩せたの方が良いでしょ？」

「私の好みは関係ないだろう。それに、私は健康的な師匠が一番好きだ！」

だからもう辞めようと肩を掴めば、師匠が真っ赤になつて下を向いてしまつた。

「聞いているのか？ 私はいつも師匠が良いと言つてるんだぞ？」

「聞いてるから、何度も言わないでそれ」

「理解していないなら何度も言う。私は楽しそうに食事をする師匠が好きだ、甘い物を食べて幸せそうにしている師匠が好きだ、太ついてても痩せていてもこの想いは変わらな」

「もう良いつてば！」

言葉を切られた上に、拳で殴られた。

「…ダイエットは辞めるから、もうそれ以上言わないで」「本當か？」

再度訪ねると、師匠は小さく頷いた。

「ならさつそく何か作ろう。何が良い？」

「…あんたが作る、ハンバーガー食べたい」「すぐに作る」

「あと、その、パンケーキも……」

「沢山食べると良い！」

「…本当の敵は脂肪じゃなくてあんたね」

笑顔でキッチンに向かつと、師匠が恨めしそうな顔で何かを呟いた。

## Episode 45 好きなもの

「魔王が一番好きな物って何?」  
「師匠だ」  
答えた瞬間、頭を殴られた。  
「真面目に答えなさい」  
「真面目なのが」  
「…じゃあ私以外で」  
「ハンバーガーだな」  
「…できたらそれ以外で」  
「でも、師匠とハンバーガー以外は一番ではないぞ」  
「とりあえず好きな物言って!」  
「どうしたんだ突然」  
「もうすぐクリスマスでしょう。だからほら、プレゼントとか考える時期じゃない」  
「あ、別にいらないぞ」  
そういうと、なぜだか師匠がショックを受けたように動きを止めた。  
「もう頼んであるんだ」  
「誰に!」  
何故だか首を絞められたので、生命の危機を感じた私は慌てて答える。  
「さつサンタさんだ」  
「…そうきたか」  
「つむ、欲しい物は紙に書いて靴下にいれてある」  
「ちなみにその靴下何処?」  
「うちには飾りがないので、隣のケリーの家の靴下に入ってきた」  
私の首から腕を外し、それから師匠は出かけると告げて家を出て行つた。

買い物なら付き合つのにと、誘われなかつたことに拗ねていると  
10分ほどして師匠が帰ってきた。

何故だか師匠の目は真っ赤で、まるで泣いた後のようだった。

「どこか怪我でもしたのか！」

「何でもない」

言うと同時に、何故だか師匠が私を抱きしめる。

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫。…だから、クリスマスの飾り買いに行こう。そしたらサ  
ンタさん、すぐ側にプレゼント持ってきてくれるから」

いつもより優しい師匠は少し怖かつたが、もみの木を飾るのはと  
ても楽しみだ。

「そうだな、あのプレゼントはケリーの家に来ても困る」  
ここに、自分の元に届かなければ意味はない。

「師匠」

「なによ」

「メリークリスマス！」

「……それ、まだ早いから」

## Episode 46 ケーキ

「クリスマスイブの夜、高校でパーティーがあるんだけれど一緒に行かない？」

師匠にそう誘われた瞬間、私は多分5秒ほど気を失っていたと思う。

クリスマスにパーティーがあるのはずいぶん前から知っていた。そしてそこで師匠が歌う事も知っていた。

けれどハロウィン以降「悪い虫がつかないよつに」というよくわからぬ理由で、私はこの手の宴への参加を師匠から拒まれ続けていたのだ。

それでもこのパーティだけは一緒に行きたかった。クリスマスは大事な人と過ごす物だとテレビで見たし、昨日ちらりと見た師匠のドレス姿はうつとりするほど美しかったのだ。

「ねえ、聞ってるの？」

「いいいく！ 勿論行く！ 殺虫剤も沢山買つてあるし問題ない！」

「そんな物よりタキシード買いなさいよ」

悪い虫は良いのかと質問したが、師匠には無視された。

「ともかく明日の夜は絶対開けておいてよ」

絶対を3度ほど繰り返し、そして師匠はリハーサルのために学校へと出かけていった。

一人の家は少し寂しいが、パーティーのためなら我慢できる。

今日からクリスマスまでは店も開けないので暇だったが、師匠と一緒に行けるパーティーのことを考えていると時間はあつという間だ。

だが師匠がいなくなつてから2時間ほど過ぎた頃、突然聞き知つた怒鳴り声が家の外から聞こえてきた。

慌てて窓から外を覗けば、怒鳴り声の出所は向かいの家、つまり我が家がギヤング団のリーダーアルファの家からだつた。

「ママなんて大つきらいだ！」

怒鳴りながら家を飛び出したのはアルファだ。それをアルファのママが追おうとしたが、無駄に足の速いアルファに追いつくのは至難の業だろう。

それを見ていられず、代わりに家を飛び出したのはもちろん私だ。走り去るアルファは道ならぬ道ばかりを選ぶので、私は人様の家の屋根を3つほど飛び越え、雪だるまのイルミネーションが光る家の裏庭で、彼を捕まえた。

「不法侵入で訴えられるぞ」

自分のことを棚に上げてアルファがそう言つので、私は姿を見えなくする魔法をかける。これで話を折られることはあるまい。

「なぜママさんに大嫌いなどと言つた。明日はクリスマスだぞ」「悪い子の所はサンタが来なくなるぞと続ければ、アルファが私をにらみつけた。

「ママがいけないんだ！　ママが約束破るからー！」

「約束？」

「クリスマスは一緒にいらっしゃるって言つのに、仕事が入つたって言うんだ！」

そう言ひながら口への字に曲げるアルファ。この顔は、涙をこらえるときには良くなじめる表情である。

「毎年毎年仕事で、でも今年は一緒にいらっしゃるって言つたのに……」

「確かにそれはママがいけないな。約束は破るべきではない」

「そうだろ！」

「でもああやつて怒鳴つて逃げるのも良くない。約束を破るのがママさんの本意でなかつたとしたら、破つた方もきっと傷ついているはずだ」

僅かな間の後、アルファの視線が下がる。

「……ママも、一緒に過ごしたいって言つてた」

「なら怒鳴つてはダメだ」

「でも嫌だったんだ、クリスマスを一人で過ごすなんて」

「ママさんはいつまで仕事なんだ？」

「明日の夕方からクリスマスの翌日まで」

「ずいぶんと長い。アルファのママは良く海外出張といつのをするから、きっと今度もそうなのだろう。」

「……確かにずっと一人は寂しいな」

「こんな事なら、サンタさんにはテレビゲーム頼んどけば良かった」「頼んだのは別の物なのか？」

「ママと一緒にいられると思つたから、今年はボードゲームにしたんだ」「でも一人じゃ楽しくないと告げるアルファはとてもとても寂しそうで、私はもう見ていられなかった。」

「心の中で師匠にごめんと謝つて、私はアルファの肩に手をかける。「ならば今年は私と過ごそう。そうすれば寂しくないだろ？」「いいの？ 予定あるんじゃないの？」

「リーダーが一人でいるのに、私だけ楽しむ事など出来はしない」「じゃあうちでクリスマスの料理食べよう！ ママがそれだけは作ってくれるって言つてたんだ」「クリスマスの料理とやらは、ハンバーガーより上手いか？」

「そう尋ねればアルファはようやく笑顔になつて、ママの料理がいかに素晴らしいかを語り出した。

そのまま一人で手を繋いで家に帰り、アルファは不機嫌ながらも、ママと仲直りした。なんとか一件落着である。

……がしかし。

そうなると、問題は私だ。

約束を破つたことで師匠が酷く怒るのは予想できる。

それにきっと、師匠との約束を破つた私の所に、サンタさんも来てはくれないだろう。

彼に頼んだプレゼントは物凄く欲しかった物だが仕方がない。そ

れに今はプレゼントより師匠にどう謝るかだ。

殴られたり怒鳴られたりするのは良い。だがもし怒り狂つた師匠に「違う人とパーティーに行く！」なんて言われたらきっと私は立ち直れない。

それだけは回避したい私は、師匠が好きなシェイクを作り、魔法で彼女が食べたいと言つていたケーキを用意して師匠の帰りを待つた。

「ただいま」

そして帰つてきた師匠はそのケーキを見て、そして静かに告げた。

「今日は何したの？」

「まだ何も言つていない」

「あなたが私にケーキ用意する時は、後ろめたいことがあるときでしょ」

さあ白状しろと言われたので、私はアルファの一件を話した。てっきりシェイクを投げられるかと思ったのに、師匠は「何だ」と言つただけだった。

「怒らないのか？」

「他の女の子と約束してたとか言われたら殴ろうと思つたけど」

「でも先にした約束を破つてしまつた」

「ギヤング団の揃その2を言つてみて」

「『友達が困つてるときは必ず助ける』」

「ならあなたのしたことは正しい」

むしろ問題はこのケーキの大きさだと言いながら、師匠はクリームをなめとつた。

そんな彼女を見ていたら何故だか胸が酷く苦しくなつた。

その上、気がつけば師匠に背中から抱きついた。

「ちよつ、何で！」

「わからない。でもこいつしたい」

「こいつしたいってあんた！」「

「…言い訳のように聞こえるかも知れないが、師匠とパーティーに

は行きたかったんだ

「わかつてゐるわよ」

倉庫に殺虫剤積んであつたしと繋ぎながら、師匠はもぞもぞと体を動かし私と向き合つた。

「だから来年一緒に行こう」

「来年も一緒にいて良いのか?」

「いないつもりだつたの?」

「いたい」

そう言つて師匠の髪に顔を埋めれば、師匠が私の頭を優しく撫でてくれる。

「でもその代わり、ひとつ条件」

「何でも聞く」

「パーティ終わつたらすぐ帰つてくるから。だから私も、お子様パーティーに混せて」

「もちろんだ、アルファは師匠のことを尊敬しているし、きっと凄く喜ぶ」

「あなたは喜ばないわけ?」

「勿論嬉しいぞ! 今も涙と一緒に田からゲームが出そつで困つているくらいだ」

「人の肩越しに撃つたら絶交だから」

「出ないように頑張る」

アルファのように口をへの字に曲げて、私は師匠の体に身を寄せた。

## Episode 47 気合い

今夜だけは、何としてでも起きていようと氣合を入れて、私はもう3時間ほど暖炉の前に座っていた。

ちなみに現在の時刻は、夜中の2時である。

「ねえ魔王、もしかしてあんた、アレ待つてるわけ?」「うむ、待つている」

「別に待つて無くとも来るわよ」

「だが、プレゼントを貰つたらお礼を言つのが礼儀であろう」「そう言つ事気にする人じやないって」

「でも本当は謝礼がないことに傷ついているかも知れない」「そんなナイーブでもないわよあのじいさんは」

「だが世界中の人にプレゼントを配つている心優しき老人を置いて、一人休むのは心苦しい」

そう言つて膝を抱えれば、師匠が酷く困った顔で私を見下ろした。「私のことは気にしないでくれ。それより師匠こそ休んだ方が良い」「いや、うん、私も正直さつさと休みたいんだけど」

「ならば休むと良い、私に遠慮はいらないぞ」

そう言つて微笑めば、師匠は何故か照れたよう」「しかたない」とつぶやくと、突然私のパジャマの裾を引いた。

「だからここは私ひとりで……」

「今日、あんたと一緒に寝たいって言つたらどうする?」

その言葉を理解するより前に、何故だか体がかつと熱くなつた。

「どつどつしたのだ師匠! いつもは一緒に寝ようと言つても嫌がるのに!」

「クリスマスだからっていうか、何て言つが……」

「しつしかし私はここで彼を待たねばならないし、それに今日は少し熱っぽくて……」

「あんた、サンタと私どっちが大事なのよ」

「勿論師匠ではあるが」

「寝てくれなきゃ、もう魔王にハンバーガー作んない  
「寝ます」

頷いたのに、何故だか殴られた。

「私の誘いよりハンバーガーか貴様……」

何故怒るのかと尋ねたが無視され、そのままもう一度殴られた。

「ともかく寝るよ、さあ上に行つて！」

と追い立てられれば従う他はない。

だが不思議なことに、追い立てる方の師匠は、踊り場から上にな  
かなか上がつてこない。

「師匠も一緒じゃないのか？」

「お、女には色々準備があるのよ……」

何故だかそれ以上は聞いてはいけない気がしたので、私は師匠の

寝室に入った。

そして師匠も、それからすぐ「いやつてへる。

「準備は終わつたのか？」

「うんまあ、ばっちらり」

「じゃあ寝るか」

そう言つて二人で布団に入つた直後、またもや体が熱を持ち始め  
る。

「師匠……」

「言つておくけど、明日の朝までこの部屋出ちやダメだからね」

「なら空調を下げても良いか、酷く体が熱いのだ」

「むしろ寒くない？」

「どうか、師匠は寒いのか」

「なら我慢すると言えば、師匠が私の額に手を当てた。  
するとまた体が熱くなり、同時に胸も苦しくなる。

「確かにちょっと熱いわね」

「そして息も苦しい」

「もしかしてまた知恵熱？　どんだけプレゼント楽しみにしてんの

よあんた」

師匠は呆れながらも、私のためにアイスバッグを持って来てくれた。

「寒いのにすまない」

「いいわよ別に」

「代わりに私の体で暖を取ると良い」

「それ、本末転倒じゃない」

「でも熱を有効活用できるなら良いだろ?」

そう言つて師匠の体を抱き寄せた直後、体が更に熱くなり、そしてなぜか意識が飛んだ。

次に目を開けると、カーテン越しに朝の光が差し込んでいた。

「すごい、家が違うのにプレゼントきた!」

そして響いたアルファの声にハツとして、私は慌てて階段を駆け下りる。

「昨日は爆睡だつたわねあんた」

そう言つたのは台所で朝食の準備をしていた師匠だ。

「うむ、気がついたら息が止まつていて、そのまま死んだように眠つてしまつたらしい」

物凄く不安そうな顔で師匠に見つめられたが、今はそれよりプレゼントである。

ボードゲームを前にはしゃぐアルファの横で、私は靴下に手を入れた。

「入つている!」

興奮して腕を引き抜けば、手の中には小さな紙が一枚入つていた。それを手に、私が駆け寄つたのは台所に立つ師匠の所だ。

「師匠、プレゼントが来た」

「聞こえてるわよ」

「これで、師匠は幸せになれるぞ」

私が頼んだプレゼントを差し出せば、彼女は嬉しいような困ったような顔で笑う。

「サンタさんには、師匠が幸せになれるチケットを頼んだんだ。これがあれば、もう悲しいことはきっと無くなる」

そう言つて差し出したのに、何故だか師匠は泣いていた。

「すっすまない師匠！ サンタさんがチケットを間違えてしまったようだ」

「間違えてない」

「本当か？」

うれし涙だと師匠は言つので、ひとまず安心する。

「でも本当に良いの？ 」いうことは、自分が欲しい物を頼む物なのよ」

「良いんだ。だってこれは、私が心から欲しかった物だ」

なによりも一番に。

そう告げると、師匠の目から新しい涙が溢れた。

「本当にうれし涙か？ それにしては酷い顔だぞ？」

言つと同時に殴られたが、その威力はいつもより弱い。

その上涙を拭つた師匠は、私が渡したチケットに似た紙をポケットからとりだした。

「嬉しかったのは本当。だからお礼に、これあげる」

あんたへのクリスマスプレゼント。

そう言つて手渡された物はサンタから貰つたチケットによく似ていた。

「すごい、何でもひとつ願いが叶うと書いてある！」

「ただし願いを叶えるのは私だから、常識の範囲内にしてよ」

「師匠とずっと一緒にいたいといつのは、常識の範囲内か？」

尋ねた途端、師匠が惚けた顔で私を見上げた。

「だめか？」

「いや、その、あんたのことだからハンバーガーを死ぬほど食べた」とかそう言つことかといふことかと

「ハンバーガーより、師匠といられる方がいい」

惚けた顔から慌てた顔になり、師匠の目が再び潤んだ。

「やつやはりだめか？　ずっと嫌か？」

「嫌じゃないけど…」

良かつたと胸をなで下ろして、それから私はハツとする。

「そうだ、私からも師匠にプレゼントがあるんだ！」

クリスマスツリーの下に置いてあると告げると、師匠は怪訝な顔をする。

「このチケットじゃないの？」

「もつと、もつともつと良い物だ」

何故だか師匠がとてつもなく不安そうな顔をした。

それに異を唱えようとした直後、リビングでアルファが物凄い悲鳴を上げる。

何事かと思い、私はリビングに戻ろうとした。

だがそれを、師匠が物凄い力で引き留める。

「あなたのプレゼントって何！」

「それは開けてからのお楽しみなんだが

「良いから白状しなさい」

そう言つ師匠の顔が物凄く怖かつたので、私は渋々白状する。

「わつ私の心臓だ。前は拒絶されたが、やはり師匠には長生きして欲しいと思つて」

「今すぐ体に戻せ！」

その声と顔のあまりの恐ろしさに、私は急いでリビングに戻った。

## Episode 48 ドライブ

『今年の目標は、愛しのダーリンとのドライブデート』と書かれた師匠の日記を見つけたのは、ダイナーのレジカウンターの奥からだつた。

今日は今年最後の営業で、私と師匠は閉店と同時に、店の大掃除に取りかかっていた。

そのさなか、帳簿や発注伝票が押し込められたカウンターの中から、私はそれを見つけたのだ。

「師匠」

「何？」

「師匠の今年の目標と去年の愚痴が書かれた日記帳を見つけたのが、これは取つておくのか？」

その直後、師匠が物凄い勢いで私の手から日記を奪つた。

「あんたまさか、中見た？」

「師匠が今年の目標の覧に、超格好いい男とドライブデートがしたい（できたら車の中で裸を見たい）と書いてある部分は読んだ」

直後、師匠のごぶしが顔面にめり込んだ。

「女の子の日記を読むなんて最低！」

「日記だとは知らなかつたんだ」

そう言いつつ日記を渡せば、師匠は中をペラペラとめぐりつつ、ついでに足取りで奥のカウンター席に移動する。ページをめくるたびに恥ずかしそうに頭を抱える師匠はとても可愛くて、私も彼女の向かいの席に座つた。

「……あんたは掃除してなさいよ」

「少しだけこうしたい」

ダメかと尋ねると、師匠は顔を赤らめたまま好きにしなさいと言いい放つ。

「しかし、やうしてみると師匠はまだ子どもっぽいな」

「どういう意味よ……」

「最近、ケリーがよく言うのだ。師匠は、ここ数ヶ月で急に大人になつたと」

前はもつと落ち着きがなくて、男も取つ替え引っ替えで、柄も態度も悪くかつたと、ケリーは勿論近所の人たちも言つていた告げれば、師匠はふくれ面を日記で隠す。

「私も若かったというか、色々あつたのよ」

「たしかに、日記の師匠はとてもハイテンションだな」  
その上ふしだらだと告げれば、師匠は肩を落とした。

「幻滅したなら素直に言ひなさいよ」

「なぜ幻滅すると思うのだ？」

本心からそう言つと、何故か尋ねた師匠の方が困った顔をした。

「ケリーが言つていたのだ。18の少女というのは皆ふしだらな物だと」

逆にそれが普通であるなら、幻滅するどころか心配なくらいである。

「我慢していると言つことはないか？ 本当はもつとふしだらな事をしたいのではないのか？」

「ふしだらの意味、わかつていないのでしょあんた」

「素行が悪いことだろ？」

「うんまあ、そりなんだけど」

日記を閉じて、師匠はそれを脇へ追いやつた。

「私は今の自分が好きなの。だからその、ふしだらなことは卒業したの」

「そうなのか」

「そうなの」

「ならない。でももし、ふしだらに戻りたいなら言ってくれ。全力で手伝うから」

「……うん、ありがとう」

若干怪訝そうな顔だったが、師匠が落ち着いたようなので、私は

掃除に戻ることにした。

だが席から立ち上がった私の手を、師匠が突然掴む。

「どうした？ やはりふしだらなことをするのか」

違うと怒鳴つた後、師匠は赤い顔のまま、上目遣いに私を伺う。

「実はその、あんたが読んだ今年の目標、まだ叶って無くてさ」

「それはつまり、車の中で裸になりたいと言つことか？」

「それは良いの！ ただドライブデートがしたいの！」

言つてから、何故だか師匠は悔しそうに顔をゆがめる。

「今年は男運悪くて、そう言うの全然出来なかつたの……。だから

明日とか、あんたが暇ならどうかなつて」

「暇だからいいぞ」

「……その返事、何か微妙」

「ふしだらでもいいぞ」

「……もう、いいや」

どうやら私は師匠の期待を裏切つてしまつたらしい。

「悪い所があつたのなら言つてくれ、修正する」

「ううん、私が勝手に色々期待しただけだから良いの」

「その期待に応えたいのだ！」

結局師匠は何も教えてくれなかつたが、もしかしたら師匠はふしだらなことをしたいのかも知れない。

ならば期待に応えるのが私のつとめであろう。

超はつかないかもしれないが、いちおう人からは褒められる顔だ。少々寒いが、明日のドライブでは裸になるべきであろう。

「明日は、脱ぎやすい服にしよう

そう決意して、私は掃除に戻つた。

でも勿論これは師匠には秘密だ。その方が、きっと師匠も喜んでくれるはずである。

## Episode 49 愛犬

ドライブデートをしてから、師匠と一緒に寝てくれなくなつた。どうやら私は何か思い違いをしていたらしく、師匠を酷く怒らせてしまったのである。

「今日も、だめか？」

「だめ」

「久しぶりにジェイソンさんを見て、酷く怖いのだが」

「だめ」

「床で寝るのもだめか」

「だめ」

そう言つて師匠は部屋に入つてしまつた。しかし怖い物は怖い。仕方なく、私は枕と毛布をかかえて師匠の寝室の扉の前に座つた。一緒にやなくても、少しでも近い方が怖くない気がしたのだ。だが問題は廊下が酷く冷えることだ。

毛布は持つてきた物のそれでも酷く凍えるので、私は体を丸め、師匠の部屋の扉にぴたりと体を近付ける。

しかしそれでもまだ寒かつたので、せめて想像だけでもと師匠と一緒に寝ている自分を想像した。

師匠は柔らかくてとても暖かい。くつこっていると凄くほかほかするのだ。

その温もりを思い出していると、突然師匠の部屋の扉が開いた。

「……お前は犬か」

丸まつている私を見下ろす師匠の顔は、酷く呆れていた。

「怒らないでくれ！ 私は少しでも師匠と距離の近いところにいたいのだ！」

慌てて弁解したが、どうやら師匠は怒つているわけではなかつたらしい。

「中入りなさい。そこ寒いでしょ」「

「寒かつたが、師匠の側にいる時のことを想像したら大分マシになつた」

「それはあれなの、あんたなりの欲情と取つて良いの？」

「浴場？」

「うん、もう良いや」

最近師匠は、私について色々と諦めた顔をする。それが凄く嫌なのが、せつかく一緒に寝てくれるといつて、ここで機嫌を損ねるわけにはいかない。

「床の方が良いか？」

「隣でいい」

思わず喜んで、私は師匠の隣に潜り込む。

「冷たいわね、さすがに」

「すまない。今日はくつつかないようになります」

「いいわよ、ほら

許可が出たので、私は師匠の体を抱き寄せれる。

「やつぱり、師匠の側が良いな」

暖かいし、柔らかいし、良いにおいがすると言つたら足の裏ですねを思い切り蹴られた。

「そう言つこと、お願ひだから口にしないで」

「だつて事実だ。何なら試してみるか？」

師匠に変身してみせようと提案したら、またもやすねを蹴られた。

「やつたらたたき出すわよ」

それは嫌なので、急いで頷いた。

「なら静かに寝なさい」

「そうだ師匠」

「なんだ？」

「最近キスもおあづけだったからしたい」

アホかという顔で見られたが、それでもお願いすると泣々〇〇がでた。

「……なんかもう、あんたって本当に犬よね」

「ならキスより嘗めた方が良いか？」

そう言えば舌を使うキスもあると、チャーリーが教えてくれたのを思い出す。

やり方はビデオで見た通りだが、運良く師匠が惚けた顔で口を開けていたので、私は舌を使つたキスをしてみた。

なんだか、これは、凄く不思議な感じのキスだ。

普通のキス以上に何度もしたくなるし、師匠の舌に触れると体が燃えるように熱くなる。

とはいえた呼吸をしなくても生きていける私と違い、師匠は人間なので延々キスしているわけにも行かない。

名残惜しいが仕方なく唇を離せば、今度は師匠が同じキスを私にしてくれる。

体が熱くなり、思わず師匠の体を強く抱き寄せた。

とはいえた本気で抱き寄せるといふ師匠の体が壊れてしまうので、その所は考慮する。

壊してしまいたいという恐ろしい考えが頭をよぎったが、私はもう悪い魔王は卒業したのだ。

今の自分は師匠の犬だと僅かに残つた悪い魔王に言い聞かせていると、もう一度唇が離れ、師匠がギュッと私の体に腕を回す。

「……し…しよう？」

「眉間に皺寄つてゐるけど、嫌だつた？」

「むしろ、このキスは凄く良いな」

そう言つと、師匠は躊躇いガチにもう一回するかと尋ねてきた。  
「1回どじろか何万回もしたい」

「それは、色々な意味で死ぬ」

「確かに、師匠には呼吸も必要だな」

「もしかしながら、あんた呼吸しないの？」

「つむ、だからずつとキスしていくても死なないぞ」

「意外と、狼の素質あるのね」

「狼？ 犬ではなく？」

「独り言だから気にしないで」

狼のようなキスとはどういう物だらうかと考えたが、やはり同じ舌を使ったキスしか思い浮かばなかつた。

今度、そのような物があるのかチャーリーに聞いてみよう。

## Episode 50 仲間入り

その日、私と師匠はディナーから初日の出という物を見ていた。この世界では年の移りかわりは喜ぶべき事らしく、昨日は夕方から馴染みの常連客や近所の人たちを家に呼んでパーティーをしていた。

だが明け方前に突然、師匠が一人で朝日を見たいと言い出したのだ。

「別に今日でなくとも、朝日は毎日登るぞ？」

「でも今日は特別なの」

その上静かな場所で、それも一人きりで見たいと師匠は言う。特別な日である所為か、そう言う師匠は凄く可愛らしく見えて、私は急いで車を飛ばし、このディナーまで来たのだ。

「師匠」

「何？」

「年が変わつても、朝日の上り方や輝きは同じなんだな」

「普通は変わらないわよ」

「私のいた世界では良く変わるぞ」

「じゃあこの世界の朝日はつまらないかもね」

窓際のボックス席に一人で寄り添うように座り、眺めた朝日は確かにいつもと同じだ。

しかしだからこそ、美しいと私は思う。

「でも今日は元旦だし、特別って感じがしない？」

「私にとつては毎日が特別だ」

「大げさね」

「大げさではない。この世界は見る物全てが美しく、そして私を満たしてくれる」

中でも師匠がと告げると、彼女は私の腕の中でぐすぐつたそうに笑った。

「あんたを満たしてるのは、私じゃなくて私の作るハンバーガーでしょう」

「そう言われるとハンバーガーが食べたくないつてくるな」

「材料持ってきたから、作ろうか」

「いいのか？」

「私が今年最初に作るハンバーガー、食べたくない？」

食べたいと声を上げれば、師匠が笑顔で厨房に入つていいく。

本当に私は幸せ者だ。むしろ魔王なのに幸せになつて申し訳ないくらいである。

そう思いつつ、せつかなので自分も飲み物を作ろうとしたとき、私は朝日を背にこちらへと歩いてくる人影があることに気がついた。こんな早朝に、荒野を徒步で横断するなど無謀だ。そのうえ近づいてくる人影をよく見ると、何とそれは老人だつた。

無謀どころか自殺行為である。

私があわてて外に駆け出すると、老人は私の目の前で力尽きてしまつた。

倒れる老人を抱き起こし、私は彼に声をかける。

弱々しく目を開ける老人。それに私はホッとしたが、何故だか老人は私を見て驚愕の表情を浮かべた。

その上老人は持っていた剣で私の腕を切り裂いた。痛みと、そしてこの世界では馴染みのない老人の武器には覚えがある。

「何故貴様が生きている！」

死んだようだつた老人は立ち上がり、剣を構えて私から距離を取つた。

「……まさか、貴方は勇者か？」

「年は取つたが、まだ現役じゃ！」

足は子鹿のようにふるふる震えているし、剣を持つ腕は木の枝よりも細かつたが、確かに纏う魔力は勇者のそれである。

それに気付いた瞬間、私は絶望した。

やはり全ては仮初めの幸せだったのだ。私は勇者に滅ぼされる運

命からは逃れられない。

「私を殺しに来たのか」

「…そんなところだ」

剣を向けられただけで、奪われていく私の魔力。

やはり老いていても、立ち方が子鹿でも老人は勇者だった。

心の中に「我を解き放て」と絶叫する魔剣の声が聞こえたが、ここで聖剣と魔剣が打ち合えばダイナーがタダではすまない。

それだけは、師匠と師匠のダイナーが傷つくことだけはあつてはならない。

「覚悟しろ、魔王！」

「覚悟なんてどうの昔に出来ている。やるならすぐに殺せ、だがそこの店とその亭主だけは決して傷つけるな」

「お前の配下か？」

「関係のない人間だ」

師匠に危害が及ばぬよう、操っていたと嘘をつけば勇者は信じたようだった。

「ならば死ぬのはお主だけだ！」

勇者が剣を振り上げると、その美しき白銀の刃が朝日を浴びて赤く輝く。

この美しき光に斬られるなら悪くない。

そう思いながら私は口を開じ、そのときを待つた。

……だが、直後に響いたのは骨と肉を断ち切る音ではなく、酷く重い衝撃音である。

一向に訪れない痛みを怪訝に重い、私は恐る恐る口を開ける。

するとそこには、フライパンを手にした師匠と、その前に倒れている勇者の姿があった。

「魔王、すぐ警察に連絡！」

ただ者ではないと思っていたが、まさか勇者を倒すほど実力があるとは驚きである。むしろ少し恐ろしいくらいである。

「こんな長い刃物で押しかけるなんて、最近の強盗は本当に油斷で

きないわ！」

「わ、私も剣は持っているぞ」

そう言つ意味じゃないと言いながら、師匠は常人には触れられないと聖剣を、勇者の手から蹴り飛ばした。

「とりあえず縛ろう」

「しつ縛るのか？」

「だつて警察に引き渡さないと」

「警察はまずい！ この人は犯罪者ではなく正義の味方なのだ！」

それどころか勇者だと言えば、師匠の表情が僅かに変わる。

「バカ言わないでよ、どう見ても強盗じゃない」

だが納得したとは言い難いようだ。

「見えなくとも勇者なんだ」

「よく見えても浮浪者でしょ」

「それでも勇者なんだ」

「それにこの人何か臭いし」

「伝説の鎧というのは、一度着たら脱いではいけない決まりがあるらしい」

そう告げれば、師匠は今更のように彼の纏つ伝説の鎧に気付いて驚いた。

「……縄で縛るのあなたの仕事だから」

だがそれでもなお、師匠の決意は揺るがないようだった。

「やはり縛るのか？ 何度も言つようだが、正義の味方なのだとぞ」

「お風呂に入らない奴に正義を語る資格はない」

言い切る師匠の顔があまりに怖かつたので、私は慌てて縄を探しに行つた。

あと、これからは毎日ちゃんとお風呂に入らうと思つた。

## Another Episode 5

「これって正当防衛だから罪にならない」と

Episode 5 脳匠視点

勇者。

その名前は魔王から何度も聞いていた。

魔王を倒す者。世界の救世主。平和の使者。

そう語られるたびに、私は怖かつた。魔王はこんなにバカで、アホで、優しいのに、少なくとも彼の世界では悪い奴で、そしてこの勇者に殺されたのだ。

多分彼がいなくなつたら、私は一人では生きていけない。彼は気付いていないかも知れないが、それほどまでに私にとつて魔王の存在は大きいのだ。

だからもし勇者が現れたらと考へ、眠れない夜さえあつた。  
……なのに。

「縄をほどけ魔王の手先よ！ わしを誰だと心得る、メルトキオノ第56代救世主にして、伝説の勇者なのだぞ！」

ずっと恐ろしいと思つていたそれは、魔王同様頭のネジが緩んだ汚いじいさんだつた。

「魔王、やつぱり警察に引き渡そうよ」

「しかし勇者が魔王を斬りつけるのは当たり前のこと、罪ではない」「あなたの世界じゃそうかも知れないけど、ここでは罪のない人を傷つけちゃダメなの」

「私は罪人だ」

「ここでは悪いことはして無いじゃない」

「存在その物が罪なのだ」

「それもあんたの世界での話でしょ。この世界じゃ命は皆平等、良い存在も悪い存在もない」

私の言葉に不思議そうな顔をしていたのは、魔王だけではなかつた。

「魔王の存在を許す世界か……実際に興味深いな」

「つていうか、そもそも魔王なんていないの！」じいちゃん

魔法も何もないと説明すれば、じいちゃんがいつたという顔で頷く。

「通りでこの世界には魔法を使わない兵器が沢山あるわけだ」まるでこの世界を知った風だったのが気になつて、私は勇者の襟首を摑む。後で絶対手を洗わないと。

「あんた本当に勇者なの？ 自分を勇者だと思つている頭のおかしなじいさんつてことない？」

「失敬な！私はメルトキオの……」

「それはもういい」

「信じていらないな娘よ！」

信じると言つ方が難しい。だつて魔王が語つた勇者は、こんな頭が固そうなじいさんではなかつた。

「ならば我が家、特と見るがよい」

唐突に、じいさんの表情が変わつた。

同時にやたら訳のわからない言葉を叫ぶと、じいさんの少ない髪の毛がふわりと浮き上がり、天に向かつて逆立つ。

こういつ、髪の毛が逆立つ日本のアニメを見たことがあるなど場違いな事を考えていたとき、あの貧相なじいさんが、体を縛る縄を引きちぎつた。

たしかに、これは凄いかも知れない。

「驚くのはまだ早い。さあ伝説の聖剣よ、我が元にきたれ！」

以前魔王が魔剣を呼び出したときのように、じいさんの手に現れる聖剣。その途端、魔王が苦しそうに胸を押された。

「どうしたの！」

「アレは我が命を絶つ唯一の聖剣。側にあるだけで命を吸い取られるのだ」

それは困る。魔王には、まだ死んで欲しくない。

「今度こそ、貴様を殺してやるつ！」

だが幸運なことに、このじいさんはひとつのこと集中すると周

りが見えなくなるらしい。

私は念のため側に置いておいたフライパンを取り、じいさんの後ろへと回り込む。

「ていつ！」

あつけなく、あまりにあつけなくじいさんの頭にフライパンが直撃した。

先ほどより若干強く叩いたせいか、フライパンには少し血が付いていた。

「勇者殿、生きておられるか？」

殺されかけたといふのに、人が良い魔王は勇者を心配そうにゆすつていて。

しかし勇者からの返事がない。これは屍になってしまったかもしない。

「これって正当防衛だから罪にならないよね？」

さすがに牢屋には入りたくないなと思つていると、勇者が僅かに動いた。

「大丈夫そうだが、病院に連れて行つた方が良いかも知れない」「そうね。でもちょっと待つて」

じいさんの手にある聖剣を取り、私はそれを肩に担ぐ。

「魔王を唯一殺せる剣、そう言つたわね」

「これだけが我が命を絶てる」

「なら、これは処分しないと」

怪訝な顔をする魔王の前で、私は剣を持って店の前にある大きな岩の前に立つた。

「師匠、何をするつもりだ？」

「剣つて意外と折れやすいって世界史の先生が言つてたの」

岩に刃を叩き付けると、伝説の聖剣はあまりにあつけなくぼつきり折れた。

その途端、青ざめていた魔王の顔がいつもの色に戻る。

「聖剣を折るとは、師匠はやはりただ者ではないな」

「たかが剣じゃない。でも念のため、これもとかした方が良いから」

「既に魔力はない、それはタダの剣だ」

「なら穴掘つて埋めておいて」

「しかし勇者殿が酷く落胆するのではないか？ それに土の中ですと過ごすの可哀想だ」

聖剣にまで同情する魔王を見ていると、やはり彼が悪人には見えない。

勿論目からビームが出たり、変な魔法を使うのは普通ではないが、普通でないことを悪といつならあのじいさんだつて十分悪人だ。

「ねえ魔王…」

「どうしたのだ改まつて」

「何で魔王は、魔王なの？」

その質問は、今までに何度も聞いたとした物。

けれど彼の事を深く知つたら、お互いの間に大きな溝が出来てしまつ気がして、私はずっとその質問を飲み込み続けてきたのだ。

「もちろん、魔王として生まれたからだ」

しかし私の覚悟に対し、その回答はあまりに間抜けだった。

「あんたねえ！」

「だつて私は生まれたときから魔王なのだ。故に魔王であることを疑問に思つたことがなく、誰かに何故と尋ねたこともなかつたから、どう答えて良いかわからない」

「生まれたときから魔王つて、つまり赤ちゃんの時からつて事？」

「いや私に幼少期はない。先代の魔王が勇者に倒された時、私はその模造品として製造された」

王とつくくらいだから、血筋的な関係で魔王をやつしているのかと思つたが、どうやら事情は少し複雑らしい。

しかし幼少期がないというのはなんだか納得がいった。

多分魔王は見た目よりも年を重ねていない。頭が空っぽだつたり子どもっぽかつたりするのは、きっとその所為だらう。

「親から位を受け継ぐとか、そう言ひ事じやないのね」

「魔王は消耗品だからな。子をなす前に勇者に倒されることが多く、その血筋はずいぶん前に途絶えてしまつてゐる。けれど私達の世界は憎しみを糧に回つてゐるらしく、人々の憎しみを産む魔王は無くてはならないらしい」

「だから作られたつて事?」

「そうだ。魔王が人々の憎しみを生み、憎しみが多くの……何千万という勇者を生む。その勇者の活動を支えるために職が生まれ、そうして人々の社会は回つていると私を生み出した者達は言つていた」

「それはたぶん、戦争をすると社会が潤うのと同じような原理なのだろう。

しかし残念ながら、私は社会や政治経済の授業は常に赤点。魔王の言葉から彼の世界の詳細を想像するだけの知恵を持たない。

だがそれでも彼の世界が歪んでいることは何となくわかる。

そしてそんな歪んだ世界に生まれ、それを疑問に思う間もなく死んだ魔王が、私は哀れでならなかつた。

だから今度は、この世界では、勇者なんかに殺させたくない。

「安心して。あんたはもう魔王じゃなくてうちの店員、理不尽な理由で殺されたりはしないから」

決意を言葉にしながら魔王を見つめると、彼は魔王らしからぬ暖かい笑顔を私に向けた。

「殺される理由は、師匠がへし折つてしまつたしな」

「しかし見事に折れたな」

「安心した?」

「心配している。勇者殿が落ち込まないかと」

「本当に人が良すぎる。」

「でもだからこそ、私は彼が好きなのだろう。」

「目からビームを出したり羽が生えたりした時点でおかしいとは思

つていたが、正直製造されたと言う言葉は衝撃だつた。

けれどこの笑顔を見ているとそんなことはどうでも良くなる。

だつて私を救つてくれたのは、この間の抜けた笑顔に他ならないのだから。

「そんなに氣になるなら直してあげれば？ 中にガムテープあるし」  
そうすれば腰には差せるといつと、魔王は良いアイディアだと笑つて店に戻つていく。

冗談のつもりだつたし、たぶんガムテープの巻かれた剣を渡された方がじいさんは傷つくと思つたが、あえて私は止めなかつた。  
私の今までの不安と、そして魔王の一生を思えば、それくらいの嫌がらせは当然だ。

「師匠、ガムテープが見つからないのだが何処にあるのだ」

そう言つて手を振る魔王に苦笑して、私は店へと戻る。

ふと店内を見回すと、相変わらず勇者は死んだまつた。

そう言えば魔王は無一文だつたが、この人お金を持っているのだろうか。

保険に入つてているとは到底思えないし、怪我は思いの外大きそくなので治療費も高くつくだろう。

いつそ殺しておいた方が楽だつたかも知れない。

そう思う自分がよっぽど悪人だと思いつつ、私は治療費を確保するためレジスターを開けた。

## Episode 51 オフショット

今朝もまた、我が家には罵声が飛び交っている。

原因は先日ひょっこり現れた勇者殿と、それを家に泊めたいと申し出た私だった。

行くところも帰る術もないという勇者殿が放つておけず、師匠に無理を言って家に置いて貰つたのだが、残念な事に師匠と勇者殿はあまり相性が良くないうのだ。

その上勇者殿は師匠に殺されかけたことを根に持つており、師匠は勇者殿が私を殺したことを持っています。別にどちらも大したことではないと思うのだが、一人はそうは思えないらしい。

それ故、二人は事あるごとに喧嘩をしているのだ。それも割と些細なことで。

「わしは田玉焼きの黄身は堅い方が好きなんじや！」

「だつたら自分で作りなさいよ！」

「わしは勇者だぞ！ 料理などはせぬ！」

「じゃあ文句言わずに食べて！」

「こんなグジュグジュの黄身は嫌、じゃー！」

そんなやり取りを聞きながらリビングに顔を出せば、勇者殿の投げた目玉焼きが師匠の顔にぶち当たるところだった。

これはまずい。非常にまずい。

そう思つて師匠を羽交い締めにすれば、彼女は手にしていた熱々のフライパンを振りまわしながらあいつを殺すと喚いている。

さすがの勇者殿も、師匠のフライパンの恐ろしさを知つてはいる故この場は引き下がつたが、やはりこれはまずい。

このままでは、師匠が勇者を殺すのは時間の問題だらう。

勇者殿を家に置いて欲しいと言つたのは私だ。ならば一人の仲を取り持つのは、私の義務。

それに全ての諍いの根っこにあるのは、私と勇者殿の間に横たわる深い溝だ。

これを無くし彼の警戒心が解ければ、師匠にも優しく接して貰えるかもしない。

そう決意した私は、師匠が寝静まつた深夜、勇者と語らいの時間を持つことにした。

「まあ、とりあえず飲んでくれ」

まずは仲直りの印にとシェイクを差し出すと、勇者はそれを怪訝な顔で見た。

「毒入りか?」「

「いや、バナナとアイスクリームとミルクが入つていて」

真面目に答えると、勇者殿は酷く怪訝そうな顔で私を見つめた。

「貴様、以前と雰囲気がずいぶん変わったな」

「師匠のお陰だ。彼女が、私を変えてくれた」

「魔王が人の女に惚れるなんてあり得ん」

「惚れてはいない、好きただけだ」

「惚れるのと好きは同じだぞ」

「そうなのか?」

それは是非詳細を聞かねばと思ったが、何故だか勇者殿は不機嫌な表情になってしまった。

「私に聞くな。お前の所為で、恋には縁がない人生だったんだ」

「もしかして独り身なのか? それは寂しいな」

「お前に言われたくない!」

ドンと机を叩き、勇者は悔しそうに頭を抱える。

やはり、勇者と私の間の溝を埋めるのは簡単ではないようだ。  
しかたなく、私は考えを改めた。

私を好きになつて貰うのは無理だが、彼に師匠の良さを知つて貰う事なら出来ると思つたのだ。

「私を恨むのはわかる。しかし師匠にはあまり当たらないでくれ」

「あの小娘は礼儀がなつていない! わしは勇者なのに、敬おうと

もしない！」

「彼女は肩書きや立場で人を計らない。しかしそこが、彼女の良さだ」

その後も師匠の良さを語つては見たが、残念ながら勇者殿の心にはあまり響いていないらしい。

「こうなれば、語るより見せた方が良いだろ？」

「魔王が好きになるほどの女性だ、心を開けばきっと貴方も好きになる」

そう言つて私が勇者の前に広げたのは、私がコレクションしている師匠の写真だ。

「今度は何だ？」

「師匠がどれくらい可愛くて素敵か貴方に知つて貰おうと思つて」「さつきの褒め殺しもそうだが、これはのろけか！ 貴様ののろけか！」

のろけがなんだかはよくわからなかつたが、尋ねても勇者殿は答えてくれなかつた。

なので仕方なく、写真の中でも特に写りが良い物選んで、私はそれを差し出す。

「自然な笑顔が素敵だろ？ 友人に隠し撮りのやり方を教わつて、こんなに綺麗に撮れるようになつたのだ」

オフショットという奴だと胸を張つたとき、突然勇者が一枚の写真に目をとめた。

「うつ美しい！」

「そうだろう」

「ちがう、こちらのご婦人だ！」

そう言つて勇者が指したのは、師匠と並んで写つてているケリーである。

「彼女は隣の家にすむ私の友人だ。私と師匠のことを子どものように可愛がってくれている」

「魔王を子どものように……なんてお人だ……」

「良かつたら明日会いに行くか？ 丁度クッキーをもらひに行く日なんだ」

「まつ、魔王の手など借りぬ！」

「なら玄関の横にある小さなボタンを押すと良いぞ、それを押すとケリーが出てきてくれる」

「ドアベルくらい私の世界にある！」

「そうなのか？ 私の城にはなかつたから、てつきりこの世界の物だと思っていた」

どうやら私は、想像以上に私の世界のことを知らないらしい。

「そうだ、良ければ元の世界のことを聞かせてくれ！ 師匠や友人達に色々質問されるのだが、私には答えられないのだ」

そう言つと、何故だか勇者はとても悲しげな顔で私を見た。

「ダメか？」

それでも頼めば、勇者は降参だと手を擧げる

「花屋の場所を教えるなら、考えよう」

出された交換条件に、私は大きく頷いた。

そして私は、勇者の家がどんな作りであるかを知った。

師匠に家には劣るが、とても住みやすそうな家であると告げると、「お前のお陰でわしは金持ちだからな」と勇者は得意げに笑つた。彼の役に立てたのなら、私の死も無駄ではなかつたのだろう。それが嬉しくて、バナナシェイクにホイップクリームを足せば、勇者はようやく口を付けてくれた。

「美味しいな」

その言葉は、なんだか私の心をとても温かくしてくれた。

それが嬉しくて微笑んでいると、勇者もほんの少しだけ笑つてくれる。

だがそこに、タイミングが悪く師匠が起きてきてしまった。

「二人で何か企んでるの？」

多分冗談のつもりで言つた言葉なのだろう。しかしそうとも知らない勇者殿は、またしてもけんか腰な否定の言葉をぶつけてしまう。

お陰でまたもや一人は口論を始め、何故だか最後は私が手ひびく殴られた。

前途多難である。

## Episode 52 協力

勇者殿がこちらの世界に来て早1週間。

しかし残念ながら、相変わらず師匠と勇者殿の溝は埋まらない。もはや一人の喧嘩は、毎日の恒例行事になってしまっている。

「もう限界、もう耐えられない……。すぐ、今すぐその鎧を脱いで風呂に入つて！」

「敵前で防具を外せといつのか貴様！ これだけは、この鎧だけは死んでも脱がぬ！」

「じゃあ今日こそ出でつてよー。」

「元々長居をするつもりはない！ 魔王の首をくれるなら今すぐ出て行つてやるー。」

「とか言つて、ここ一週間はテレビ見ながら『ロロロ』ばかりじゃない！」

「そつそれは聖剣が折れてしまったから仕方なく…」

「当初の目的を忘れて、うつかり恋愛ドラマにハマッてるの知ってるんだからね！」

「はまつてなどいない、私はただ参考に……」

「ついでに言つと、ケリーお婆ちゃんに片思心中なのも、相手にされないのも知つてゐるんだからー！」

そしてこの日も、師匠の一言によつて喧嘩は終わりを迎える。魔王を倒すほどの実力を持つ勇者殿であつても、やはり師匠には叶わない。

今のところ口げんかは勇者殿の全敗で、そのたびに彼は悔しそうに顔をゆがめるのだ。

そしていつもなら、彼は泣きそうな顔で師匠を睨んだ後、意地になつてバトルームに立てこもる。

だが今日は、最愛のケリーの名を出されて相当悔しかったのだろう。

ついに勇者殿は全てのプライドをかなぐり捨て、私を見たのだ。

「協力しろ」という眼差しで。

勇者殿に助力を求められた魔王は、きっと私が初めてだろ？。これは非常に光栄なことである。

「いくら何でも今のは酷い。勇者殿の恋は本気なのだ」

「なによ、あんたもこいつの味方なわけ！」

「たしかに勇者殿の二オイは最悪だ。何せあのケリーが死んでも近づきたくないと言つほどだ。だが聖剣が折れた今、勇者殿のアイデントイティーはある臭くて汚い鎧だけなのだ」

私がそう言うと、勇者殿が息をのんだ。

たぶん助けを求めつつも、魔王である私が、自分のフォローをするとは思つていなかつたのだろう。

「私にとって師匠が無くてはならない存在であるように、勇者殿にはあの鎧が必要なのだ。命より大切で常に側に置きたい物なのだ。その所為で周囲の人間全てから『絶対近づきたくない』と思われても構わないほどに」

その後もある鎧の大切さを熱く語れば、ついに師匠が「本当に大切な仕方ない」と折れた。

勇者殿でも勝てない師匠に勝てた。

その事実に私は誰よりも驚き、そして勇者殿と共に勝利の喜びを分かち合おうとした。

だが振り返つたそこに、勇者殿の姿はなかつた。

かわりに、いつの間にかバスルームの扉が閉じている。

「せつかく師匠の許しが出たのに、勇者殿はまた籠もつてしまつたのか？」

「あんたのお陰で現実が見えたんでしょう」

どういう意味だと尋ねた私の肩を叩き、「協力ありがとう」と師匠が笑う。

私が協力したのは勇者殿のはずだったのに、何故師匠は礼を言つただろうか。

やつ考えていると、ズレからりともなく石鹼の香りが漂ってきた。  
そこで私ははたと気付く。

もし勇者殿が帰つてきたら、体臭を石鹼に香りに変える魔法を使おう。そうすればきっと、師匠もケリーも彼のニオイに顔をしかめることはない。

我ながら良い案が思いついたと喜びつつ、私は勇者殿が出てくるのを待つことにした。

さつとこれで、勇者殿も私を見直してくれる一ことだらう。

## Episode 53 いつの間にか

「いつの間に店員が増えたんだ」

久方ぶりに店を訪れたチャーリーが指さしたのは、危うい手つきで皿を片づけている勇者殿だった。

「彼は異界人なのだ。私と同じ世界から来て、帰る術がないというので師匠のうちに暮らしている」

「じゃあ宿食交換で働かせているのか」

「私が一人分稼ぐと言ったのだが、家に置いておくのは危険だと師匠が主張してな」

コップを派手に割つて、チャーリーはなるほどと頷く。

「でも最近あの子が不機嫌な理由がわかつたよ。せっかくの一人暮らしにあんな邪魔者がいちゃな」

「師匠が不機嫌なのは、彼が私を殺そうとするからだとおもうが?」

「殺人鬼には見えないけど」

「殺人鬼ではなく勇者だ」

「まあ、あの子とお前の仲を邪魔するなんて確かに勇者だけじゃ」「そう言つ意味ではなかつたが、チャーリーの言葉に私は不安になつた。

最近勇者殿が気がかりで、師匠と語り合う時間が少なくなつてるのは事実だ。

「老人介護は大変かも知れないけど、あの子の『機嫌もちゃんと取れよ』

最近学校ですげえ荒れてるんだ。

そう言つチャーリーの言葉に、私は慌てて師匠のいる厨房に駆け込んだ。

言われてみると、師匠はいつもの5倍は不機嫌だった。その上少し元気がないようで、どこか惚けた顔でトマトを切つていてる。

「師匠すまない！ 私は師匠を蔑みにしていた…」

そう言つて背後から抱きつけば、師匠がギヤーと叫んで包丁を振りまわした。

「突然なによ…」

怒る師匠が怪我をしないように包丁を取り上げて、私は師匠にすまないと謝罪をする。

「チャーリーに言われたのだ。勇者だけでなく師匠の相手もちゃんとしたしらと」

「そつそんな事で拗ねるほど子どもじゃないし……」

と言いつつ、師匠が視線をそらす。

師匠が田をそらすのは、本音を隠したいときだ。

「嘘をつかなくて良い」

そう言つて私は師匠の顔を私へと向けてさせる。

「私は師匠に不快な思いをさせたくない。勇者殿を家に呼んだのは私の我が儘だし、それで嫌な思いをしているならちやんと言つて欲しい」

私の言葉に、師匠はよつやく私の田を見てくれた。

「正直言つとね、私あの人苦手なの。無駄に態度がでかいところとか、週に一回しかお風呂に入らない所とかは我慢できるんだけど、やっぱりあんたに剣を向けた奴には優しくできない」

その上師匠は、自分は心が狭いのだと悔やむ。

「それに私、本当はずつと……」

何か言おうとしたが、師匠は急に黙り込んでしまった。

どうしたのかと尋ねようとして私は思わず息をのむ。下を向いた

師匠の肩が、震えているのに気付いたのだ。

「泣いているのか？』

「大丈夫。ただよつと怖くて…」

絞り出したその声は、いつも師匠からせられないので細く、そして弱々しかった。

「あなたのこと守るつて言つたけど、毎日毎日不安で…。あの勇者

が突然また襲つてきたりどうとか、あんたに何があつたらどうしようとか」

「勇者殿はそんなことはしない。不意打ちや奇襲は彼の正義に反するし、聖剣がなければ私を傷付けることは出来ない」

「それはわかつてゐる。一緒にいるとあのじいさんが悪い人じゃなってわかるし、今はあんたよりケリーにお熱だし」

だがそれでも怖いのだと言いながら、師匠は私の服をギュッと掴んだ。

「魔王がいなくなつたらつて、前より頻繁に思つよになつりやつし、一度思うと不安な気持ちが消えてくれなくて……」

そこで、師匠がきつく唇を噛んだ。

こらえる声と、涙が落ちるかすかな音で私はようやく気付く。彼女がどれほど強く、私の身を案じてくれていたかを。

「ありがとう」

そう言つて体を抱き寄せれば、師匠の涙とこらえていた声が私の胸にぶつかつた。

まるで子どものように泣きじゃくる師匠を抱きしめながら、私はただひたすらに「ありがとう」と「すまない」を繰り返す。

それしか言えぬ自分が歯がゆくて。師匠の涙を止められない自分が悔しくて。

なのにほんの少しだけ、嬉しいと感じてしまったのはやはり私が魔王だからなのだろう。

もし自分が人だったらと。もしこの世界で生まれ、ただの人として師匠と出会えていたらと私は願う。

そうすれば師匠を泣かすこともなかつたし、泣く師匠を見てこんな汚い感情を抱くこともなかつただろう。

「すまない」

そう繰り返して、でも師匠の体を手放すことも出来ぬまま、私はただ立ちつくしていた。

それからどれほどの間、そうしていったかはわからない。

いつの間にか師匠の体が重くなり、気がつくと彼女は気を失うようになっていた。

よく見れば田の下に濃いクマがある。

師匠の不安に気づけなかつた自分を悔やみながら、私は師匠を抱きかかえたままホールに出た。

「あの男は帰つたぞ」

そう言つたのは客のいないホールに一人立つ勇者殿だった。

「申し訳ないが、店のネオンを消しててくれないか？ 今夜は店じまいにしたい」

私が言つと、勇者殿は頷いた。だが彼は店を出る前に、ふと足を止める。

「その娘に、謝つておいてくれないか？」

「それは構わないが何かあつたのか？」

皿でも割つたのかと尋ねると、勇者殿は悔やむよつた顔で首を横に振つた。

「いつの間にか私は勇者としての心得をすっかり忘れていたらしい」

「心得？」

「魔王にすら少女を思いやる気持ちがあるところに、私にはそれすらなかつたようだ」

それから勇者殿は、チャーリーから私と師匠がどのように出会い、暮らしていたかを聞いたと告げる。

「あの男の話を聞いて思つたのだ。私は大きな間違いを犯していくのかもしれない」と

「勇者殿でも間違える事があるのか？ 過ちを犯すのは魔王の仕事ではないのか？」

「わしもそう思つていたが、それこそが過ちなのだろう」

「そう言って、勇者殿は苦笑する。

「その娘が不安で壊れてしまわないよう、これからはわしも協力し

よつ

それは非常に助かる申し出だった。

悔しいが、私は不安を「覚えるのは得意だが不安を拭う術を持たないのだ。

「やはり勇者殿は頼りになるな」

「そんなことはない。むしろ勇者にも出来ない事は沢山ある

「例えば？」

「……1週間に2回以上は風呂に入れない」

石鹼のにおいが嫌いなのだと、勇者殿はポツリとこぼした。

どうやら、私は魔王であるにもかかわらず、勇者殿の弱点すら知らなかつたようだ。

それに驚くと同時に、言葉を交わす事がいかに重要であるか、私は再確認する。

師匠の不安も、勇者殿が風呂嫌いな理由も、ちゃんと言葉を交わせばすぐにわかつたことなのに、それを怠つた所為で一人を不快にさせてしまった。

これからは師匠ともっと言葉を交わそう。

そして勇者殿のために薔薇の香りのソープを買おつ。

そう決意して、私は腕の中の師匠を強く抱いた。

Episode 53 いつの間にか（後書き）

10 / 16 誤字修正しました（「」指摘ありがとうございました）

## Episode 54 「つるせ」

「あのつるせ、ハエをどうにかしてくれないかね」唐突にケリーが家を訪ねてきたのは、師匠と勇者が一人で出かけている時だった。

以前は仲が悪かった二人だが、勇者殿が歩み寄りを見せたお陰か、殴り合いの喧嘩は日増しに減っている。

さすがに1ヶ月も一緒にいれば慣れてくる物もあるようで、最近は私抜きで買い物に行くまでになつた。

未だ口での喧嘩は良くあるが、気が合わないわけではないようなのだ。

好きな映画やドラマの傾向は似ているし、私が嫌いなジェイソンさんも一人で楽しそうに見ている。

そしてなぜだか、私はそれが少し面白くない。

「ちょっと、聞いているのかい！」

「すまない、ちょっと拗ねていた」

「ともかくあのじいさんが家に来ないようにしておくれよ。毎日毎日愛の詩を大声で読まれて、こつちは迷惑してるんだ」

「愛の詩はダメか？ 一人で頑張つて考えているんだが」「お前の所為かい！」

そう言つて、ケリーはその細腕からは想像のつかない怪力で、私の襟首を締め上げる。

「だって、女人は愛の詩に弱いとケリーが教えてくれたから」「せめて手紙にして送れ。あとケーキをこつそりポストに入れるのもやめさせてくれ」

「頑張つて作つてのに」

「人を糖尿病にさせる氣かい！」

そう言つて頭を叩かれ、私は激痛に呻く。

「とにかく迷惑だからやめさせてくれ」

「しかし勇者殿は本気なのだ。それに私は魔王だし、愛の力には太刀打ちできない」

そういうと、ケリーが呆れ顔でため息をこぼした。

「そもそもねえ、私には夫がいるんだよ」

「でも亡くなっているのだろう？　それに師匠も言っていたのだ、ケリーはまだ若いし再婚相手を探しても良いと」

「あれだけはごめんだね」

「そんなに嫌なのか？」

「嫌だね、あんな欠点しかないようなジジイ」

「よければどこか悪いを教えてくれ。正すより勇者殿に伝えておくべきつと勇者殿のことだ、その欠点を克服しようと修行を積むに違いない。

「じゃあ、おつきい紙とペンを持つておいで」

言われるがままそれらを持ってくると、ケリーはその紙が真っ黒になるくらい沢山の欠点を上げた。

「わかった、全て伝えておく」

「さすがにこれで懲りるだろ？」「

「どうだろ？　彼は幾多の困難を乗り越え、私を打ち倒した勇者だぞ」

そんな馬鹿なとケリーは鼻で笑う。

「これを聞いてもまだ愛の詩を読むようだつたら、デートへらいしてやるさ」

そう言ってケリーは家に帰つて行つた。

そしてその翌日、私は勇者からデートの最適なレストランの場所を聞かれた。

「なんか、久しぶりに一人つきりだね」

そう言つ師匠は酷く嬉しそうに、私が作ったケーキを食べていた。今夜、勇者殿はケリーとディナーに出かけたので家にいないのだ。最近師匠は勇者殿と良く一緒にいるので寂しがるかと思ったが、私と二人でもとても楽しそうなので何よりである。

「確かに、こうして食事をするのも久しいな」

「あの勇者、味にうるさくて文句ばかりだから、静かな食事が恋しかったのよね」

「文句は言うが、別に師匠の料理が嫌いなわけではないと思つぞ。いつも完食していたし」

「わかつてゐるわよ。そういうことはある意味可愛し、嫌いじゃない」

そう言つてケーキを咀嚼する師匠。

その口の箸にクリームが付いているのに気付き、私はそれを指で拭つた。

勿体ないのでそれをなめ取ると、師匠がフォークをえたまま不自然に下を向く。

「どうした？ 味がおかしかつたか？」

「ううん、なんかその、久しぶりに一人だと意識しちゃうつて言つつか」

「意識？」

何でもないと咳いて、師匠はケーキの載つた皿をテーブルに置く。

「ごめん、おなか一杯だからもういいや」

「やはり味がおかしかつたのか？ すまない、すぐ作り直す！」

「違うわよ」

「だが師匠が何でもないと言つときは、何かを我慢しているときだ」

そしてその台詞は日増しに増えており、私はずっと気がかりだつ

たのだ。

「何でもないと言われるたび、私はふがいないのだ。師匠に何かを我慢させてしまつほど、私は頼りないか？」

頼りないとかそう言う事じゃないと師匠は言葉を濁すが、今日はその先を続けて貰いたかった。

故に私は背後から師匠を抱きかかえ、ソファーへと魔法で転移する。さすがの師匠も、背後から拘束されでは逃げられまい。

「何でもないを撤回するまで、今夜は離さない」

師匠は暴れたが、今日だけは、今日いっては聞き出すと決意したのだ。

「私だつて魔王だ。たまには魔王らしく、我を通すこともある。」

「さあ教えてくれ、師匠は何を我慢しているー？」

「我慢何してない！」

「ならば私の目を見てくれ

」そう告げれば、師匠はやはり目をそらした。

「…なら、今夜は離れない」

「それは困る！」

「なら教えてくれ

」

「それもダメ！」

「何故だ！」

思わず悪い魔王でいたときのような声で怒鳴れば、師匠の体がびくっと震える。

やりすぎたと思ったがもう遅い。

彼女だけは怖がらせたくないと思い続けてきたのに、師匠の目に

私の恐怖がはつきりと映つている。

「すまない、師匠を怖がらせるつもりはなかったのだ！ ただ、私は……」

慌てて弁解しようとしたが、動搖のあまり上手こじと声が出てしない。

そんなとき、落ち着けと言つよう私の頭を撫でてくれたのは、

だ。

他ならぬ師匠だった。

「怖いんじゃなくて、好きなの」

そう言つ師匠の目に恐怖が無いことに安堵し。

それから今更のように、私は師匠の言葉にはつとした。

「今何と？」

「好きなの」

あんたが。

そう言われた直後、私は師匠に殴られたかのような錯覚を覚えた。しかし師匠は私の腕の中で、体を小さくしたままだ。

「あんたにそう言う気持ちが無いのわかつてたのに、一緒にいると嫌でも色々期待しちやつて……。でもそれが上手く隠せなくて……」

「何故隠すのだ。私も師匠が好きだぞ」

「私の好きとあんたの好きは違つ」

「好きでも種類があるのか？」

尋ねると、師匠は呆れと困惑が混ざった顔で私を見つめる。

「何て言つか、私の好きはあんたのより重いの」

それが何故問題なのか、私には理解できない。

「重くても私ならば持てる。私は魔王だ！」

「魔王でも持てないくらい重いの。だからこれは我慢しなきゃいけないし、あんたが苦労するくらいなら、私は我慢できることなの」

師匠はそう言うが、その顔はやつぱり辛そうだった。

やはり私は師匠が我慢することに我慢が出来ない。

だから人から空っぽだと言われる頭を必死に働かせ、5分ほど悩んでようやくひとつ案を思いついた。

「なら半分だけ持たせてくれ」

師匠に理解して貰えるように、私は必死に言葉を選ぶ。

「一人で持てないなら、一人で持てばいい。重い物ならなおさら、

師匠一人に持たせるわけにはいかないからな」

「本気で言つてる？」

本気だと主張したが、師匠はまだ信じていないうだつた。

「凄く凄く重い物よ。気の良いあなたが呆れるくらい」

「師匠の気持ちなら、例え重い物でも私は持つてみたい」

「むしろ欲しいと言つた瞬間、突然師匠が私をきつく抱きしめた。

「こりこりは許可の抱擁か？」

「多分あんたは何もわかつてないけど、私もつ我慢できないかも…」

…

どういう意味かと尋ねようつとすると、師匠が小声で「もう限界」と呟いた。

「それは大変だ。やはり我慢は良くない！」

そう主張すると、師匠が私の腕の中で顔を上げる。

その顔を見た途端、私はジョイソンさんを初めて見たとき以上の鳥肌が立つのを感じた。

しかし怖いのではない、むしろ息をのむほど師匠は美しい。

なのに私の体は、何故だか震えそうになつていた。

「わかつた、もう我慢しない」

そう言つやいなや、師匠が突然舌を使うキスをしてきたので、私は更に慌てた。

最近、私は師匠のキスに抵抗できないのだ。

いや抵抗はしているというか、舌で応戦はできるのだが、そうすると師匠の息が上がるほどキスの時間が長くなつてしまつのだ。けれどそれで良いと師匠は言つ。その上、気がつけば何故かシャツのボタンが外されていた。

「おつ重いといふか激しいな」

「今更撤回しても遅いから」

「師匠から貰つた物を返すつもりはない」

そう答えると、師匠が私をソファーに押し倒した。

師匠に上に乗られると、なんだか体が熱くなつて気が遠くなる。

だが今日ばかりは氣絶してはいけない気がして、私は必死に意識を保つ。

しかし次の瞬間、師匠の体が唐突に離れ、同時に彼女の悲鳴が響

いた。

何事かと起きあがつたが驚くことはない。

ただ、ケリーと勇者殿が戸口に立っているだけである。

「ああ、おかえり」

「おかえりではない！ 貴様何をしている」

何と言われてもこれはなんと言えばいいのだひ言ひ。

キスとプロレスの合わせ技としか形容できないがそれもまた違う氣もする。

そうして悩んでいると勇者殿の機嫌が悪くなってしまったが、そこはケリーがなだめてくれた。

「あいつがじやない。押し倒したのは、この子の方だよ」確かにその通りなので同意すれば、勇者は困った顔でもじもじしている。

「この世界の娘は激しいな

「良くあることだ」

そう言つと、ケリーは勇者の体をぐるっと反転させる。

「あんた今夜はうちには泊まりな

「あつ貴方も激しいたちか！」

「うちに来ればわかるよ」

それから師匠と私は「うひうひ」と叫び、ケリーと勇者は家を出て行つた。

残された私と師匠は無言で5分ほど過いで、それから師匠が私のシャツのボタンをとめた。

「脱がなくて良いのか？」

「なんか萎えた」

と言つてソファーで膝を抱える師匠は、幼い子供ものよつなふくれ面をしている。

「とりあえず、ケーキの残りでも食べるか？」

尋ねると、師匠は食べると頷く。

「よくよく考えたら、食後に魔王は重すぎる」

「もしかして私を食べる気になったのか？」

喜び勇んで心臓を取り出そうとすれば、「それよりケーキ！」と

師匠が怒鳴る。

私の心臓よりケーキが良いというのはちょっと傷ついたが、師匠の機嫌がこれ以上悪くなると困るので、私は急いで台所に駆け込んだ。

## Episode 56 グルメ

ここ1週間ほど師匠の機嫌は酷く良かつた。

理由はひとつ、うちの店がグルメ番組で紹介されたのだ。  
お陰で客も増え、ここ1週間ほどは師匠が悲鳴を上げるほど忙

しさだった。

「凄く美味しかったよ、」ちやうさまー」

そしてお客様たちは、日々にそういう言って帰っていく。美味しい  
という言葉はいつも聞くが、やはりこんなに多くのお客様に言わ  
れるのはまた格別だ。

その上客たちはチップも沢山くれるから、私の小遣いもずいぶん  
と増えた。

「忙しいが、良い収入だ」

ある晩、私と勇者殿が一緒にチップを数えていると、勇者殿が手  
持ちの1ドル札を頬ずりしながらそう言った。

お金を数えているときの勇者殿は本当に幸せそうで、見てくるこ  
つちまで嬉しくなる。

「この世界に来てずいぶんになるが、こんなにたくさんお金貰っ  
たのは私も初めてだ」

「給料は貰っていないのか？」

「ああ。くれるというのだが、貰っていない」

チップも貰えるし、何より師匠の側にいられれば他に欲しい物は  
ない。

プラモデルなどは師匠の父上の物があるし、服などはチャーリー  
のお下がりもらえる。

丈が足りないのでズボンだけは買わねばならないが、魔王でいた  
頃と違いここでは戦闘行為もないのに替えの服はそんなにいらない。

「お前は本当に欲がないな」

勇者はそう言うと、貯まつたチップに目を落とす。

「勇者殿は何か欲しい物があるのか？」

もしかしてケリーに贈り物でもするのかと思ったのだが、何故だ

か勇者殿は悲しそうに笑った。

「したいのは山々だが、ちょっと金を貯める必要があるかもしけんのだ」

そういうと、勇者は躊躇いがちに言葉を続ける。

「そう言えばお前さん、自分が死んだときの事を覚えているか？」

「あまり詳しくは覚えていない」

正直に答えると、勇者は何かを言いかけて、それから「何でもない」と言葉を濁した。

その表情は真剣で、そして彼が必要としている物と何か関係がある気がした私は、持っていたチップを彼に差し出す。

「欲しい物があるなら 私のチップを使ってくれ」

「お前、なぜそこまでする」

「貴方が困っているように見えたからだ」

それ以外に理由など無いといつと、勇者は真剣な表情を崩し、チップを差し戻した。

「いらん世話だ。それにお前こそ、あの子に何か買つたらどうだ」「誕生日でもクリスマスでもないのにいいのか？」

「好きな女には貢いで貢いで貢ぐ。…と言つのが、私達の世界でのルールだつたぞ」

ならば是非贈り物をしたい所である。

師匠から好きという気持ちを頂いたまま、私は未だ何もお返しが出来ていなかつたのだ。

「しかし何が良いだら」

「どれくらいたまつてているんだ?」

「前からの貯金を合わせると200ドルくらいはある」

意外にたまつてているなと勇者が驚く。

「なら指輪だ。指輪を買え」

「でも師匠は料理人だし、指輪は邪魔ではないだろうか」

それに200ドルでは師匠がほじがつてゐるような、宝石がついた物は買えない。

だがそれを告げても、勇者殿は主張を曲げなかつた。

「私もドラマで見ただけだが、この世界では親しい女性に指輪を贈るのが礼儀なのだ。それも薬指にはめる指輪だ」

「薬指か」

「左手の薬指だぞ、忘れるな」

その顔があまりに真剣だったので、私は翌日指輪を買ひに出かけた。

丁度2つセットの物が安く売られていたのでそれを買つて帰ると、師匠が物凄く驚いた。

「とりあえず、こいつちの奴は左手の薬指にはめてくれ。太い方は何処の指でも良いが」

「じゃああんたの薬指にはめて」

「でも師匠に買つてきた物だぞ」

「良いからはめて」

それ以外は許さないといふので薬指にはめると、それは丁度良いサイズだつた。

それを師匠はとても喜び、グルメ番組に紹介された時以上に彼女に機嫌は良かつた。

あの師匠をここまで大喜びさせる案を持つていたとは、やはり勇者殿は凄い。

これは是非お礼をせねばと思い、私はその夜、余つたお小遣いを勇者殿が大切にしている豚の貯金箱にいれた。

最近、よく深夜に師匠が一人でベッドを抜け出す。最初の頃はトイレが近くなつたのかと思つたが、どうやら原因は悪夢らしい。

なんでも2週間ほど前から毎晩同じ悪夢を見続けているらしいのだ。お陰で睡眠時間が減り、肌が荒れると師匠は言つてゐる。むしろそこは悪夢を気にするとこだと思つが、ホラー映画好きな所為か師匠は割と冷静だつた。

その日も深夜2時過ぎに師匠はむくつと起きあがつたが、悲鳴どころか冷や汗すらかないでいい。

「今日も悪夢を見たのか？」

尋ねると、師匠はばつが悪そうな顔をする。

「起こして」めん

「かまわない。それよりも今度も同じ夢か？」

「うん。血だらけのウエディングドレスを着た女人が、何か喋つてるのよね」

そしてその女人とやらが立つてゐるのはこの家の中らしい。その上彼女は、日に日にこの寝室に近づいてゐるといつたのだ。

「ホラー映画は好きだけど、さすがに少し気味悪いわよね」

このまま悪いことが起きたらどうしようと言つ師匠に、私が思い出したのは前に見たホラー映画だ。

じついう場合、最後は本当に幽霊が現れ、夢を見た人を殺してしまつのだ。

それは困る。非常に困る。いくら師匠でも、さすがに幽霊には勝てないはずだ。

「今日は何処に？」

「その、廊下の角の所」

もうすぐそこではないかと慌て、私は師匠を抱き寄せる。

「師匠を何としてでも守らねば」

「つていうけど、あんた幽靈苦手じゃない」

「師匠のためなら、例え相手がジエイソンさんでも戦う」

若干声が震えてしまったが、その言葉に嘘はない。

「でも戦うって言つても、どうすればいいのかしらね」

当事者でありながら妙に冷静な師匠に指摘され、私は返す言葉が

なかつた。

残念ながら魔王には幽靈を見る機能がない。魔剣は使役できるが悪魔のたぐいを召喚するのも無理だ。悪魔に近い姿には変身できるのに、なんとも不便な話である。

「戦えなくてもなんとかする」

「なんとかつて?」

「とりあえず原因を考えてみよう」

そうすれば解決策が見つかるかも言えど、「珍しく頭が働くわね」と師匠が褒めてくれた。

「最初に悪夢を見始めたのはいつだ?」

「2週間くらい前かしら」

「きつかけになるようなことがあつたか?」

「全然」

「なにか、封印的な物を壊したとかは?」

「無いわよ。丁度グルメ番組に紹介されて忙しくなつてた時だし、学校と家とダイナーの往復しかしてない」

「しかし訳もなく悪い幽靈にとりつかれるわけがない」

「でも私には心当たり無い物」

忘れているだけではと食い下がつたが、師匠の機嫌が悪くなつただけで大した情報は得られなかつた。

仕方なく、今度は私が2週間前のことと思い出す。

確かに師匠が何かを壊した記憶はない。

それにそもそも、師匠が人の悪意を買つよつなことをしたとは思えない。魔王の私ならともかく。

そう考えてふと、今更のように自分に原因があるのではないかと思つ考  
えが浮かんだ。

魔王は人から恨みを買つたための存在だ。ならば同じ要領で、幽靈  
の恨みを買っていてもおかしくはない。

慌てて、私は2週間前の事を更に詳しく思い出そうとした。

しかし師匠同様、私もダイナーの仕事が忙しく口々に出かけてい  
なかつた。

唯一街に出たのは、師匠に指輪を買つたあの1回くらいのものだ。  
「あの日も、指輪を買つただけですぐダイナーに戻つたしな」

その間に猫でもひいてしまつたのかと考えた瞬間、師匠が自分の  
薬指に目を落とした。

師匠の視線の先にあるのは、もちろん私が買つた指輪である。

師匠はそれが気に入つたらしく、昼間は勿論夜寝るときもはめて  
いるのだ。

また友達や店の客にもよく自慢しており、何故だかそのたびにお  
めでとうと言われるので、師匠は更に喜んでいたのだ。

だがいつもは指輪を一つとりと見つめるその目が、今日はピリと  
なく不安に揺れている。

「そう言えば、夢うつつに何かをかえせとか言われてた気が……。  
いや、でも、そんな映画みたいな事……でも魔王が買つた物ならも  
しかして……」

となにやら一人会議を始めた師匠眺めていたら、不意に師匠が  
指輪のはまつた左手を私の前に突き出した。

「この指輪、ちゃんとしたお店で買つたのよね？」

「店といふか露天商だ。ちゃんとしている、とは言い難いかもしれ  
ない」

むしろどうやらかと言えば怪しい黒人が売つていたといふと、なぜ  
だか師匠の顔が青ざめた。

「もしかして、買うとき何か言われなかつた？」

「気を付けて、と帰りの心配をされた」

直後、私はベッドから派手に落ちた。むろん、殴り飛ばされたからである。

「何でよつこもよつて呪いの指輪を買つてぐるー。」

呪いの指輪とは何だとウツカリ質問してしまったお陰で、その晩は師匠のホラー映画コレクションのなかでも特に怖い、ジャパン一ズホラーの映画を見せられた。

それは恨みの籠もつた指輪を買つてしまつた女性が、死んだ前の持ち主に理由無く追いかけられ、ついには死んでしまうという内容だった。

「なるほど、この指輪は映画の中に出でてきた物と同じなのだな」スタッフホールを見ながら呪いを言えば、師匠は泣きそうな顔で明日返しに行こうと呟つた。

言われるがまま指輪を怪しい露天商に返せば、それ以来師匠の悪夢はピタリと止んだといふ。

それに私は喜んだが、残念ながら問題は終わつていなかつた。  
悪夢を見ていた頃より、日に見えて師匠の元気がなくなつたのだ。  
それが気になつて觀察していると、師匠は良く指輪がはまつてい  
た薬指をいじつている。

そして時折手をかかげ、大きなため息をつくのだ。

馬鹿だ馬鹿だと言われている私でも、さすがに師匠のため息の理由はわかる。

「師匠、もしかしてあの指輪が恋しいのか？」

ある晩指を撫でてゐる師匠に声を掛けると、彼女はぼつの悪そ  
な顔をする。

「よかつたらまた贈らせててくれ。今は小遣いが足りないが、お金が  
貯まつたらまた薬指にほめる物を買おう」

「もう良いのよ」

「でも今度は普通の、幽霊が憑いてないのをちゃんと選ぶ」

我ながら良いアイディアだと思ったが、師匠は喜んではくれなか  
つた。

「本当にいらないの。そもそも、私はあなたから指輪なんて貰っちゃいけなかつたの」

「どうしてだ？ 私は師匠に喜んで貰いたくて買つた物だ。師匠が付けずに誰が付ける」

「普通の指輪なら別に良いのよ。でも、薬指にはめるペアリングつて特別な物だから」

そうして、師匠はペアで付ける指輪の意味を私に教えてくれた。

「恋人同士が、つけるのか……」

「うん。こういうのは、ちゃんと想いが通じ合つた相手同士しか付けちゃいけないの」

だけど貰えたのが嬉しかつたから、外したくなかったからそれを言えなかつたと師匠は言つ。

「私達は、想いが通じ合つていかないのか？」

「同じ指輪を着けるにはまだ足りないのよ、だから本当の持ち主が返せつて言いに来ちやつたのね」

そう言われると何故かとても切なくて、でもどうすれば通じ合えるのか私にはわからなかつた。

その上私は、今更のように師匠と思いを通じ合わせることが酷く困難である事に気付く。

魔王は元々人の恨みを集めるために生み出された物だ。故に人と想いを通じ合わせるような機能はない。

それはつまり私と師匠は一生想いが通じ合えないと言つことだ。

そこまで理解して、そして私は今更のようすに自分の願いに気付いてしまつた。

私はきっと、師匠の恋人になりたかつたのだ。

ずっと一緒にいることは他人でもできるかもしれない。

でも私が欲しいのは師匠に最も近しい場所なのだ。恋人だけが手に出来る、師匠を独占できる場所なのだ。

けれどそれは、私には決して手に出来ない場所もある。恋人となるための大物が、私にはないのだから。

「だから指輪は我慢するわ」

しかし師匠にそう言わると、私の方が我慢がならなくなつてしまつ。

恋人にもなれないといふことは、きっと本当の家族にもなれない。それを知つてしまつたのに、私は師匠を手放せそうもないのだ。

「私は本当に悪い魔王になつてしまつたのかも知れない」

思わず師匠を抱き寄せる、師匠は酷く驚いていた。だが手放せない。手放したくない。

「思ひが通じ合えないのに。彼氏にもなれないのに私は師匠が欲しいのだ」

そう言つと師匠が真っ赤になつてうつむく。

「彼氏でもないのに誰にも渡したくない。家族になりたいしキスもしたいしずつとこうしていいたい」

それにはどうすればいいと縋る思いで尋ねると、師匠が彼女らしい凜々しい顔で私を見上げた。

「あなたがしたいようにすればいい」

「だが私がしたいことは……」

「あなたは通じ合えないって言つけど、私がして欲しいことは全部あんたがしたいことだから」

そんな奇跡のようなことがあるのかと尋ねると、師匠はあるのだと言い切る。

「それにやつぱり、幽霊付きじゃなかつたら指輪もちゃんと受け取るから」

「通じ合つていなくても良いのか?」

「あんたがあげたいって思つて、私が欲しつて言つたらそれは通じ合つてるって事でしょ?」

「うむ」

「それで、あんたは指輪を贈りたいの?」

「師匠は欲しいか?」

お互いの問いかけに私達は同時に頷いた。

「通じ合つところのは意外と簡単だな」

ホツとしたと言えば、師匠が私の頭を撫でてくれる。

「とにかく、思つたことは言葉にしてみなさい。あんた馬鹿だから、恋やら精神論やらを説明してもわからないだろ?」

確かに難しことを理解するのが私は苦手だ。

特に恋愛や心のやり取りについてはチヤーリーから色々と言われたが、未だによくわからない。

「だからとにかく考えたことは言葉にして。そつすれば数学の答え合わせみたいに、思いを確認できるでしょ?」

確かにそれは良い考え方だと頷くと、師匠も微笑む。

「心のない魔王と通じ合つなんて、やっぱ師匠はただ者ではないな」

そしてきつと私はそつ言ひといふがたまらなく好きなのだ。

「師匠」

「なに?」

「例え通じ合えなくとも、愛していふ」

「言えとは言つたけど、これは少し恥ずかしいかも……」

そう言つて赤くなつた師匠を見ていると、私は更に愛していると連呼したい気持ちになつた。

「師匠、あと3万回くらい愛してると言いたいんだがいいだろ?」

「また睡眠不足になるから、10回くらいにして」

「20回は?」

「……じゃあ15回」

15回、師匠はじつかり届くよつて愛していくと告げた。

だが翌日、睡眠不足になるからといつ理由で、寝る前に言つて良い愛してるの回数は10回までと師匠に決められてしまった。

私にとってそれは安眠の呪文だが、師匠に取つては悪夢以上に睡眠の妨げになるらしい。

## Episode 58 見せ所

「魔王」

「どうした師匠？」

「私達、少し距離を置こうか」

師匠の言葉に私はその場から5歩ほど下がり、側にいた勇者殿は飲んでいたモーニングコーヒーを拭きだした。

「距離つてそういう距離じゃないんだけど……」

「もつと遠くとか？」とか？ それは嫌だ、師匠が側にいなこと落ち着かない

既に今の時点で落ち着かないといつと、師匠が酷く困った顔をした。

「前は離れてても大丈夫だったじゃない」

「それは師匠への愛に気付いていなかつたからだ。しかし今は、師匠と一秒たりとも離れたくない」

そこで勇者殿がまたコーヒーを拭きだした。その上激しく咳き込んでいる。そろそろ気管支が弱ってきているのかもしれない。

「その気持ち凄く嬉しいんだけど、度が過ぎるとすがに恥ずかしいのよ」

「でも高校生というのは過度なスキンシップが好きなのだろう？」

「嫌いじゃないけど、やり過ぎつて言つか……」

「例えば何を控えればいい？」

「言わせないでよ」

「でも言つてくれないとわからな」

「とりあえず、キスの回数が多すぎるかなと」

「キスは嫌いか？」

思わず肩を落とせば、師匠が慌てて嫌いではないと首を振る。

「でも朝も昼も晩も、家でも出先でもダイナーでもするのは勘弁つてこうか……。ましてや高校の前で待ち伏せしてキスをせがむのは、

さすがの私も恥ずかしいがなつて

「……わかつた、頑張つて我慢する」

「あと同じように抱きしめるのも程々にして欲しい」

特に外では回数を減らしてと言われ、私は渋々頷いた。

「じゃあ、その分ベッドの中でギュウとする」

「ここでまた勇者殿がコーヒーを拭きだしたが、いつの間にかタオルを用意していたようで、テーブルが汚れることはなかつた。

「あと最近色々世話を焼いてくれるけど、それもいらないから」

「何故だ。彼女の世話を焼くのは彼氏の役目だと教わつたぞ」

「こればかりは譲れないと身を乗り出したが、相変わらず師匠は渋い顔である。

「学校の送り迎えとかは嬉しいけど、食事を食べさせるとかやりすぎよ。お風呂も一緒に恥ずかしいし」

「でもテレビや映画の恋人たちは良くそうしている」

それに、そう言つのをこなす事こそ彼氏の特権であり腕の見せ所だと友から教わつたのだ。

「食事はアーンが基本、お風呂では体を隅々まで洗いつこして、寝るときは愛の言葉と子守歌がセオリーなのだろう?」

「誰に聞いたのよそれ」

「チャーリーだ」

やりすぎで別れる奴もいるナビと注意はされたが、師匠と私にその心配はない。

「もう思い実行したのだと告げれば、何故だか師匠がここではないどこかへ殺氣を放つた。

「ともかく、普通にしましよう普通に……じいさんだつているんだし、見せつけるのは可哀想でしょ」

「そつなのかと勇者殿に尋ねると、彼は真っ赤になつてコーヒーを啜る。確かにあれは困つてゐる顔だ。

「たしかに気が利かなかつたな」

反省して、私は勇者殿の隣に座つた。

それから彼が使っていたフォークを取り上げ、皿に残っている食べかけのソーセージをフォークに突き刺す。

「では、勇者殿にもアーンをしよう。仲間はずれはいけないしな」直後、勇者殿が今まで以上の勢いでコーヒーを吹いた。側にいた私は全身コーヒーまみれになつたが、勇者殿は謝るより前に怒り出す。

「何故そつなるー。」

「だつて見せつけるのはダメだと師匠が」

「だからつてわしにアーンはないだろーー！」

「なら一緒に風呂にはいるか？ 頭や体を洗うのは得意だぞ」

毎日師匠を洗っているから上手いはずだと言えども、勇者殿は持つていたカップを握り碎いた。

「わしは勇者だぞ！ 何が悲しくて魔王のお前と風呂に入らねばならん！」

「遠慮しなくて良い」

「そう言つ意味ではない！」

肩を怒らせて、そして勇者殿は私を睨む。

「お前こそわしに気遣いなんて無用だー！」

「しかし勇者殿にも気持ちよく過ごして頂きたい」

だからお風呂で気持ちよくしてあげたいのだと言つたが、勇者殿は怒るばかりだ。

「構うなと言つていいのだ！ もうすぐここを出て行くのに、誰が好きこのんでこれ以上の悪夢を増やすかー！」

それは残念だと思った直後、私は彼の言葉に引っかかりを覚える。だが私が尋ねるより早く、師匠が嬉々として身を乗り出した。

「もしかして、ケリーと上手くいったのー！」

「んなわけあるかー！」

自分で言つて、そして勇者殿は傷ついた顔でその場に泣き崩れた。私も師匠と同じ事を考えていたので、何となく申し訳ない気持ちになつてしまつ。

「でも出て行くつて、あんた何処に行くのよ~。」

「……元の世界に帰るだけだ」

その言葉に師匠が驚くと、勇者殿は誤解するなと涙を拭いた。

「そいつは連れて行かん。ただ、この世界での仕事が終わつた故、わしは帰るだけだ」

「仕事してたの！？」

「失敬だな小娘！」

怒りを露わにしつつ、勇者殿は「ちょっと待つていら」と部屋に引っ込んでしまった。

そして待つこと5分。勇者殿はあまりに意外な物を持ってきた。

「どうだ、ジョン・ウェインみたいじゃねー？」

そう言つ勇者殿の腰にはガンベルトと、西部劇に出でぐるような古い銃がささつていた。

「何處で盗んだの？」

「勇者殿、盗みは良くない」

私と師匠が同時に口を開くと、勇者殿は馬鹿にするなと銃を抜いた。

「買ったのだ阿呆！」

「お金はどうしたのよ」

「お前等に隠れて、芝刈りやらスーパーのレジひきをしてソシコシ稼いだのだ！」

そう言えば最近、勇者殿は家を空けることが多かつた。それもこれも、このガンベルトと銃を買つためだつたらしい。さすが勇者殿、努力家の鏡である。

「つていうか、じいさん。こんなのは買ひどいするのよ」

「むりん、魔王を倒すのじやー！」

途端に師匠が鬼の形相でフライパンを持ち出したので、勇者殿は慌ててソファーの影に隠れた。

「待て、私が倒すのはそいつではない！ わしの世界にいる、今の魔王じやー！」

勇者殿の言葉に、私は自分が生きていた頃のことを思い出す。

たしか、私が死ぬ以前から次の魔王は製造されていた。

そもそも私はちょっとした欠陥があり、長くもたないと言われていたのだ。

それ故すぐに起動できる次期魔王がスタンバイしており、私が倒された後は彼が世界を破壊と絶望の渦に巻き込む予定だったのである。

「もしかして勇者殿は、私とは違った理由があつてこちらの世界に来たのか？」

「お主、自分が死んだときのことを見えているか？」

尋ねたのは私だが、逆に勇者殿が申し訳なさそうな顔で質問を投げかけてくる。

正直、自分が死んだときのことは良く覚えていなかった。  
だが勇者殿の銃を見ていると、おぼろげだつたいくつかの記憶が色を持ち始める。

「そう言えば私を殺したとき、勇者殿は聖剣とは別の武器を持つていなかつたか？」

それも今持つている銃に似ていたと言えば、勇者殿は頷き、そして師匠がハツとする。

「そう言えばあなたの体、脇腹の所に変な傷があつたわよね」  
切り傷とは違う傷だつたと師匠が言う。

「そうなのか？ 私は良く見えないのだが」

「まあその、私の方が近くで見る機会はあるつて言つたが」

「確かに、師匠は私の腹部を嘗めるのが好きだからな」

途端に一発殴られた。

「どうか、小娘は嘗めるのが好きなのか

「話をそらすな！」

そう言つと、師匠は赤くなりながら勇者を締め上げる。

「でもどういう事よ、あんたの世界つて剣とか魔法とかそういうの敵を倒す世界なんでしょう」

死にそうな顔で頷いて、勇者は事情を話すと訴えた。

「私達の世界にはこのような強力な武器はない。故に私は今一度、こちらの武器を得るために世界を越えてきたのだ」

「今一度って事は、あんたは前にも？」

「その魔王を倒す直前、私は世界を飛び越えた。そこでの魔王を殺せたのは、この世界で得た武器を使ったからなのだ」

言葉にされて、ようやく私は思い出す。

剣で心臓を突きさされたものの、勇者殿は魔力も低く、私の命を奪うまでの実力はなかつたのだ。

だがその直後、魔法とも違う衝撃と痛みが私を唐突な死へと誘つた。

「つまりあんた、ズルして勝つたって事？！」

「ズルではない！ 世界を飛び越えられたのはひとえに私の実力のうち

と勇者殿は言つが、何かが引っかかる。

その引っかかりについて考えていると、私はついに自分の最後の瞬間をはつきりと思いだした。

痛みに倒れたとき、私の死を確認しに来た勇者殿の胸から、小さな魔石のような物が私の上に落ちたのだ。

それが体に触れた瞬間、私の体は師匠のダイナーの前にあつた。多分あの石こそ、世界を転移する魔力を秘めた物なのだろう。

しかしそれをここで言うと、勇者殿が師匠にけちんけちんにされてしまう気がしたので、私はあえて黙つていた。

「お陰で私は勇者となつた。だがしかし、程なくして現れた新しい魔王はお前をも上回る強さと残忍さを持つ者だつたのだ」

多くの勇者が戦いを挑んだが破れ、その上魔王はたくさんの中や村を破壊しているという。

「勇者の数も3分の一まで減り、世界はめちゃくちゃだ」

「では勇者殿はそれを救うために今一度この世界へ？」

尋ねると、勇者は首を横に振つた。

「わしは逃げてきたのだ。あまりに多くの勇者が死に絶えた故、歴代の勇者を引つ張り出そうという話が持ち上がつてな」

情けないと師匠は言うが、老人となつた勇者殿に「一度も世界を救えと言うのは酷な話である。

「だが勇者というのは面倒な物でな。それはもう、鬱陶しいくらいに魔王を倒せというお告げが来るのだ」

それに今自分が幸せな分、お告げと称して見せられる悲惨な故郷の状況が辛かつたと勇者は告げる。

「私には世界を救える可能性がある。なのに何もしないというのは、やはり勇者として心苦しいのだ」

「だから勇者でありながら、パートをしてたのだな」

「今回の魔王はこやつよりずっと強い。武器を買う金はなかつたが、折れた聖剣で戦える相手ではないのだ」

苦渋の選択だという勇者に、師匠がため息をつく。

「ちなみに聞くけど、あんたケリーお婆ちゃんのことは諦めたの？」

「諦めていないこそその選択だ！ 魔王を打ち倒し、一度目の栄光を手にした暁には彼女に結婚を申し込む予定だ！」

「そもそも交際も上手くいってないのに？」

師匠の言葉に勇者殿が悲鳴を上げたが、残念ながらフォローは出来なかつた。

実際仲は良くなつている物の、恋人と称するにはケリーの勇者殿を見る目は冷たい。

「それにあんた、こんなしょぼい銃で魔王なんて倒せるわけ？」

「弾も6発ある！」

そう言つて勇者が銃を構えたが、その銃は所々錆びていた。

私を殺したときの物の方がまだマシだろう。あれもずいぶんとしよばかつたが。

「つていうか、言つてくれたら援助したのに」

「こつ小娘の手助けなど……」

「でも、銃ならうち腐るほどあるし」

その言葉に勇者が驚き、私もまた驚いた。

もう半年ほどこの家にいるが、銃のたぐいを見たことは一度もなかつたからだ。

「隠してあるからね」

微笑む師匠を見た途端、手助けはいらないと言つた事を、勇者殿は無かつたことにした。

必死で泣きついているところ、多分本人が一番、あの銃では勝ち目がないことに気付いていたのだろう。

「うちのも最新式とは言い難いけど、いらぬからあげるわ」

そう言いながら師匠が私達を案内したのはガレージだ。

その一角には地下室へと続く小さな木の扉があり、それを降りるとホコリまみれの空間に所狭しと銃が置かれていたのだ。

あまりに乱雑に置かれていた故一瞬オモチャにも見えたが、どうやら全て本物らしい。

「拳銃はもちろん、ショットガン、サブマシンガン、狙撃銃にマグナムにロケットランチャー。あと手榴弾、催涙弾にプラスチック爆弾等なんもあるわよ」

まるで映画で見たスペイの隠し部屋のようである。

「しつ師匠は何者なのだ？」

「これは私のじやなくてパパのよ」

「パパさんは何者なのだ」

「ダイナーをやる前は軍隊にいたって話してたけど、正直よく知らないよね」

それにここまでではないが、この国では家に銃があることが当たり前らしい。

なので師匠も最近までこの部屋がおかしな物だと気付かなかつたそうだ。

「正直これがやばいつてわかつたのは良いけど、処分も出来なくて困つてたのよ。だからよかつたら、全部持つて行って」

師匠が言つと、早速勇者が銃を漁りだした。

「でも良いのか？ パパさんの形見なのだろう？」

「私が持つても役に立たないし、形見に縋るほど私はもう弱くはないから」

その笑顔は彼女らしい強さに満ちていて。

でもそれでも彼女が一人になるのは寂しい気がして、私は師匠の手を握つた。

「ならこれからは、私が師匠の彼氏兼武器になろう」

「たしかに、ロケットランチャーよりあなたの方が強そう」

「実際強いぞ」

一度は銃に負けたが、それは不意打ちを食らつたからだ。

今ならば弾を止めることも跳ね返すことも可能だと笑えば、何故だか師匠はほんの少し不安そうな顔をした。

「じゃあこれ全部よりあんたの方が強いんだ」

「うむ。それにこれは勇者殿には秘密だが、私の力には制限がかかる。それにこれは魔王には秘密だが、私の力には制限がかかっていたのだ。ある意味私は魔王としては失敗作でな、力がありすぎる故にその能力の殆どを封印されていた」

「ちなみに聞くけど、新しい魔王とあんただとどちらが強いの？」

「余裕で私だな。私が魔王であつた頃、既に次期魔王は製造されていたが私ほどの力は出なかつたと聞く」

「……じいさんのレジ打ち、本当に無駄だつたかもね」

酷く疲れた顔で師匠はこぼした。

Episode 58 見せ所（後書き）

11／8誤字修正しました（↑指摘ありがとうございます）

勇者殿がこちらの世界にやってきて約2ヶ月。

短い間ではあつたが彼と親交のあつた者は多かつたので、彼の旅立ちと健闘を祈るパーティーをダイナーで開くことになった。

「本当に勇者だつたんだな」

と今更のように感動しているのはアルファ。そしてその横で、チャーリーも大きく頷いている。

一人ともゲーム好き故に彼が勇者だと信じられず、今までずっとからかっていたのだ。

「でも本当に大丈夫があのじいさん？ 銃で武装しても、もういい年だろ？」

「いざとなつたら魔石で逃げてこられるから大丈夫だと思うぞ」

不安そうなチャーリーにそう言つたが、正直私も不安は感じている。

実は昨日、私はとても嫌な悪夢を見たのだ。

そこで勇者殿は新しい魔王にボコボコにやられていたのだ。

私には予知夢を見る能力はない。故にこれはただの夢のはずだが、それでも私は不安だつた。

何せ私はここ数ヶ月、師匠とハンバーガーが出てくる夢しか見ていないのだ。

なのに初登場で、そしてマウントを取られてボコボコ殴られていたらさすがに不安になる。

とはいえた席で、一人才口オロロしているわけにはいかない。

私はつとめて明るい笑顔を浮かべながら、勇者殿や客人のためにハンバーガーを焼いていた。

けれどどんなに隠しても、私の心を見抜いてしまった存在が一人だけいた。

「そろそろ休憩しようか」

飲み物と食事に余裕が出来たタイミングで、私に声をかけたのは師匠だ。

「師匠は私を人のいないテラス席に連れ出され、開口一番に何かあつたのかと尋ねてきた。」

「あんた今朝からあんまり元気ないから」

そう言つ師匠の目を見ていると、隠し事は出来ないなと思つ。仕方なく私は夢を見たことを話した。そしてとても不安であることも。

「短い間だつたが勇者殿には色々と良くして頂いた。なのに私は、旅立つ彼にハンバーガーを焼くことしかできない」

「それがつらい？」

「ツライというか胸がざわざわする。勇者殿の為に、まだ何か出来ることがある気がして」

でもそれが何かわからないとつげると、師匠が何故だか辛そうな顔をした。

「あんたってホントと人が良いのね」

「よくそう言われる。私は魔王なのにな」

そう言われるのがずっと不思議だつたが、最近その理由が少しだけわかつた気がする。

師匠は勿論ステイーブ達店の常連客、それにケリー・ヤルファやチャーリーなど、私の周りには私に良くなってくれる人が沢山いる。そう言う人たちが私に優しくしてくれるから、きっと私も良い魔王になれたのだろう。

「まあ、時々悪い魔王も出てしまうが」

「私嫌いじゃないけど、悪い魔王も」

「師匠は優しいな」

「悪趣味なだけかも」

そう言つて微笑んで、それから師匠はもっと側に寄つてもいいかと尋ねる。

もちろんだと答えると、師匠は私の腕の中に収まった。

師匠の体はとても小さい。けれどその存在は私にとってとても大きくて、だからこうしていると永遠に放したくないと思つてしまつ。あまり度が過ぎると怒られるので、もちろん永遠は無理だが。

「魔王?」

「どうした?」

「あんたが言つてた勇者にしてあげられること、私にはわかるつて言つたらどうする?」

勿論知りたい。それで勇者殿が助かるなら是非知りたい。

そう言つと、師匠はあんたらしいと笑つてくれた。

「じゃあかわりにせ、今日は私の側にいてくれる?」

「いつもいるだろ?」

「いつもより、もつとずっと側にいたい」

「すまない、さすがの私も融合の魔法は使えない」

代わりに前々から打診している心臓を食すのはビックリだと提案したが、またしても却下された。

腹に入れれば誰よりも近くにいらっしゃると思ったのだが、そういうのは嫌いらしく。

「いいから、黙つてそのまま私の側にいなさい」

「心得た」

「あと、人がこないうちにキスもしてくれる?」

喜び勇んで首筋にキスを落とすと、そこは嫌だとつねられた。

師匠はスキンシップを好むタイプだが、場所によつてはとても可愛い反応をする。それを見るのが好きでついつい、私はこうして彼女の弱点にキスをしたくなるのだ。

「キスならここにして」

そう言つて師匠が唇を指さすので、私は彼女の望みを叶える。

いつもは私からねだることが多いので、今日のキスはとても嬉しいかった。

「これでいいか?」

「いつも思つけど、あんたつて魔王の癖にキスが上手いわね」

「チャーリーに教えて貰つてゐるからな」

途端に、師匠の表情が凍り付いた。

「やっぱりあんた達」

「あとステイプにも教わるぞ。ちなみに彼からは、裸になつたときのたしなみも良く教わる」

「ちょっと待て」

そう言つて、師匠は私のシャツを掴んだ。

「もしかしてその、そう言つ事してゐて話したわけ？」

「うむ。師匠とはいつも何をしてゐるのかと良く聞かれるのでな」

「洗いやらい？ 包み隠さず？」

「嘘は隠し事は良くないと師匠はいいつも言つだらうへ。」

だからだと微笑んだ直後、師匠が突然何かに気付き、そして悲鳴を上げた。

どうしたのかと振り向くと、いつの間にかダイナーの窓からみながこちらを眺めている。

眺めるどころかはやすのような声援を送つてゐる者も多い。

若干一名、チャーリーだけは泣きながらガラスを叩いていたが。「もしかして、ここにいる全員に私達のあれやこれを話してゐるわけじゃないよね？」

「話しているぞ。皆私の友人だし、色々と氣にしてくれるのだ」「ありがたいことだと笑つた直後、いつもよりも激しい一撃を顔面に食らつた。

## Episode 60 またね

勇者殿の旅立ちは朝が早かつたので、見送りは私と師匠の一人だけだった。

ケリーだけは誘つたが、すぐに帰つてくる奴を見送る趣味はないと言つて来なかつたのだ。

故に朝日に染まるダイナーの前に立つのは3人だけ。  
少し寂しい気もしたが、お陰で私と師匠は時間をかけて勇者殿と抱擁を交わすことができた。

「世話になつたな」

そう言つ勇者殿の表情は晴れやかで、でもそれを見ていると私は何故だか不安になる。

昨夜、師匠に酷く殴られて意識を失つたとき、私はまたあの夢を見てしまつたのだ。

今の勇者殿同様、夢の中の勇者殿はランボー並みに武装していた。にも関わらず、夢の中の彼は新しい魔王に破れてしまつたのだ。  
それをただ見ていることしかできないのは酷く辛かつた。私が本気を出せばあんな魔王などひとひねりなのにと思うのに、私は何も出来ないので。

「そんな顔をするな、魔王を倒したらまた戻つてくる」

隠しきれない不安を悟られ、勇者殿はそう言つて微笑んだ。

「それにケリーとも約束したしな。私が見事魔王を打ち倒して帰つてきた暁には…その…」

「まさか約束取り付けたの！」

と師匠が興奮すると、勇者は10代の少女の様に頬を赤らめもじもじする。どうやら図星のようだ。

「相手があんたなのは微妙だけど、ケリーが前向きになつたのは嬉しいな」

「最後まで一言余計な小娘だ」

口は悪いが、二人はそう言つて微笑みあう。

その笑顔に何故だか不安が膨れあがつたとき、唐突に、師匠がとんと私の肩を押した。

「じゃあ結婚祝いに、魔王を貸してあげる」

その声は師匠の物で、私は我が耳を疑つた。

「貸すとはどういう事だ？」

「あなたが自分で言つたんでしょ、新しい魔王より自分が強いつて」

言つた。だが魔王に元に行くところのはつまり、私もまたこの世界を去ると言つことである。

「いいのか？」

そう尋ねた瞬間、私は今更のように、自分の胸に生まれたひとつ無意識のうちに、私は勇者殿に同行したいと願つていたのだ。

それこそ、私が彼にできる最大の恩返しであると、多分私は心のどこかで気付いていたのだ。

「行きたいつて顔してたしね」「そうなのか？」

私も今氣付いたのにと言つと、師匠が呆れた顔で笑う。

「私はあんたよりずっと、あなたの気持ちに聰いわよ」

そう言つて、師匠は背伸びをして私の唇にキスしてくれる。

「今一緒に行かなかつたら、きっとあなたは凄く後悔する気がするの」

「でも師匠をまた一人にしてしまうのだぞ」

「その分、昨日一緒にいて貰つたでしょ？」

「でも離ればなれになるなんて、彼氏失格だ」

「むしろここで行かなかつたらそれこそ彼氏失格よ」

それにあんたは絶対帰つてくるから。

そう言つて微笑む師匠の体を、私はきつく抱いた。

「至らぬ彼氏ですまない」

「至らないなんて思つてない。あなたは十分すぎるくらいこよ

「師匠も十分すぎる彼女だ」

「わかつてゐじやない」

そういう師匠と深い口づけを交わし、それからもつ一度私は約束する。

「どんなに遠くに行つても、必ず帰つてくれる」

名犬ラッシーや3匹荒野の行くのよう、最後は絶対ハッピーハンドだと言つと、師匠は笑つてくれた。

「つていうわけだから、うちの犬をよろしくね」

師匠が私の肩をもう一度押すと、勇者が目を潤ませながら頷いた。

「心得た」

そう言つて勇者殿は魔石を持った腕を高く上げる。

この世界に来たときと同じように、変化は突然だった。

それに驚いていると、師匠が私と繋いでいた手を離す。

「またね」

そう言つ師匠は、彼女らしい強くて優しい笑みを浮かべていた。だから私は大きく頷いて、そして勇者殿と共に世界の狭間を飛び越える。

するとそこはもう、懐かしい魔力に満ちた別世界だった。本当にあつけない。でも寂しさはない。

それを不思議に思いつつ、私はダイナーもルート66もない暗い荒野に目を向ける。

どうやらここは、勇者殿が住む町の近くらしい。

「……しかし、本当に良かつたのか？」

今更のように尋ねられ、私は笑顔で頷く。

「もちろんだ」

彼について行くと決めたのは私だ。そして誰よりもそれを望んだのは師匠だ。

とはいえたもちろん、不安がないわけではないが。

「でも、出来るだけ早く倒して帰りたい」

色々限界なのだと云うと同時に、私の腹が情けない音を立てた。

「朝食を食べたばかりだろ？」

「勇者殿との別れが辛くて喉を通らなかつたのだ。故に酷く空腹なので、既に胃が師匠のハンバーガーを恋しがつている」

「なら街で食堂をさがすか？」

ありがたい申し出だが、許可無く自分以外の者が作った料理を食べるなど師匠には言われている。

料理人の血筋故か、師匠はとても可愛いらしい嫉妬をするのだ。

「それよりも、街に市場があるだろ？」「

尋ねれば、丁度朝市の頃だと勇者殿が答える。

「なら魔王の城に乗り込む前に、パンと牛挽肉とタマネギとレタスとトマトとチーズとピクルスを買おう」

ついでに勇者殿の家のキッチンを貸して欲しいといつと、彼は呆れ顔を笑顔に変えた。

「お前は本当にハンバーガーが好きだな」

「つむ。だから魔王討伐に向かう時は、是非おやつにハンバーガーを持つて行きたい」

それさえあればきっと、私は楽勝で魔王に勝てる。

師匠の手作りでないのは残念だが、彼女に教えて貰つたハンバーガーが胃にあれば、きっと私に敵はない。

## Last Episode 「あーアホらしい。やつをじ歸れり」

まるで始めから誰もいなかつたかのよう、「魔王と勇者の姿はこの世界から消えた。

見得を切つた物の、やはり彼らのいない世界はとても寂しい。でもそれでも寂しさに耐えられるのは、彼らは帰つてくると信じているからだ。

そして一人でも立つていられる強さを、きっと魔王がくれたからだ。

そんな柄にもない臭いことを思つてしまつ自分が唐突に恥ずかしくなり、私は慌てて考えを打ち消す。

「あーアホらしい。さつさと帰ろり」

どうせあいつ等はすぐに帰つてくる。なうば静かに過ぎりせる田々を満喫すべきだ。

そう思い直し、私は車のキーを取るためにダイナーへと戻つた。

「あ、おかげり。遅かったな」

そして、私は思わず立ちつくした。

「は？」

その上口からでたのは、そんな間抜けな言葉だった。

なにせその言葉の先にいたのは、つい先ほど田の前で消えた魔王その人だつたからだ。

「忘れ物でもしたの？」

尋ねて、そこで私は魔王の衣服が僅かに汚れている事に気が付く。まさかと思ったが、どうやらそのまさかのようだった。

「全部終わつたので帰つてきたのだ」

「でもまだ10分くらいしか……」

「それはよかつた！ 予想より時間がかかってしまったので師匠が寂しがつていないかと心配したのだ」

「でも10分だし」

「こことあちらでは時間の流れが違うのだ。私の感覚では、10時間も師匠と離れていたことになる」

そう言つて魔王は、私の温もりを確かめるよつてギュウッと抱きしめてくる。

寂しかつたのだろうと言つ事はその手つきでわかつたが、10時間というのは短くはないがあまり長い時間でもない気がする。

とはいへ、恋しいと思われていたのは正直嬉しいが。

「でも怪我も無さそうで良かつた」

「色々と大変ではあつたが、戦闘時間は少なかつたからな」

「そうなの？」

「城に突入してから魔王を打ち倒すまでにかかつた時間は、約15分ほどだつたのだ。そしてこれほど早く魔王の城を落とした者は未だかつていないうらしい」

勇者達の記録を塗り替えてしまつたと、魔王はなにやら誇つている。

「今度魔王つて強いのよね？」

「でも私はもつと強い魔王だからな」

「ちなみに、残りの9時間45分は何してたの？」

「最初の3時間は勇者殿の家でお茶をしたり、おやつに持つて行くハンバーガーを焼いたりした」

しかしピクルスが手に入らなくて困つたと酷く落ち込む魔王。

そこまで落ち込む事ではないと思うのだが、それを指摘するとハンバーガーにいかにピクルスが必要かを熱く語り出すので今はやめておいた。

「魔王を倒したら一度お昼時でな。我が城の者達がどうしてもといふので2時間ほどランチを取つた。むろんここでも私はハンバーガーを焼いた」

やつぱりピクルスはなかつたという魔王。こんな事なら銃と一緒に持たせてやるんだつたかも知れない。

「だが問題はピクルスよりもこの後だ。ランチの途中で「悪の親玉」

とかいうやつらがあらわれてな。言つてる言葉が難しそぎて私には意味不明だつたが、なにやら世界転覆を企んでいたらしい。故に勇者殿が喧嘩をふっかけてしまい、食後のデザートがめちゃくちゃになってしまったのだ

その上自慢のバナナショイクを馬鹿にされたので、戦う事にしたと魔王は言つ。

「そいつ強かつた？」

「うむ、倒すのに4分23秒ほどかかった」

そして服が汚れたと、私が買ってあげたシャツの裾をいじる。心配してちょっと損した。

「そして残りの3時間で私を帰そうとしない城の者達を説得し、残り1時間半かけて師匠へのおみやげを選んだ」

「おみやげなんていいのに」

と言いつつ本当は結構嬉しい。もちろんそれは、彼のおみやげを見るまでの話だが。

「皆の者、入つてこい」

魔王がそう言つた途端、ダイナーに入つてきたのは大勢の男達だ。それもモンスター映画でしかお目にかかるないような、不気味な外見の。

これが人形とかだつたら凄く嬉しいが、生きていると話は別である。

「あの、おみやげって……」

「魔王に仕える為に生み出された武将と使用人だ。師匠はモンスター好きだし、前に私が城のことを話したら使用人が羨ましいと言つていただろう?」

勿論連れてくるとは思わなかつたから言えたのだ。

その上まさか、使用者の容姿がここまでマニアックで邪悪だとは普通思わない。

「これと暮らしてて、ホラー映画を怖がるあんたが不思議だわ……」

ちょっとした皮肉のつもりだったが、勿論魔王がそれに気付くわ

けがない。

「だつて彼らは襲つてこないからな」

それにチエーンソーも使えないしホッケー・マスクもかぶらないから平氣だという。たしかにジェイソン以外はそこまで怖がつていなかつたなど今更納得したが、そんな事を考へている場合ではない。どうやって追い返そう。

ただそれだけに集中しようと眉間に皺を寄せれば、何を思つたか魔王はぽんと手を打つ。

「もう一人、重要な奴を忘れていた」

「いや、もうこれだけで十分つていうか……」

「遠慮するな。彼が一番の目玉なんだ」

そう言つて魔王が手招きすると、モンスター達の後ろから、魔王に似た一人の少年が出てくる。

年は10歳くらいで、奇跡的にその外見は普通。いやむしろ凄く可愛い。

とはいえ酷く無愛想であるのは気になるが。

「まさか、隠し子とか言わないわよね」

「惜しいな」

惜しいってどういう事かと尋ねようとするが、今度は小さな魔王に神を見るような目で見られた。

「彼は私の次の魔王だ。私以上に感情がないが、持参していたハンバー・ガーやを与えたところ懐かれてしまつてな！」

どうやら魔王というのはどいつもこいつも、馬鹿みたいにハンバーガーが好きらしい。

「あちらの世界にいても殺されるだけだし、師匠へのプレゼントに連れてきたのだ」

「でもそいつ、凄く残忍なんじゃなかつた？」

「そう言つ命令を受けていただけだ。それに、ハンバー・ガーやを愛するものに、悪い人はいないと師匠が言つていただろう」

言つたかもしれないが、だからって拾つてくるなと言いたい。

「それにほら、結婚には子どもが必要だわ~」

「何処で得たのよその情報……」

「一コースだ。子どもが出来たから結婚すると、有名な俳優が喋つてこるのでみてな」

少しさはまともになつてきたかと思つたが、やはり魔王は魔王だ。勘違いの仕方が斜め上すぎた。

「と言つことで師匠、子どもを連れてきたので私と結婚しよう。また馬鹿なことを。そう思つてため息をこぼしてから、私はふと気付く。

無駄な前置きがついてはいたが、それはまるでプロポーズのようだった。

いやむしろプロポーズ以外の何者でもない。

「あの……それ……」

本気がと尋ねるより早く、魔王に唇を奪われた。

周りの目が物凄く気になるが、彼の口づけに弱い私は抵抗する間もなく、魔王の腕の中に閉じこめられてしまつ。

「頼む、私だけの師匠になつてくれ」

そんなことを言われて、断れるわけがない。

もうなつてると小声で答えて、私も魔王の背に腕を回した。

すると魔王は彼らしい優しい笑みを浮かべ、もう一度私の唇を奪つた。

途端に周りが騒がしくなる。不気味な外見ではあるが、彼らはどうやら魔王の幸せを願う心優しい部下達らしい。

「でもさすがに、こんだけ連れてこられても困るんだけど」

「安心してくれ。さすがに家には入りきらないので、ガレージの下の武器庫と魔王の城の入り口を繋げさせて貰つた。必要なときだけ呼び出せる様、魔法の電話も設置したのでプライバシーも問題ないぞ！」

何勝手なことをしてるんだと思いつつも、魔王にしては知恵が働いた氣もする。

「でもせっかく邪魔者がケリーの所に行くと思つたのにな」と思わずため息をこぼしてからふと私は気付く。

「そう言えばじいさんは？」

まさか死んだのかと尋ねる私に、魔王が違うと笑う。

「ケリーの所だ。今頃あちらも、結婚が成立している頃だらう」きつとじいさんは、モンスターではなくちゃんとした指輪や花を持参していることだらう。意地つ張りな勘違いじいさんに見えるが、彼は意外と手回しが上手い。

それが羨ましいと思つていると、唐突に何とも情けない腹の音が聞こえてきた。

音の方を見ると、チビ魔王がじつと見ている。

「お腹空いたの？」

尋ねると、チビ魔王がこくりと頷く。

「色々言いたいことはあるけど、とりあえず腹！」しらえね。本場のハンバーガーの味、今日は特別に教えてあげる

ついでなので他に腹が減つている奴はいるかと尋ねると、皆遠慮がちに目を伏せる。

「嘘つきは、問答無用でたたき出すわよ」

その言葉に、魔王の部下達が物凄い勢いで手を挙げだした。そしてその目には恐怖の色が浮かんでいる。

その脅え方は異常だ。もしかしたら私のいないとこうで、魔王が何か吹き込んだかもしれない。

これは後で絞らねばと思いつつ、私は皆に席で待つよつに指示した。

「魔王は手伝いなさいよ」

「もちろんだ、師匠の隣は私の物だからな」さり気なく恥ずかしいことを言われて赤くなつていて、チビ魔王が窓際のボックス席に腰掛けるのが見えた。

そこは初めて魔王がこの店に現れたとき、彼が座った場所だった。あれから色々なことがあつたと、魔王との奇妙な日々を思い出し

ていると、突然魔王に抱き寄せられた。

「師匠、例え息子でも浮氣はダメだぞ」

「しないわよ」

だつて私は、もうずっと前からこの駄目な魔王が大好きなのだ。  
あの窓際のボックス席に座つて、泣きながら私のハンバーガーを  
食べているのを見たときからずっと。

「ねえ魔王？」

「どうした師匠」

そう言う魔王はやつぱり、魔王なのに無駄に格好良くて、でもどこか間抜けな顔だ。

その顔を見ていると、なんだか肩すかしを食らつた気分もある。  
魔王の意志を尊重しようと、こちらは涙を隠して彼を送り出した  
というのに、結局今日も私の朝は変わらない。

でもその変わらない朝が、彼の隣でハンバーガーを作れる当たり  
前の朝が、本当は何よりも嬉しい。

ちょっとばかり邪魔者は増えてしまったけれど、私と魔王の奇妙  
な日常の中では、それもまた当たり前の一部になつていいくことだろ  
う。

「魔王はこれからもずっと、私のハンバーガー沢山食べててくれる？」

「もちろんだ。死ぬまで食べ続けると約束しよう」

むしろハンバーガー以外は食すなど言われても構わない。

そう豪語する魔王をぽかりと殴つて、野菜も食べろと笑顔で怒つ  
た。

## サイドオーダーについて

### はじめに

サイドオーダーは、本編直後から始まる番外編集です。

元々こちらはお題を使用した習作ですので、今回も「お題」から話を作つてこようと思つております。

ただし今回のお題はお題提供サイトではなく読者様から頂いたお題になつてあります。

以前こちらに設置をせて頂いていたアンケート（一部メッセージージなどから）より頂きました「読んでみたいお話」が今回のお題です。頂いたお題全てとは一きませんでしたが、設定として矛盾が出ない物以外は使わせて頂こうとおもつております。  
魔王らしさを損なわないように多少アレンジするかと思いますが、何卒ご了承頂ければと思います。  
また掲載場所は基本こちらになりますが、一部作品は、ムーンライトノベルズや短編小説として投稿させて頂く場合がござります。こちらもあわせてご了承頂ければと思います。

### 内容

魔王と師匠とチビ魔王のほのぼのとした日常がメイン。

本編直後から、二人に子供が生まれるまでの期間のお話

### お題一覧

見やすいようにまとめていますが、こちらの掲載順と挑戦順は同じではありません。

(書けた物から掲載していくスタンスで行こうと思つております  
また+ のお話が入るため、話数が増える可能性がございます。

### 【魔王と師匠とチビ魔王中心のお話】

カッコいい魔王が師匠を翻弄するお話

魔王の誕生にまつわるお話

魔王と師匠が旅行に行くお話

魔王が師匠のママに会いにいくお話

師匠のダイナーが世界進出するお話

魔王と師匠が喧嘩をするお話（ライスバーガーは邪道か否か）

魔王と師匠とチビ魔王がホラー映画を見るお話

ちび魔王VSジョイソンのお話。

魔王と変身魔法の話（今回はちゃんとした物に変身する）

悪い魔王の話

魔王と結婚指輪のお話

魔王と師匠の結婚式のお話

魔王と師匠の新婚生活のお話

魔王と師匠の子供が生まれるお話

### 【魔剣と聖剣が中心のお話】

恋する魔剣の話その1（恋する魔剣と魔王のアドバイス）

恋する魔剣の話その2（魔剣と聖剣のデート）

恋する魔剣の話その3（告白の話）

### 【魔王の部下達が中心のお話】

外見が怖い部下達を魔王が変身させるお話

魔王の部下達が、資金稼ぎのためホラーハウス開業するお話。

### 【チビ魔王とギャング団中心の話】

チビ魔王とギャング団のお話その1（アルファが魔王を怒りせよ  
うと画策する）

チビ魔王とギャング団のお話その2（スタンダードバイニーに憧れる）  
チビ魔王とギャング団のお話その3（魔王城を秘密基地にしよう  
とする）

### 【その他の人々の話】

チャーリーにモテ期が来るお話（セックスマピールが強い女性に  
言い寄られて困惑する）

ツボ売りのマイクわんのその後のお話

幼い師匠とおじさんの思い出に関するお話

勇者がケリーの卵焼きにケチをつけるお話

勇者とケリーの結婚式のお話

### 【R1-8】

魔王と師匠のはじめてのお話 他6話

ムーンライトにて選考掲載中 タイトル：「サイドオーダーに  
甘い夜を」

上記お題について

・上記にまとめたお題の文章や内容は、原文から一部変えさせて頂  
いております。

- ・実際に頂きました声（お題）につきましては、  
なるべく各話の後書きに原文のまま載せていくと思つております
- ・1話内に複数のお代を使用する場合等ありますので、書かれている以外のお題もいくつかあります。

### 【ただいまの更新情報】

- Episode 01は、12月12日0時より掲載開始予定
- R指定小説「サイドオーダーに甘い夜を」は2話田まで掲載中  
相変わらずの緩さで進むと思いますが、よろしければ再びのお付き合いよろしくお願ひします。

## Episode 01 冷めたハンバーガー

「あのさ魔王」

「何だ師匠」

「この関係、そろそろ終わりにしない?」

腕の中の師匠がこぼした一言に、私は思わず言葉を失った。

「そろそろ距離を置くべきだと思うの。私達、このままじゃ絶対ダメだと思つ」

師匠を抱く腕に力を込めたが、いつもは優しく抱き返してくれる師匠の顔は酷く真剣だった。

反論は聞かないと暗に言つてゐるのは明白で、だからこそ私は彼女の髪に顔を埋めた。

「いやだ、師匠を手ばなしたくない」

「でも私、もう無理なの」

「師匠が側にないと、私は生きていけない」

「大丈夫、今までだつてちゃんと生きてきたじゃない」

「師匠と出会う前の私は生きてなどいなかつた! 師匠に出会い、師匠のハンバーガーを食べたからこそ私は私として存在することが出来たのだ」

「オーバーよ」

「オーバーではなく事実だ。だから側にいてくれ、ずっと」

そう懇願すると、師匠は真剣な顔を僅かにゆるめ、私の頬に指を走らせる。

その指使いがあまりに官能的だったので、そのまま口づけをしてくれるのかと思った私は、師匠に顔を寄せる。

「……やっぱダメ」

だが師匠が行つたのは、私の頬をつねるという不思議な愛情表現だつた。

「それも悪くないがキスが欲しい」

「だめ、もつ甘やかさないって決めたの」

その上師匠は、一瞬の隙をついて私の腕から逃れてしまつ。

「そんなに私の側がいやなのか？」

「嫌じゃないけど……、けじさすがに最近ベタベタしそぎー。」

だから距離を置きましょとこいつ師匠。勿論反論したが、彼女は酷く頑なになつていた。

「あつちの世界から戻つてきてから、魔王ちょっとおかしいわよ」

「おかしいと言われるのは前からだ」

「頭とか性格は勿論おかしいんだけど、愛情表現もおかしくなつたつて言つてるのー！」

どうおかしいのか尋ねようと腰を抱き寄せれば、そつにとひりがおかしいと師匠が真っ赤になる。

「帰つてきた日から、ずっと私にくつついてるじゃない。朝も昼も夜も仕事中も！」

「師匠の居ない世界に長い」といたせいか、師匠を感じていないと不安になつてしまうのだ

「あんたがあつちに行つてたの、たかだか10時間くらいだつたじゃない」

「私には100年に思えた」

「だからつてもう1ヶ月よ！ 1ヶ月ずっと抱きつきっぱなしー！」

私はぬいぐるみでもお気に入りのタオルでもないと主張して、師匠は私の腕を無理張り剥がす。

勿論私は抗議しようと思つたが、師匠は華麗に無視した。

「このままじや普通の生活もままならないし、あんたには申し訳ないけどルールを決めたいの」

「ルール？」

「抱きついて良く述数は1日5回まで、時間は1回10秒までにして」

足りるわけがない。もつともつと師匠を感じていなければ死んでしまう。

「今まで散々くつついてたんだから、これくらいがまんしなさい」

「無理だ」

「3回に減らすわよ」

「……じゃあ、せめて7回」

「わかった。じゃあ今からね」

と言う師匠の笑顔があまりに可愛かったので、私は思わず彼女を抱きしめそうになった。

しかしこまだ朝の7時半である。ここで1回使つたら後で足りなくなってしまうかも知れない。

中途半端に腕を伸ばしたまま、硬直する私。

それをおかしそうに見つめた後、師匠は猫のようにするつと腕を抜け出でしました。

「やっぱり死んでしまひ」

かといって、スキンシップを強要して師匠に嫌われるのも嫌である。

一進も三進もいかなくなつた私は、ソファーでセサミストリートを見ている我が後継者のもとへ向かつた。

「チビ殿、私はどうすればいいのだろうか」

彼の横に座りそつ教えを請えれば、彼はただ黙つて、私の膝をぽんと叩いた。

「耐えるというのか……しかしそれは酷く辛いのだ」

チビ殿は静かに頷き、そして今度は2度膝を叩いた。

励ますようなその仕草は、「あるがままを受け入れよ」と言つてゐる。そしてたぶん、彼の声は正しいのだろう。

「チビ殿がそう言つなら、我慢しよう」

私は渋々現実を受け入れることにした。

けれどチビ殿に言われたのにもかかわらず、結局私は半日たつ前に7回を使い切つてしまつた。

仕方なく、その日は夜まで師匠の代わりに師匠のハンバーガーを抱いて過ごすことになつたが、冷めたハンバーガーは師匠の温もりと

まみじ廻へ、逆戻しが募つただけだった。

## Episode 02 モンスター

グルメ番組に紹介されてから上り調子だった店の売上げが、最近急に下がり始めた。

原因は勿論、客足が減ってきたからである。

「ホリデーシーズンも終わったしね。でも常連さんは来ててくれるし、赤字じゃないから良いわよ」

と師匠は余裕であるが、私にはひとつ気がかりなことがあった。客足が減つたのは、どう考へてもこの世界に帰還した直後からのだ。

更に細かく思い出すと、勇者殿と入れ替わりに我が部下達がウエイターとして店に立つた頃からである。

師匠は彼らを快く迎えてくれたが、やはり魔の物である彼らを受け入れられぬ者も多いようなのだ。

店を覗き、ギヤーと叫んで逃げていく人を何人も見たのでたぶん間違いがない。

師匠が愛でているので忘れていたが、我が部下達はみなホラー映画に出てくるモンスターにそっくりな恐ろしい容姿である。

ジョイソンさんと違つて殺意がないので怖くはない。ないけれどもやはり、夜中に突然声をかけられると私でもビックリすることがある。

常日頃から怖がりすぎだと師匠には言われるが、もしかしたらこれは普通の感覚なのではないだろうか。  
客達の中にもこの手の容姿が怖いと思つ者がいるのではないだろうか。

師匠にまた馬鹿にされるのは嫌だったが、私は意を決しその旨を師匠に伝えてみた。

「彼らが店に迷惑をかけているなら城に戻す。実際客も少なくなつたので、私と師匠だけでも店は回せるし」

「でもあいつ等、あんたの役に立ちたいって意気込んでるし  
「城の管理もあるし仕事には事欠かない。私がお願いすれば、彼ら  
も文句は言わぬと思うぞ」

それに同意するように遠くで成り行きを守っていた部下達が頷いたが、師匠だけは何故だか酷くがっかりした顔をした。

その顔で私は気付いた。

師匠はたぶん、彼らを見ながら仕事をするのが楽しいのだろう。師匠はモンスター映画が好きだし、特にフランケインショタイン似のコック長をうつとりする目で見ていることがある。

その視線があまりに熱っぽいので、自分だけを見て欲しいとこり思つていたくらいだ。

「……だつたらほら、怖くないようになメチエンさせてあげれば良いんじゃないから。そうすれば逆に店の売りになると思うし」「ならば人間の姿にするのはどうだろ？ 皆化身の術は使えるし、なかなかのハンサム揃いだぞ」

「それは却下」

返事のあまりの早さに私は確信した。

「もしかしなくとも、師匠はあの者達が今の姿で働くことを望んでいるのか？」

違つわよとうわづつた声に私は確信した。

「気持ちはわかるが師匠らしくないぞ、店の経営に関する事には今まで厳しかったのに」

私の指摘に師匠が驚いた顔で私を見上げる。

「今後も店を続けていくとしたら問題点は改善した方が良い。父君から受け継いだ大切な店なのだろう？」

「珍しくまともな声で言わないでよ」

師匠の口から出たのは文句だったが、そのこえに霸氣はない。

それからきつかり5分ほど沈黙があつたが、師匠はついに折れた。

「……わかつた。店員の件はちゃんと考える」

「本当か？」

「本当はわかつてたの、お客様さんが逃げた原因はあなたの部下だつて事。でも誘惑に勝てなかつたというか、長年の夢が叶つて浮かれてたといふか」

「長年の夢といふ言葉が気になつて尋ねると、彼女はどこか懐かしそうな顔で苦笑する。

「私がホラー映画を好きになつたのってね、小さな頃ハロウインの度にパパや店の人たちがモンスターの格好をしてたからな」「小さな師匠が喜ぶので、毎年彼らは恐ろしい格好をしていたのだといふ。

師匠にとつてそれは最も楽しくて幸せな記憶で、だから寂しくなる度にホラー映画を見てそれを思い出していたというのだ。  
「パパの仮装はいつもジョイソンで、おじさんは狼男だつたな。他にもミイラとかフランケンとか沢山いて凄く楽しかった」「だからそのときとよく似た今の状況を、彼女は捨てられなかつたのだといふ。

「そういう事情なら無下に出来ないのもわかる。よく知りもしないですまない」

「いいのよ。それにこいつのは、ハロウインの時だけだからお客様さんも喜ぶのよね」

そう言つ師匠は彼女らしこそっぽうとした笑顔を浮かべていた。  
けれど私はなんだか悲しく見えて、仕事中は抱きつき禁止令を出されていてもかかわらず、師匠をぎゅっと抱きしめてしまつた。

「ハロウインになつたらまた部下達に来て貰おう。それに師匠が望むなら、店が終わつた後に彼らとハンバーガーを食べたりお喋りしたりしてもいい

「いいの？ あんたなんかそつちのけで、他のモンスターに抱きひちゃうかもしないわよ」

「それは嫌だ。……だけど、師匠の寂しさが癒えるなら私は我慢する

でも本当に嫌なので可能な限り避けて欲しいといつと、師匠は明るく笑つた。

「抱きつくるのはあんただけ。それに私、あんたのあの悪魔っぽい姿も好きよ」

「あれを愛でるなんて本当に師匠は凄いな」

「だから今度、私だけのために変身してくれたらそれだけで十分」

「師匠が望むがままに」

そう言つて口づけを落とすと、師匠もまた私に口づけを返してくれた。

「あ、でも解雇する前に人間に変身するトコみたい。ハンサムなら、確かにお客様さんもふえるかもしねないし」

ついでに私も嬉しいという師匠に、私は思わず青くなる。

「師匠はハンサムが好きなのか？」

「女の子はみんなそうよ」

と言つなり我が部下達の所にかけていく師匠。その前で次々変身する部下達に黄色い悲鳴が上がる。

正直、私はかなり凹んだ。

「魔物の姿ならまだしも、その姿で顔を赤らめるのはとても嫌だ……」

人間の中に囮まれている師匠はどこか遠い世界の住人のように思えて、酷く心がざわついてしまったのだ。

しかし怒ることも出来ず動搖のあまりオロオロしていると、唐突に救世主が現れた。

不意にエプロンの裾を引かれて視線を下げるど、店の隅で一人ハンバーガーを食べていたはずのチビ殿が、私の前に絵本を押し出していた。

差し出されていたのは、チビ殿が大好きなクッキーモンスターの本である。

そこで私は気付く。人でも魔物でもない姿で、なおかつ師匠が興味がない物に変身させればいいのではと。

「人形にしよう、それがいい！」

叫ぶと同時に魔力を増幅すると、我が部下達はモンスターを模した人形へと変化していく。

なかなか愛らしいその姿だが、師匠の黄色い悲鳴はなかつた。代わりにチビ魔王が嬉しそうに駆け出ると、部下達をぎゅっと抱きしめる。

「あの子が一番うわてね」

楽しそうに人形と戯れるチビ殿に、師匠もこの変身に文句はつけなかつた。

けれど結局、人形が動き回る店というのもそれはそれで不気味だつたようで、店員は元のとおり私と師匠の二人だけに収まつた。少しだけ寂しくなつた氣もしたが、師匠が私だけを見てくれるのは凄く嬉しかつた。

## Episode 02 モンスター（後書き）

### 【お題[元]】

「師匠のホラー映画好きには理由があるのでしょうか？」  
「魔王の部下達がお店に立つても大丈夫でしょうか？お密さん減り  
そうですね！（でもちょっと覗いてみたい…）」

オーダーと質問、本当にありがとうございました。

魔王様と奥方様の肖像画を城に飾りたいのですが、よろしいでしょうか。

と我が部下が久方ぶりにガレージの床下から出てきたはある夜のことだった。

少し前まではダイナーの店員として働いて貰っていたのだが、その恐ろしすぎる容姿の所為で客足が減ってしまったため、しかたなく解雇したのは先週のことである。

部下達のなかでも、今私の前にたつ髑髏姿の執事は酷く落胆していたのだが、どうやらウエイターに変わる新しい仕事を見つけたらしい。

「近頃は人間達との関係も良好になつてきましたので、城の一部を魔王博物館として開放したいと思っています。是非一度中を見てみたいという人間が沢山いますので」

そして執事を中心とした我が部下達取り組んでいるのは、魔王城の改装であるという。

「そこでは非、博物館の入り口に魔王様のお姿をどーんと飾りたいのです」

「別に構わないが、どうせならチビ殿を飾つた方が良いのではない  
か？ 私は時代遅れの魔王だ」

「そんなことはございません。なにせ魔王様は世の理をただし、悪しき定めに縛られた我々を解放してくださつたお方。今こうして魔王城のカーテンの色や絨毯の模様について好きなだけ考えを巡らせることが出来ているのも、あなた様のお陰なのです」

「カーテンと絨毯の事ばかり考えているのが幸せとは、君は変わつ  
ているな」

まあハンバーガーと師匠のことばかり考えている私に言えた言葉  
ではないが。

「私、こつ見えてインテリアと言つやつにはまつてゐるの」  
「ええ。正直魔王様と共に戦場をかけたあの懐かしき頃より、今の方  
が楽しゅうござります」

「ならばいい」

表情筋がないが、いつもより幾分高いその声に嘘は無さそうだつ  
た。

「肖像画については師匠に確認を取らつ。彼女が良いとこつなら、  
私も許可しよう」

「ならば一度レプリカがありますので、奥方様にして確認頂きましょ  
う」

「いつもより軽やかな足取りで執事が絵を取つてくるのと、師匠が  
居間にやつてきたのはほぼ同時だつた。

奥方の絵を飾りたいという話にはとても恥ずかしそうにしていた  
が、見ても良いと頷くその顔は穏やかだ。うん、反応は悪くない。  
「僭越ながら私がこの手で描かせて頂きました。お一人の勇士と愛  
情表現を織り交ぜ、なおかつ莊厳な雰囲気に仕上げてみたのですが  
いかがでしょう」

わざわざ赤い布で覆つたその絵画をソファーに立てかけ、彼は口  
ホンと咳払いをする。

「タイトルは暴力、愛情、勝利でござります」

そうして現れたのは、とても躍動的に描かれた師匠と私だつた。  
「魔王様を力強く殴りつけている姿がとても印象的でしたので、そ  
ちらを絵にしてみました。また奥方様の魅力はその強さとたくまし  
さにあると伺つておりましたので、上腕二頭筋の方も実際より三割  
り増しにしてみましたがいかがでしょう」

私はなかなか悪くないと思つた。だが師匠は、何故か怒りのオー  
ラを体中から放出させながら静かに絵に近づいた。

「……却下」

と言つ声は低く静かだつたが、常日頃から魅力的だと感じている  
勢いのあるこぶしが絵に巨大な穴を開ける。

「なつななななな！」

あまりのことにカタカタと顎を上下させる執事。その頭蓋骨を、  
師匠がガシツと掘んだ。

「悪きが無いからって、年頃の少女を『リラ』みたいに描いて良いと思つてるわけ……？」

その声は穏やかにも聞こえたが、執事の頭蓋骨に小さなひびが入つた気がした。

こういう時の師匠には何を言つても無駄なので、執事には申し訳ないが私も黙つていいほか無い。

「つつ次こそは奥方様が気に入る絵を描きます！だから命だけは！命だけは！」

「次またこんなふざけた絵を描いたら、割るから」

絶対です。もうへマはしませんと執事が泣き叫んだ。涙は見えないが、私にはわかる。あれは絶対に泣いている。

けれど結局その1週間後、執事の頭には小さなヒビが増えていた。それどころか毎週のようになにかヒビは増えていくので、私はこいつ執事に助言をした。

「……君のデザインセンスは素敵だと思うが、師匠は多分こうこう笑顔の方が素敵だぞ」

とこつそり師匠の隠し撮りコレクションの一枚を渡せば、執事は泣くほど喜んだ。

そしてその後完成した絵画を見て、師匠も喜んだ。絵の中の師匠は輝くような美しさだったのだ。

ちなみに私の方は何故か師匠の隠し撮りをしている姿で描かれていたため、背中とカメラしか描かれていなかつた。

けれどそれはよく特徴を捉えていたので、私はとても満足した。

## Episode 03 嵐像画（後書き）

とても素敵な魔王と師匠のイラストを頂いたので、「絵」をお題に1本書いてみました。

頂いたイラストは、本日よりページ下部に追加しましたweb拍手の方に掲載させて頂いております。

執事の描いた物とは違い凄く素敵ですので、よろしければ是非覗いてみてください。

（拍手の方はPCのみの仕様となっております、携帯から）覧の方はお手数ですがパソコン上よりアクセスをお願い致します。何卒ご了承下さい）

## Episode 04 プレイボーイ

久しぶりに店に来たチャーリーは、まるで吸血鬼の餌食にでもなつたかのような青白い顔をしていた。

「どうしたんだ、最近店に顔を出さないとおもっていたが、まさか病気にもなったのか？」

やつれた表情でフランフランと店に入ってきたチャーリーは、何か言いたげに口をぱくぱくさせている。

見かねた私が腕を貸し、空いているソファ席に彼を座らせたところ、「優しくしなくて良い」と口を挟んだのは師匠だった。

「自業自得だから良いのよ」

途端にチャーリーが泣き始めたので、私は彼にナップキンを渡しつつ師匠にどういう意味かと尋ねる。

「そいつ、彼女が出来たの」

「おめでとう」

と思わず喜ぶと、途端にチャーリーの泣き方が激しくなった。

「泣くほど嬉しいのか？」

「それは最初だけだつたみたいよ」

他の客がいないからか、師匠は不機嫌そうな表情を隠すこともなく、私とチャーリーの前にどっかりと腰を下ろす。

「先月くらいにウチに凄い転校生が来たの、プレイボーイに乗つてるような巨乳ちゃんなんだけど、そいつがあるついとかチャーリーにお熱なのよ」

「ふれいぼーい？」

「チャーリーがあんたに見せてたでしょ、可愛くてセクシーな女子が沢山載っている雑誌」

その雑誌から飛び出してきたような女子生徒が転校してきただけでも驚きなのに、あらう事がチャーリーに惚れた事で師匠の高校は大騒ぎなのだという。

私はチャーリーの事をとてもいい男だと思っているが、学校での評価は違つらしい。似合わないというのが大多数の意見なのだそうだ。

「男どもにはやつかまれるし、女子には絶対体当たつて白い目見られるし、こいつ孤立しちゃつたのよ」

「それが寂しくて、こんなに瘦せてしまつたのだな」

「くりくりと頷きながら、チャーリーは師匠を見つめた。

「あと、特に白い目で見るから」

チャーリーの言葉は、どうやら師匠へ向けられた物のようだ。  
だがせっかくチャーリーが一言発したといつのに、師匠の方は相変わらず不機嫌な顔である。

「別にあんたには何の感情もないけど、どう見てもおっぱい目當てで付き合つてるってわかる男に、温かい目なんて向けられないわよ」「付き合つてないよ！ 確かに言じ寄られてるけど、俺は好みじゃない！」

「とかいつて最初の頃天狗になつてたのは誰？ それに四六時中、あの子のおっぱいばかり見てるじゃない」

「だつてあんなでかいんだぞ！ 男だつたら見つけつだろ！ なあ！」

と同意を求めるので、私は胸の大きな師匠を想像してみた。  
「たしかに、師匠の胸がスイカほどあつたら目が放せないかも知れない」

「変な妄想しないでよ！ つていうか、好きでもない女の子の胸を見るのが問題なの」

「好きでもない女の子の胸は、べつにいらないな」

「ほり」

と何故だか師匠が得意げになると、チャーリーは裏切り者と私を見む。

「やう言えるのはあれを目の前で見てないからだ。ちょっとまつてろ、今あいつを呼ぶから」

なら飲み物を用意せねばと私は思つたが、師匠はまたしても酷く腹を立てていた。

「やめてよ、ここには呼ばないで！」

「君がこいつは安心だつていつたんだろう？」  
言うなりチャーリーは携帯電話をかけ、師匠は機嫌の悪い顔で頬杖をついている。

むくれる師匠も美しいので、私はチャーリーの彼女が来るまでそれをずっと眺めていた。

それから15分ほどしたとき、チャーリーの言う彼女が現れた。  
「お待たせしました」

と現れた少女は、背丈こそ師匠と変わらないがやたらと肌が出ている。暑がりなのかとチャーリーに聞いたが、彼は無視した。

「どうだ、凄いだろう」

私の前に彼女を座らせ、チャーリーが声を潜めていった。  
「それより薄着なのが気になる。暑がりなら窓を開けて差し上げたのだが」

私も声を潜めたつもりだが、目の前の少女は慌てて首を振った。

「そんなことはないです、むしろ寒いくらい」

「それはいけない。チャーリー、彼女に上着を貸してやれ

「何で俺が」

「彼氏なら貸すのが普通だろう」

「彼氏じゃないてば！ それにお前が貸したつて良いだろう」

「そうしたいのは山々だが、私は身も心も服すらも師匠に捧げると決めたのだ。彼女に無断で、我が身の一部を分け与えることは出来ない」

私の言葉にチャーリーは忌々しそうな顔をし、少女の隣に座つていた師匠はガツツポーズをした。理由はわからなかつたが、師匠が喜んでいるので私の判断は間違つていなかつたようだ。

「良いわよ、貸してあげても」

「ならこちらを是非使ってくれ。君は胸周りが大きいが、私も大柄

なので窮屈ではないはずだ」

そう言つて上着を差し出すと、少女はもじもじしながら頬を染める。だが体をゆらすたび、胸元の開きすぎたTシャツから胸がこぼれそうになり、非常に危なつかしい。

「失礼する」

胸が出でては大変だと思い、私は上着のボタンを素早く留めた。こうすればいくらもじもじしても胸がこぼれることはないだろう

「君はもう少し大きいサイズの服を着た方が良い。その方が暖かいし、肌を冷やすのは健康にも良くない」

途端に、何故だかチャーリーが忌々しそうな顔をし、またしても師匠が得意げに笑つた。

その後少女にハンバーガーを駆走しながら、私は彼女から学校での二人のことを聞いた。

学校での師匠の様子を聞けるのは凄く楽しかつたが、チャーリーは最後まで浮かない顔だった。

その上気分も悪くなってしまったのか、チャーリーは「ちょっとトイレ」と話の途中で席を立つてしまつ。

けれど正直、彼がどうしてここまでやつれているのかがわからぬ。

確かにやつかみは辛いだろうが、少女はとても礼儀正しく素敵な女性だ。彼女に愛して貰えるなら、もつと幸せな顔をしてもらいたいと思つた。

だがその答えは、意外なところからもたらされた。

「あの、魔王様……」

そう言つたのは少女だった。しかし少女には、私が魔王であることは告げていない。

「あの、気付いていらっしゃいませんか？ 私魔王城のメイドの、吸血コウモリです」

思わず目を会わせた私と師匠の前で、少女が小さなコウモリに変身する。

いやむしり、じゅらに床つたところのが正しげだろ。

「魔王様と奥方様を騙してしまい申し訳ありません。ただ私、あの人にほこの姿を見せたくない」

そう言つと、メイドは小さな体を更に小さくする。

「思い出したぞ。確か以前、君にはチャーリーのことを相談されたな」

「はい、私のような小わき者の言葉に耳を傾けて頂き、本当に感謝しています」

途端に師匠が説明しりといふ顔をしたので、私は慌てて彼女とのやり取りを思い出す。

「前にチャーリーの好きなタイプを聞かれたのだ」

「もしかしてあんた、そのときプレイボーイ見せたんじゃないでしょうね」

「みせた。チャーリーが熱い眼差しを送つてるのは、あの雑誌の少女か師匠だけだ。しかし変身しているとはいえ、師匠とチャーリーがイチャイチャするのは見たくないのだ」

それでプレイボーイを見せたのかと再度確認されたので、私は大きく頷いた。

「しかしその事をすっかり忘れていた。なるほど、通りでやつれるわけだ」

逆にメイドが健康そうなわけだと笑うと、師匠が呆れる。

「あいつには良い薬だけど、殺さないよにしてあげてね」

「勿論です。それに実を言うと、私チャーリーさんじゃなくて、チャーリーさんの血が好きだったみたいなんです。今日魔王様とチャーリーさんのやり取りを見て、やっぱりちゃんと氣づかってくれる殿方のほうがいいなって思つたんです」

わかるわ、と同意する師匠にメイドもはしゃぐ。

「それにチャーリーさん、私と一緒に不健康になつたりやつてします？ 最近味も落ちちやつたし、そろそろ潮時かなつて思つてたんで

と言うなり、以前チャーリーを振った師匠に彼の上手い振り方を教えて欲しいとメイドは尋ねる。

それを見ていると、女性の心変わりの早さはちょっと怖いなと思った。いつか師匠に飽きられないよう、沢山愛されねばとも思った。

そしてその後、メイドは帰りの車の中で早速チャーリーを振り、翌日にはフットボール部の血の多い彼氏を見つけたらしい。チャーリーが彼女のおっぱいだけを愛していたように、メイドも彼の血だけを愛していたのだなどわかつたが、それを告げるとチャーリーがまた瘦せてしまいそうだったので、私はそれを言わないことにした。

## Episode 04 プレイボーイ（後書き）

### 【お題】

「チャーリー、セックスアピールが強い女性に会って寄りれる」

「モテるチャーリーが見たいです」

「モテても不憫なチャーリーが見たいです」

「モテてもいいけど、最後は振られて欲しいです」

など、ここには書ききれないほどの「チャーリーは不憫なままでいてやる」の声より

オーダーとメッセージ、本当にありがとうございました。

## Episode 05 新年

「師匠、今すぐ私の服に火をつけてくれないか?」  
と眞面目にお願いしたのに、師匠は生「マリ」でも見るような目を私に向けた。

「私は本気だぞ」

「だから反応に困ってるんじゃない」

朝から何を言い出すんだと呆れながら、師匠は私の入れたコーヒーを啜つている。

素つ氣なくされるのはなんだかとても悲しかったので、私は慌てて彼女の手からコーヒーを奪つた。

「言い忘れていたが、今日は私の世界での新年なのだ」

「そうなの?」

「だから火をつけてくれ」

「大事な説明が抜けてるからやり直し」

師匠の冷静な言葉にはっと気付く。そうだ、私はいつもいつも言葉が唐突すぎる怒られるのだ。

「私の世界では、新年の朝、好きな女性に火をつけて貰うのが決まりなのだ」

「火つて本物の」

「うむ。付け方は魔法でもたいまつでも火矢でもなんでもいいぞ」「どれも無理なんだけど」

と言いつつ、師匠は今更のように私が正装しているのに気が付いてくれた。

「その侍みたい服、どうしたの?」

「城から持つてきた。是非師匠に火をつけて貰つてこいと、城の者達があつらえてくれたのだ」

「高そなんだけどそれ」

「高い服に火をつけるのが良いのだ」

だから火をつけてくれと迫ると、師匠は仕方なさそうに立ち上がつた。

「でも家の中だと危ないし、外行くわよ」

そう言つて師匠は私と一緒に裏庭に出る。するとなぜか、そこはもう焦げ臭かつた。

「あつちもラブラブね」

と師匠が目を向けていたのは、隣の家の裏庭である。

プールのあるそこはケリーの家で、私達が覗いたとき、丁度勇者殿が火だるまになりながらプールに飛び込んだところだった。

「おや、あんた達もかい」

そう言つてやつてきたのはケリーだ。

見ると彼女は、なにやら大層な重火器を持っている。確かにそれは、以前師匠が勇者殿に上げた秘密兵器の一つだ。たしか火炎放射と言うやつである。

「結婚したてで熱々なのは良いことだが、さすがに火炎放射器はやり過ぎだ。炎の魔法だつてもつと威力が小さい」

とやんわり主張したが、ケリーは大丈夫だと自信満々だ。

「勇者は頑丈だと自分でいつてたんだ」

「確かにこちらの世界の人間よりは頑丈だが……」

「それにこいつには丁度イライラしてたんだ。同棲を始めてからずっと、やたらとベタベタしてくるのが正直うざつたくてね」

しかしイライラしていたからといって火炎放射器はやり過ぎだと師匠も提案したが、ケリーはあまり大事だと捕らえていないようだ。

「もうすつきりしたからこれ返すよ。あとプールも使って良いから、好きに燃やしな」

「というと、ケリーは勇者殿を引き上げる事もせず家に帰つてしまつた。

死んではないようだが、水面に浮かぶ勇者殿はなんだかもの悲しい。

「今のを見ても、まだ燃やして貰いたい?」

「……ちょっと、怖くなってきた」

「ねえ、燃えるのって服じゃなきゃ駄目なの？」

火炎放射器を足下に置き、代わりに師匠が掴んだのは私の腕だ。そのまま引き寄せられるようにキスをすると、確かに燃えるよう体が熱くなる。

「こっちの方が良いな」

「ならこっちにしよ。私もなんか、たまには格好いいあんたとするのも悪くないし」

と言いつつ師匠は私の服を撫でる。

「格好いいか？」

「日本映画も好きなの。だからこういうこつ格好、ちょっとといいなって「ならよかつた。師匠が気に入つたと言えば、燃やさなくてても皆文句は言うまい」

それから私は師匠を抱き上げ、彼女に火をつけて貰つたために家に帰つた。

燃やされるよりこっちの方が全然良かつた。だがあまりに良すぎて、私も師匠も勇者殿のことをすっかり忘れていた。

思い出したのは翌日で、私達が慌ててプールに向かつと勇者殿はまだ浮いていた。

さすがに死んでしまったかと思つたが、愛に痺れていただけで彼はちゃんと生きていた。

燃えるような愛を受けてもなお生きているとはさすが勇者殿だ。

私も彼を見習い、来年は師匠に火炎放射器でちゃんと火をつけて貰おうと決意した。

## Episode 05 新年（後書き）

新年1作目なので、お題とは別に書いてみました。  
1／2誤字修正しました。（「指摘ありがとうございました」）

それはある夜のことだった。

深夜1時をすぎたダイナーに客はおらず、私と師匠はそろそろ店を閉めようとしていた。

「  
師匠、大変だ

震える声で師匠を呼んだのに、師匠の返事は「なー」「ー」と語り全く緊張感のない物だった。

「たまご云々」

「そして金曜日だ！」

だから?」

あわせると13田の金曜日だ！ ジュイソンなんの田だ！」

卷之三

は低い。

いくらその手のモンスターに耐性があるとはいっても、この落ち着きは問題だ。

モリシキノカタガタ  
モリシキノカタガタ

「師匠はもう少し一三田の金曜日のことを真剣に考えるべきだと思

۱۰۷

〔 二 〕

「アレは映画よ映画。本当

「これは時画。時画、本当にいい! 之前に教えておいた感じで、確かに私があまりに怖があるので、師匠がそう言つて安心させてくれ

でも正直、私はその言葉を信じきれていなかつた。

「でもハロウインの時は沢山いた」

「アレは仮装でしょ、映画を見てそれをマネしているだけ」

「だがその中に本物がないと言いかれるか？ 今もいるわけがないという油断をついて、突然やってくるかもしれないんだぞ」「来ないわよ」

「いや来る！ 何たつてこの店には魔王も勇者も現れたのだぞ」「私の言葉に、師匠は反論が出来なくなつたようだ。

けれど私の主張に賛同する気もないのか、最後は「あほらし」と言づ台詞を置いて、店の片づけに戻ってしまった。

けれどもちろん、私は諦めきれなかつた。

前々から思つていたが、師匠は殺人鬼を愛するあまり彼らへの危機感がなさすぎる。

ここは一度、彼らが殺人者であることを思い出した方が良いだろう。

そう思い立つと、私は師匠が厨房に出向いた隙にトイレへと駆け込んだ。

ホントは怖いのでやりたくない。やりたくないが、師匠の恐怖を煽るにはジョイソンさんに会うにが一番だ。

だから私は思い出したくもないジョイソンさんの格好を思い浮かべながら田を開じ、同時に変身の魔法を発動する。

次に田を開いたとき、田の前に立っていたのは恐ろしい殺人鬼であつた。

まぎれもなく、それはジョイソンさんである。まあ正確にはジョイソンさんに変身した私だが、師匠に何回も映画を見せられているだけあり、割と細やかな部分までよく似ているので本人とそう大差はない。

これならばきっと、師匠も驚くだろう。そしてジョイソンさんへの恐怖を思い出し、私の話に耳を傾けてくれるに違いない。

自分の変身に満足した私は、鏡を見ないように氣をつけつつ、早くトイレを出ようとした。

だがそのとき、突然師匠の怒鳴り声が響く。

「バレバレなんだからね！　あんたがやつてることはない！」

ギヨツとして動きを止めれば、師匠の声は更に乱暴になる。

「変身して怖がらせようとかホント安易！　そのチヨーンソーもどうせ魔剣君に変身とかさせたんでしょ？　そういう部下の使い方、私どうかと思うわ」

そうか、魔剣にチヨーンソーに変身して貰えればさうに変装の出来が良くなるのか。

さすが師匠は頭が良い。と私は思わず唸つたが、どうやら師匠の怒りを増幅させてしまったらしい。

師匠が何かを蹴り飛ばす音がして、彼女の口調が更に乱暴になる。「黙つてないでなんか言いなさいよ！　っていうか、チヨーンソーのエンジンかけてんじやないわよ馬鹿！　泥が飛ぶでしょ、泥が！」

今度はフランパン的な鈍器を振りまわす音が響き、それから聞き覚えのない低いうなり声が響く。

「っていうかあんた自身が汚い！　それになんか臭い！　店に二オイついちやうから、今すぐ外出なさい！」

確かに薄汚いがそこまで言つほどではないだろ？と私は凹んだ。それに香りは魔法で付けられないので、今の私は師匠と同じセルで買ったシャンプーの二オイのはずである。

だが自分に香りを確認していると、私は不意に違和感を感じた。どうも、師匠が喋っている相手が私ではないような気がしたのだ。気配を伺えばホールにもう一人誰かがいる気がする。だが客のようでもない。客はあるなチヨーンソーのような音をさせながら店に入ってきたりはしない。

「……あの師匠」

意を決して、私はトイレの扉を押し開けた。

その瞬間、師匠が私を見てギャーと叫び声を上げた。怖がらせるために変身しておきながら、ちょっとだけ傷ついた。

「ほつ本物！？」

その上、手にしていたフライパンを振り上げるので、私は慌てて変身を解いた。

「驚かせてすまない、私だ！」

「えつ魔王？」

「あつ安易なことをしてすまない。ただ私は師匠に、どうしてもジョイソンさんのことをちゃんと考えて欲しくて、それで……」

まだ話の途中だったのに、師匠は私の口を押さえる。

「待つて、あんた今までトイレにいたの？」

「ああ、変身のチェックをしていた」

「じゃあ、今ここにいたのは誰？」

「ここにいて？」

「私の前で、あんたと同じようジョイソン格好をして、チェーンソー持つてたやつよ」

「私に聞かれても困る。私はずっとトイレにいた」

思わず二人で顔を見合わせて、それからあわててダイナーの外を見た。

しかしそこに人影はなく、念のため一人で店の周辺も確認したが荒野にも人影はない。

だが店の中には泥まみれの足跡が、私と師匠の耳には、今もまだあのチヨーンソーの音が残っている。

「師匠」

「何よ」

「ジョイソンさんのこと、眞面目に考える気になつたか？」

「むしろもつ考へたくない」

師匠はそう言つが、さすがの師匠も生のジョイソンさんは怖かつたのだろう。

13日の金曜日が終わるまで、彼女は珍しく自分の方から私にずっとくつづいていた。

トイレやお風呂にもついてきて欲しいと頼む師匠は酷く可愛くて、その上怖がつてることを必死に隠そうとするところ更に愛らしく

て、私は喜んで彼女の側にいた。

ジョンさんは怖いが、こつしてくつこていられるなりー3

日の金曜日も悪くないと私は思った。

# Episode 6 13日の金曜日(後編)

【お題】  
特になし（2012年1月13日金曜日記念）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7736s/>

魔王はハンバーガーがお好き

2012年1月13日18時17分発行